

東京藝術大学

大学案内 2017



Tokyo University of the Arts

# 東京藝術大学

## 大学案内 2017

<http://www.geidai.ac.jp>



Tokyo University of the Arts

目次	1
学長挨拶	2
東京藝術大学の使命と目標	3
沿革	4
組織・教員	6
美術学部・大学院美術研究科	8
	10
	12
	14
	16
	18
	20
	22
	24
	25
	26
	28
音楽学部・大学院音楽研究科	30
	32
	33
	34
	35
	36
	37
	38
	39
	40
	41
	42
	43
	44
	45
	46
	47
	48
	49
	50
大学院映像研究科	52
	54
	55
大学院国際芸術創造研究科	56
	58
大学の取り組み	60
組織・施設	66
キャンパスライフ	70
	72
	74
入試情報	76
お問い合わせ	78
Web出願	79
キャンパス/アクセス	80

本学は我が国唯一の国立総合芸術大学として、創設以来、世界水準の教育研究活動を展開し、数多の傑出した芸術家を育成・輩出するとともに、国内外における広範かつ多様な芸術活動や社会実践等を通じて、我が国の芸術文化の継承・発展に寄与してまいりました。

とりわけ、近年においては、芸術系大学で唯一となるスーパーグローバル大学やCOI拠点に選定されたことをはじめ、本年度スタートした第3期中期目標期間における国立大学への重点支援においても、文部科学省より最高評価をいただくなど、国家戦略を牽引するナショナルセンターとして確固たる地位を構築しています。

これらの輝かしい実績や、誇りある伝統を振り返るにつけ、学生諸君のたゆまぬ鍛錬はもとより、歴任教職員及び同窓生の並々ならぬ努力、各界の皆様方のご尽力に心から敬意と感謝を捧げたいと存じます。

さて、この夏のリオデジャネイロのオリンピック、パラリンピック終了後は、2020年の東京オリンピックに向けて、日本の芸術や文化が世界の注目を集める絶好の機会が訪れます。

本学としても、2020年を歴史的なターニングポイントと位置付け、多様な活動を組織的に展開するとともに、これをゴールとしては捉えず、あくまでも通過点として、我が国の芸術文化の可能性を、より創造的・持続的に飛躍・発展させ、広く世界へと展開できるよう尽力していきたいと考えています。

美術、音楽及び映像の芸術諸分野に加え、本年度新設された国際芸術創造研究科も含めた、世界にも類を見ない総合芸術大学としての実力や魅力を存分に発揮すべく、教職員が一体となり、文部科学省や文化庁をはじめとする関係機関等とも緊密に連携しながら、優れた芸術家育成や我が国の芸術文化力の発信、さらには、世界の芸術文化の発展に貢献できるよう、邁進し続けてまいります。

平成28年4月  
東京藝術大学長

澤 和樹

## 学長挨拶

President's Foreword

東京藝術大学は、その前身である東京美術学校、東京音楽学校の創立以来120余年間、我が国の芸術教育研究の中核として、日本文化の伝統とその遺産を守りつつ、西欧の芸術思想および技術を摂取・融合を図り、幾多の優れた芸術家、中等教育から高等教育にわたる芸術分野の教育者・研究者を輩出してきました。

こうした歴史的経緯を踏まえ、我が国唯一の国立総合芸術大学として、創立以来の自由と創造の精神を尊重し、我が国の芸術文化の発展について指導的役割を果たすことが、東京藝術大学の使命であると考えています。

また、この使命の遂行のため、下記のことを基本的な目標としています。

- ・ 世界最高水準の芸術教育を行い、高い専門性と豊かな人間性を有した芸術家、芸術分野の教育者・研究者を養成する。
- ・ 国内外の芸術教育研究機関や他分野との交流等を行いながら、伝統文化の継承と新しい芸術表現の創造を推進する。
- ・ 心豊かな活力ある社会の形成にとって芸術のもつ重要性への理解を促す活動や、市民が芸術に親しむ機会の創出に努め、芸術をもって社会に貢献する。

## 使命と目標

The Mission and Aims of TUA



### 澤 和樹 (さわ・かずき)

ヴァイオリニスト  
東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程  
器楽専攻(ヴァイオリン)修了。  
平成25年4月から副学長、平成26年4月  
音楽学部長を経て平成28年4月から現職。

国内外で多数の音楽コンクールや演奏会  
に参加し、ロン＝ティボー国際コンクール  
第4位やミュンヘン国際コンクール第3位、  
和歌山県文化賞受賞などの功績がある。ま  
た、平成27年5月には英国王立音楽院名  
誉教授に就任している。

撮影：永井 文仁



## 組織・教員

Organization / Teaching staff

# 東京藝術大学

学長 澤 和樹

理事・副学長（教育担当） 安良岡 章夫

理事・副学長（研究担当） 保科 豊巳

理事（総務・財務・施設担当）・事務局長 門岡 裕一

理事（学長特命担当） 国谷 裕子

副学長（企画調整担当） 光井 渉

副学長（広報・渉外担当） 松下 功

学長 澤 和樹

理事・副学長（教育担当） 安良岡 章夫

理事・副学長（研究担当） 保科 豊巳

理事（総務・財務・施設担当）・事務局長 門岡 裕一

理事（学長特命担当） 国谷 裕子

副学長（企画調整担当） 光井 渉

副学長（広報・渉外担当） 松下 功

学長 澤 和樹

理事・副学長（教育担当） 安良岡 章夫

理事・副学長（研究担当） 保科 豊巳

理事（総務・財務・施設担当）・事務局長 門岡 裕一

理事（学長特命担当） 国谷 裕子

副学長（企画調整担当） 光井 渉

副学長（広報・渉外担当） 松下 功

学部
美術学部

**絵画科** 80名

**日本画専攻** 25名

**油画専攻** 55名

**彫刻科** 20名

**彫刻専攻** 13名

**工芸科** 30名

**工芸専攻** 26名

**デザイン科** 45名

**デザイン専攻** 30名

**建築科** 15名

**建築専攻** 18名

大学院
美術研究科
修士
博士後期

美術学部長
大学院美術研究科長
**日比野 克彦**

**絵画科 日本画専攻**

齋藤 典彦 教授
植田 一穂 教授
梅原 幸雄 教授
手塚 雄二 教授
吉村 誠司 教授
廣瀬 貴洋 助教

**絵画科 油画専攻**

油画
小林 正人 准教授
小山 穂太郎 教授
坂口 寛敏 教授
杉戸 洋 准教授
保科 豊巳 教授
坂田 哲也 教授
O JUN 教授
版画
三井田盛一郎 准教授
シュナイター・ミハエル 准教授

壁画
中村 政人 教授
工藤 晴也 教授

油画技法・材料
齋藤 芽生 准教授
秋本 貴透 准教授

―
寺内 誠 助教

**彫刻科**

木戸 修 教授
林 武史 教授
大巻 伸嗣 教授
深井 隆 教授
原 真一 准教授
北郷 悟 教授
森 淳一 准教授
小塚 照己 助教

**工芸科**

彫金
飯野 一朗 教授
前田 宏智 准教授
鍛金
篠原 行雄 教授
丸山 智巳 准教授
鍍金
赤沼 潔 教授
漆芸
三田村 有純 教授
小椋 範彦 教授
陶芸
豊福 誠 教授
三上 亮 准教授
染織
菅野 健一 教授
上原 利丸 准教授
ガラス造形
藤原 信幸 教授
工芸基礎
三神 慎一朗 助教

**デザイン科**

環境・設計
清水 泰博 教授
視覚・伝達
松下 計 教授
機能・設計
機能・設計
長濱 雅彦 教授
企画・理論
藤崎 圭一郎 教授
情報・設計
須永 剛司 教授
空間・設計
橋本 和幸 准教授
―
豊福 誠 教授
三上 亮 准教授
染織
菅野 健一 教授
上原 利丸 准教授
ガラス造形
藤原 信幸 教授
工芸基礎
三神 慎一朗 助教

**建築科**

建築設計
藤村 龍至 准教授
中山 英之 准教授
トム・ヘネガン 教授
環境設計
北川原 温 教授
ヨコモソマコト 教授
構造計画
金田 充弘 准教授
建築理論
光井 渉 教授
野口 昌夫 教授
―
橋本 圭央 助教

**先端芸術表現科**

**先端芸術表現専攻** 22名

**芸術学科** 20名

**芸術学専攻** 21名

**グローバルアートプラクティス専攻** 18名

**先端芸術表現専攻** 22名

**先端芸術表現科**

たほ りつこ 教授
伊藤 俊治 教授
日比野 克彦 教授
佐藤 時啓 教授
長谷部 浩 教授
古川 聖 教授
鈴木 理策 准教授
小谷 元彦 准教授
八谷 和彦 准教授
小沢 剛 教授
飯田 志保子 准教授
田中 一平 助教

**芸術学科**

美学
松尾 大 教授
川瀬 智之 准教授
日本・東洋美術史
佐藤 道信 教授
松田 誠一郎 教授
片山 まび 准教授
須賀 みほ 准教授
西洋美術史
越川 倫明 教授
田邊 幹之助 教授
佐藤 直樹 准教授
工芸史
片山 まび 准教授
太田 智己 助教

美術教育
本郷 寛 教授
木津 文哉 教授
小松 佳代子 准教授
宮永 美知代 助教
西山 大基 助教
美術解剖学
布施 英利 准教授

**指揮科** 2名

**指揮専攻** 3名

**邦楽科** 25名

**邦楽専攻** 9名

**楽理科** 23名

**音楽文化学専攻** 29名

**音楽環境創造科** 20名

**音楽文化学専攻** 29名

**指揮科** 2名

**指揮専攻** 3名

**邦楽科** 25名

**邦楽専攻** 9名

**楽理科** 23名

**音楽文化学専攻** 29名

**音楽環境創造科** 20名

**音楽文化学専攻** 29名

**指揮科**

高関 健 教授
山下一史 招聘教授
酒井 敦 助教

**邦楽科**

長唄三味線
小島 直文 准教授
長唄
味見 純 准教授
箏 曲（山田流）
土田 英三郎 教授
福中 冬子 准教授
西間木 真 准教授
吉川 さとみ 准教授
能楽（観世流）
関根 知孝 教授
能楽（宝生流）
武田 孝史 教授
邦楽囃子
盧 慶順 准教授
日本舞踊
露木 雅弥 准教授

**楽理科**

音楽文化学音楽学
植村 幸生 教授
大角 欣矢 教授
塚原 康子 教授
土田 英三郎 教授
福中 冬子 准教授
西間木 真 准教授

**音楽環境創造科**

音楽文化学音楽音響創造
西岡 龍彦 教授
亀川 徹 教授
丸井 淳史 准教授
音楽文化学芸術環境創造
市村 作知雄 准教授

**音楽文化学**

音楽教育
佐野 靖 教授
山下 薫子 教授
ソルフェージュ
照屋 正樹 教授
テジュネ・ローラン 准教授
応用音楽学
畑 瞬一郎 教授
音楽文芸
檜山 哲彦 教授
杉本 和寛 教授
大森 晋輔 准教授
侘美 真理 准教授

**文化財保存学専攻** 18名

**文化財保存学専攻** 10名

**文化財保存学**

保存修復
宮廻 正明 教授
荒井 経 准教授
木島 隆康 教授
籾内 佐斗司 教授
辻 賢三 教授
長尾 充 教授
保存科学
須賀 みほ 准教授
稲葉 政満 教授
桐野 文良 教授
塚田 全彦 准教授

―
鈴木 篤 助教

**文化財保存学専攻** 18名

システム保存学（連携）
佐野 千絵 教授
吉田 直人 教授
岡田 健 教授
朽津 信明 教授
佐藤 嘉則 教授
早川 典子 准教授

**附属図書館**

館長 松下 計

**附属古美術研究施設**

施設長 松田 誠一郎

和田 圭子 助教

**附属写真センター**

センター長 小山 穂太郎

永井 文仁 助教

―

岡本 明子 助教

**保健体育**

体育
高橋 亨 教授

**社会連携センター**

センター長 宮廻 正明

**言語・音声トレーニングセンター**

センター長 杉本 和寛

英語
磯部 美和 准教授

キム・コリンズ 助教

独語
ルーベン・ククリンスキ 助教

ディアナ・バイヤー=田口 助教

伊語
アレックスandro・ジェレグーニ 助教

仏語
弘語

エリック・ヴィエル 助教

**演奏藝術センター**

センター長 山本 正治

松下 功 教授

湯浅 卓雄 教授

大石 泰 教授

野口 千代光 准教授

岩崎 真 助教

**音楽研究センター**

センター長 檜山 哲彦

**芸術情報センター**

センター長 古川 聖

大谷 智子 助教

嘉村 哲郎 芸術情報研究員

中村 美恵子 芸術情報研究員

**藝大アートプラザ**

所長 木津 文哉

**保健管理センター**

センター長 内海 健 教授

田中 真理子 准教授

**グローバルサポートセンター**

センター長 三田村 有純

# ART

写真：美術学部構内のクスノキ

校内に樹木が多いのは「藝術の学園は茂林のある処でなければならない」という暗黙の合意が学校創立以来脈々と人々の心のなかに伝わっており、無下に枝を切ったり、人手を加えたりせず、自然に生い茂らせておくという東京美術学校時代の方針が受け継がれていることによる。

## ｜ 美術学部・大学院美術研究科 ｜

夢

好きなことを好きにだけやりたい。

興味があることをもっと知りたい。

知らない世界を見てみたい。

私

美術が好き。

美術に興味がある。

美術の世界をもっと見てみたい。

美

いつからか美術に関心を持つようになったあなたがいるけれども、いつからなのだろうと振り返ってみよう。

人はひとりひとりその人なりの時間を過ごしてきている。

同じような環境、情報の中で生活してきても、一人の私は、私なりの受け止め方があるから、きっと人の数だけの独自の美の世界があるだろう。

私たちの身の回りには美術の素になるものやことが沢山ある。それは、自然の中にあったり、生活の中にあったり、関係性の中にあったり、考え方、感じ方の中にあたり・・・。

そんなことを無意識であったり、時々すこし意識したりするうちに、今のあなたがここにいる。自分でも知らない自分がまだ自分の中にいるだろう。

美術で自分を探り、鍛え、育み、そして自分と社会をつなげていこう。

美という概念があるからこそ人間社会は存在している。

美という世界観があるからこそ人間はひとりでいられる。

美術は社会の全てと関連している。

美で自分という個人を築き上げ、その心、感性、知識、身体をもって、私たちの過去の歴史的文化、私たちが生活している現代の社会、私たちの未来を創造していく。

そしてこれからの美術を共に創っていく。

美術学部長

大学院美術研究科長 日比野 克彦

### ｜ 美術学部 アドミッションポリシー ｜

美術学部では、125年を超える歴史のなかで、美術の各分野において、時代を代表する作家、研究者、教育者を輩出してきました。

本学部は、こうした伝統のなかで培われた創造性を身に付け、新たな時代に対応し、優れたオリジナリティを発揮できる人材の育成を目的としています。本学部で学ぶ学生には、歴史のなかで蓄積された技芸と知識を修得し、さらにその成果を革新し、発展させ、広く世界の文化と社会のために貢献する能力が望まれます。

こうした理念を踏まえ、真摯な姿勢で、教員とともに研鑽を積み、美術の世界に、豊かな収穫をもたらす学生を広く求めています。

### ｜ 大学院美術研究科 アドミッションポリシー ｜

美術研究科では、これまで美術の各分野において、時代を代表する作家、研究者、教育者を輩出してきました。

本研究科は、こうした伝統のなかで培われた創造性を身に付け、新たな時代に対応し、優れたオリジナリティを発揮し、指導的な立場に立つ人材の育成を目的としています。本研究科で学ぶ学生には、歴史のなかで蓄積された技芸と知識を修得し、さらにその成果を革新し、発展させ、広く世界の文化と社会のために貢献する能力が望まれます。

こうした理念を踏まえ、自立した姿勢で研鑽を積み、国際的な見地から美術の世界に、豊かな収穫をもたらす学生を広く求めています。

# 絵画科 日本画専攻

## Japanese Painting

日本画材や道具に対する理解を深め、「日本画」の今後を担う問題意識と意欲を持ち、現代における絵画表現を追求する作家・教育者を育成すること、これが日本画専攻の使命であり、理念であると考えます。

今日、人々の価値観や生活スタイルの変化に伴い美術のみならず日本を取り巻く環境は大きく変化しています。このような変革期の中、自国の伝統文化への深い理解と考察は、表現に対する真摯な問いかけでもあり、真の国際化に向けての第一歩でもあると言えるでしょう。

### 学部1・2年次

1学年25名でのきめ細かい少人数教育を行います。基礎課程に相当する1、2年次では、写生を基本とした、幅広い課題に取り組み造形力を養います。また、様々な専門性を有した講師による、古典模写（「隨身庭騎絵巻」「絵因果経」「源氏物語絵巻」）、技法・材料研究、裏打ち講義、箔（鍍金、砂子）講義などを通じて日本画の伝統的な技法を修得し、素材や道具に対する理解を深めます。

### 学部3・4年次

発展課程としての3、4年次では、自主的に創作テーマを設定して自由課題に多く取り組み、作家活動に不可欠な企画力・発想力を育みます。さらに、3年次の版画/壁画実習、奈良・京都への古美術研究旅行等によって視野を広げ、多角的に日本画を学んでいきます。日本画技法材料の習熟度に沿って効果的に配された高度な実習・講義を通じて、基礎課程で習得した技法や表現力を発展させ、集大成としての卒業制作に取り組みます。

### 学部カリキュラム

- 〈1年次〉【必修科目】植物制作（百合・菊）、模写（隨身庭騎絵巻）、風景制作、静物制作、動物制作、人物制作、自画像制作（絹本）など
  - 〈2年次〉【必修科目】模写（絵因果経、源氏物語絵巻）、東北写生旅行、風景制作、人物制作、自由課題制作、絹本自由制作など
  - 〈3年次〉【必修科目】壁画/版画集中講義、人物制作、風景制作、自由課題制作、古美術研究旅行など
  - 〈4年次〉【必修科目】自由課題制作、人物制作（自画像）、卒業制作など
- ※1年次から大学院修士までは上野キャンパスで学習、創作研究を行います。  
大学院博士課程は取手がメインのキャンパスになります。

### 大学院 修士・博士

3つの研究室からなる大学院では、各研究室とも複数の教員の指導の下、学生それぞれの研究テーマに沿った創作研究活動を行い、さらなる造形力・創造力の養成、知識の習得を目指します。それぞれの研究室の特色を生かした国際交流展、素材研究、写生旅行、国宝伴大納言絵巻の模写事業も継続して実施しています。また、博士後期課程では創作研究のみならず論文執筆に取り組むことで、より高度な絵画表現の研究と専門的な知識・理論とを構築します。

学生数（2016年5月現在）  
〈1年次〉25名 〈2年次〉27名 〈3年次〉27名 〈4年次〉25名 〈修士〉25名 〈博士〉8名  
教員 手塚 雄二、梅原 幸雄、齋藤 典彦、吉村 誠司、植田 一穂、海老 洋、廣瀬 貴洋



<http://geidainihonga.tumblr.com/>



2



1

- 1 大学院生の修了作品(150号)制作
- 2 学部1年次の最初の百合課題制作
- 3 研究室の絵具箱(一部)
- 4 国宝伴大納言絵巻の模写



3



4

### 伝統を基盤とした現代絵画の創造

日本画専攻のカリキュラムは、ほとんど変わらずに受け継がれてきました。それは、基本的な指導方針が、時代時代の変化の影響を受けつつも、ものを丁寧にじっくり見つめ、写生を繰り返し、そこから発想したものを絵画化するということに重きを置いてきたからと言えます。このことは、作家個人の主張やイメージーションが先にあり、それに適した素材を選択し作品化する、という現代の美術の在り方とはどこか根本的に異なっているかもしれません。

日本画とは、いわゆる欧米の絵画とは異なった成り立ちをする、ある意味では工芸的とも言える側面を持っています。ものが主であり、自分は従であること。ものをじっくり観察し、ものから学ぶこと。この体験が日本画独自の感性と空間意識を育てていきます。この独特な感性を、岩絵具、和紙、膠など伝統的な素材を用いながら、時間をかけて1枚の作品として完成させていくのです。

もちろん、日本画が、この国の風土、言語、そこから生じる思考傾向からこそ生まれたという「限界」に意識的であることも必要でしょう。かつて共有されていた認識や感覚が、暗黙の了解事項ではなく、相対化され何でもありという視点からではなく、伝統的な素材や技法に立脚して日本画の基盤と未来を問うていくこと、制作者として深く思考していくことが重要であると私たちは考えています。



学部2年次の東北写生旅行

# 絵画科 油画専攻

Oil Painting

絵画科油画専攻では、多様なメディアにまで拡張された表現に対応するため、常に教育内容・体制を刷新してきました。現在は、絵画を中心に映像、造形、インスタレーション、そしてそれらを横断する表現の創作研究を行いながら、「絵を描く」ことの基礎を踏まえた、21世紀の現代に相応しい表現活動に挑戦する専門家の育成を目標としています。



### 学部1・2年次

1年次は「ドローイング」を通年の共通課題に据えながら、絵画の基礎的要素（イメージ・物質・行為・環境）を網羅した実技指導を受けます。また、フレスコ、モザイク、ステンドグラス、テンペラなど油画の成立以前の絵画材料・技術を学修します。2年次では1年次で学んだ絵画の基礎を踏まえ、絵画表現の歴史を構成するメディア・技術・知識について幅広く知る機会を得ます。年間を通して様々な選択カリキュラムが開設され、学年末には「進級展」を一般公開します。

### 学部3・4年次

専門課程においては、学生個々の自主的な創作研究が中心となり、「絵画表現」「素材と表現」「現代美術表現」の3つのコースに分かれて、自己の表現とその手段を展開・深化させていきます。3年次には、2週間にわたる奈良・京都を中心とする古美術研究旅行を実施し、障壁画などの絵画作品、建築、彫刻、庭園など様々な形式の古典芸術と出会う機会を得ます。このように、古典から現代にまで続く芸術表現の多様性に触れ、学生が自己の資質を発見し、独自の表現と手段を深めていく過程が学部の4年間であり、その成果としての「卒業制作」に4年次の1年間で充てます。

### 学部カリキュラム

- 〈1年次〉【必修科目】共通カリキュラム、選択カリキュラム、英語演習、写生旅行、アートバス、ポートフォリオ制作・レポート作成など
  - 〈2年次〉【必修科目】共通カリキュラム、選択カリキュラム、英語演習、進級制作、ポートフォリオ制作・レポート作成、久米賞受賞者展示など
  - 〈3年次〉【必修科目】特別演習、古美術研究旅行、コースカリキュラム（「現代美術表現」「素材と表現」「絵画表現」）、英語演習、ポートフォリオ制作・レポート作成、安宅賞受賞者展示など
  - 〈4年次〉【必修科目】コースカリキュラム（「現代美術表現」「素材と表現」「絵画表現」）、卒業制作・自画像制作、上野芸友会賞受賞者展示など
- ※学部1年～4年次は、主に上野キャンパスで学習、創作研究を行います。  
大学院修士博士課程は、研究室によって上野、取手キャンパスに分かれます。  
博士課程は、主に1、2年次は取手、3年次は上野がメインのキャンパスになります。

学生数（2016年5月現在） 〈1年次〉55名 〈2年次〉59名 〈3年次〉59名 〈4年次〉59名

教員 【油画】小林 正人、小山 穂太郎、坂口 寛敏、杉戸 洋、保科 豊巳、坂田 哲也、O J U N  
【版画】ミヒヤエル・シュナイダー、三井田 盛一郎  
【壁画】中村 政人、工藤 晴也  
【油画技法・材料】齋藤 芽生、秋本 貴透、寺内 誠

<http://geidai-oil.com/>



1



2



### 英語教育の充実

アーティストとして活動するために必要な英語を学ぶ、外国人講師による油画専攻独自の英語プログラムがカリキュラムに組み込まれています。渡航や海外での活動を想定しながらの実践的な授業内容で、国を越えた「ものづくり」におけるコミュニケーションを学ぶ場となっています。

### 石橋財団国際交流油画奨学生制度

本学の交換留学制度を活用し、毎年多くの油画の学生が海外留学にチャレンジしています。それに加え、夏休み期間に優秀な学生を海外レジデンス機関などへ派遣し、そのための渡航費や現地での活動資金などを学生へ援助する、油画専攻独自のプログラムも実施しています。



3

- 1 学部1年次実習風景
- 2 学部2年次作品教員批評会風景
- 3 卒業制作作品展示風景

### 大学院 修士・博士

版画、壁画、油画技法・材料の研究分野を含む13の研究室で構成される大学院修士課程では、自己の表現領域においてさらに専門的な創作研究を行い、担当教員による個別指導に加え、複数の研究室による共同企画や合同授業によって横断的な連携指導を受けます。また、学外から招かれた数多くのアーティスト、キュレーターや評論家による指導を通じて、他分野の専門領域に関する理解を深めることができます。博士後期課程においては、制作、理論双方を担当教員とそれを補佐する複数の教員によって、より高度で総合的かつ複合的なグループ指導の下、研究を進めます。

### 油画

- 第1研究室：自分の絵で羽ばたいて行けるよう、各自徹底的に作品&人間力の追求。
- 第2研究室：「イメージを媒介する素材/メディア」の研究。フィールドワークを通しての創作の実践。
- 第3研究室：展覧会の企画運営を行い、アートによる地域連携の可能性を研究する。
- 第4研究室：修士1年、新しいフレームを見つけること。修士2年、はっぱとかなつむりと全体をテーマに制作。
- 第5研究室：プロジェクト型の授業を中心として現代表現を創作する。
- 第6研究室：種々の支持体によるドローイング、絵画制作および発表。

学生数（2016年5月現在） 〈修士〉60名 〈博士〉20名

<http://geidai-oil.com/>



### 版画

銅版、リトグラフ、木版、スクリーンプリントの主要4版種の実習を通して基礎的版画技術を習得し、各版種の特徴的な表現の理解を深めるとともに、印刷媒体としての出自から、様々な芸術ジャンルを包括しながら歩んできた版画の歴史的、社会的背景も踏まえた創作研究を進めます。また、木版をはじめ、国際的にも評価の高い日本での版画研究を志す留学生を、アジア諸国はもとより世界各地から多数受け入れており、国際交流を通じて、幅広い視野と世界的な感覚を養いながら、現代的な版画表現の可能性を探求します。

学生数（2016年5月現在） 〈修士〉17名 〈博士〉3名

[http://www.geidai.ac.jp/department/fine\\_arts/painting#3](http://www.geidai.ac.jp/department/fine_arts/painting#3)



### 壁画

第1研究室では、現代美術、アートプロジェクト、コミュニティアート、メディアアート、アールブリュット等、多様化するアートの可能性・実効性を「アート×産業×コミュニティ」の3つの分野を横断的に教育研究します。また、包摂的社会における文化芸術政策・事業の在り方をプログラム化し実践的に研究制作します。第2研究室は、幅広い造形表現を目指す人材の育成に努めています。環境と素材、表現の関係を基本に、作品が成立するまでの過程を複合的に研究することによって様々な条件に対応できる表現能力を身につけます。またインターンシップ授業では、パブリックアートに関する理論と実践力を重視した専門性の高い授業を行っています。フレスコ、モザイク、ステンドグラスの工房を備えた研究室です。

学生数（2016年5月現在） 〈修士〉20名 〈博士〉3名

第1研究室  
<http://m-lab.org/>



第2研究室  
<http://galla.artscene.jp/>



### 油画技法・材料

「見ること」の究極的な意味を探求し、現代において絵画制作を行っていくための礎石となる「ものの見方」を築き上げることを目標に、西洋古典のテンペラ画・油画作品などの模写制作、支持体、地塗り、絵具の自家製法などの実習、講義を通して、絵画の素材・技法と表現の関係、「描くこと」をめぐる「知」と創作の可能性を追究します。また、高精細デジタル撮影記録、デジタル画像処理・出力が可能スタジオ設備を活用し、現代の制作者にとって必須であるアーカイブ作成や文化財保存に関わる知識の蓄積に努めます。

学生数（2016年5月現在） 〈修士〉16名 〈博士〉7名

<http://www.geidai-gizai.com/>





# 彫刻科

## Sculpture

彫刻科では、幅広い造形の研究に重点を置き、過去の美術の歴史や伝統を踏まえながら、既成の概念にとらわれることなく、それぞれの学生の資質を生かした自由な創作研究が行えるよう指導を行っています。塑造・テラコッタ、木彫、石彫、金属の4素材領域、7つの研究室をクロスさせながら、基礎課程および専門課程教育を展開していきます。豊かな教養と高い志を育み、世界に視野を広げ、来るべき時代の彫刻の在り方を探究するとともに、美術に関わる諸分野において指導的な役割を果たしていける人材の育成に努めています。

### 学部1・2年次

彫刻には主に粘土、木、石、金属などの材料があります。1、2年次の実習では、素材を扱うために必要な技術を学びながら、基礎となる造形力を養います。1年次には塑造、石彫、木彫、テラコッタ、2年次には、金属、テラコッタの実習を課題に沿って行います。2年次後期には、それぞれの実習の経験を踏まえて自ら素材を選び、自由に彫刻を制作し、学内外に向けて展示発表します。また、2年次には2週間にわたり奈良・京都を中心とする古美術研究旅行を行い、彫刻の歴史的表現や素材の展開などに関して専門的に学びます。

### 学部3・4年次

3年次からは3つの講座と各素材の専門領域に分かれ、学生一人一人に対応したきめ細かい個別指導を受けながら、自由制作に取り組みます。基礎的な造形技術を習得、発展させ、独創的で自立した創作研究能力を育む教育方針の下、最終学年では、学部4年間の集大成として卒業作品を制作し、一般公開します。

### 学部カリキュラム

- 〈1年次〉【必修科目】デッサン、塑造、石彫、木彫、テラコッタなど
  - 〈2年次〉【必修科目】デッサン、塑造、テラコッタ、金属、実材選択実習（木彫・石彫・金属・テラコッタ）、彫刻論・古典研究、古美術研究など
  - 〈3年次〉【必修科目】塑造、実材、構成（平面・立体）、彫刻論など
  - 〈4年次〉【必修科目】彫刻実技、卒業制作、自画像制作など
- ※1年次から大学院修士まで上野キャンパスで学習、創作研究を行います。  
 大学院修士博士課程は取手がメインのキャンパスになります。  
 ※29年度カリキュラム変更予定

### 大学院 修士・博士

大学院では、すでに習得した基礎能力をもとに、広い視野から、より専門的な創作研究に取り組みます。博士後期課程においては、作品制作と論文作成の両面から指導を受け、さらに高度な研究を目指します。また、大学院修士課程、博士後期課程の学生を中心に、地域と連携したアートプロジェクトやワークショップ等に参加しながら、社会の中で多様化する彫刻表現に実践的に関わっています。

学生数（2016年5月現在）  
 〈1年次〉20名 〈2年次〉22名 〈3年次〉22名 〈4年次〉20名 〈修士〉39名 〈博士〉6名  
 教員 木戸修、深井隆、北郷悟、林武史、原真一、森淳一、大巻伸嗣、小塚照己



<http://geidaichoukoku.com/>



1



2



3



4

- 1・2 金属実習風景
- 3 石彫室制作風景
- 4 木彫室制作風景
- 5 テラコッタ実習講評風景



5

### 伝統と現代

彫刻を作るには最低限の道具と技術が必要になりますが、例えば木彫実習、石彫実習では使用する道具を自分で作ることから始まります。古くから使われ続けてきた道具を作り、その使い方と意味を知り、素材と造形について学んでいます。彫刻科では、素材と向き合いながら考えることが重要と捉え、「つくる」ことを通して自ら経験し、全身で思考することが大切であると指導しています。安易に時流に流されることなく、本学に受け継がれてきた伝統を基礎とし、彫刻について学んでいきます。また、現代の美術の動向をふまえた新しい彫刻表現に対応したプログラムも設けています。学部2年次、3年次の学生は、学内の教員や学外から招いた作家や評論家、キュレーターの講義を、彫刻論として受講します。多様化する芸術表現の現状や可能性を模索し、個々の研究に生かしていきます。

### 制作と展示の関係を模索する

学生の日ごとの制作研究の成果を発表できる場所として、彫刻棟内に展示スペースを設けています。彫刻科の学生であれば学年を問わず利用でき、自由に展示発表できます。彫刻科では、作ることが完成ではなく、展示し、見せることも制作の一部と考えています。作品が置かれる空間全体、またその背後にある見えない空間も作品の要素と捉えます。作品展示の在り方と広がりや考察する機会を設けるなどして、現代における彫刻の可能性を模索していきます。

# 工芸科

Crafts

工芸とは、人間にとって最も身近にある芸術領域です。素材を見極め、伝統的な技法をもとに制作される工芸作品は、移ろう時代の中にあっても一貫して人々の生活に大きな感動を与え続けてきました。工芸科では、東京美術学校時代から継承されてきた豊富な資料や経験を生かして、歴史に裏打ちされた基本的な知識・技術を修め、同時に、現代の価値観や新しい技術を吸収することを通じて、工芸領域のさらなる発展を担うことのできる作家、研究者の育成を教育目標としています。

## 学部1・2年次前期

### 工芸基礎

工芸科の授業は、工房制作を中心とした少人数教育・個人指導によって行われ、実技訓練を通して豊かな創造性を育みます。1年次および2年次前期は、工芸基礎課程として美術全般と工芸領域に関する基礎的な表現力、造形感覚を養います。1年次では工芸科の基礎実習に加え、他科の講師による絵画・塑像などの実習を通じて様々な技法や価値観に触れ、2年次前期に彫金、鍛金、鍍金、漆芸、陶芸、染織の6専攻から3専攻を選択し、それぞれの素材を使った実習制作指導を受けた後、学生自身が後期以降の専攻を選択します。

## 学部2年次後期 大学院修士・博士

### 彫金

彫金は、貴金属から銅合金まで様々な金属を加工し、作品を作ります。鑿で彫る装飾的な技術に起源を持ちますが、今日の彫金世界は多様な広がりを見せています。カリキュラムは工具製作からスタートし、彫り、打ち出し、象嵌、色金、接合、七宝などの基礎技法を順に学び、伝統的背景を理解しながら、技術や素材の体験を重ねて知識を深めます。常に現在の生活空間全体を意識しながら個性を磨き、クラフト、オブジェ、ジュエリーなど多岐にわたるそれぞれのテーマの中で技法、工程を絞り込み、質の高い卒業制作に取り組みます。

### 鍛金

金属の塑性加工技術である冷間加工の絞り技法と熱間加工の鍛造技法、および接合、溶接技法、切削技術といった鍛金の基本的な技法を習得し、制作実習を通して金属造形の基礎的な知識と創作力を養います。主な授業科目として、基本手絞り実習（回転体）、変形絞り（動物制作）、鍛造実習、接合実習（木目金制作、蠟付け）などの技法を修めるほか、各種溶接技術、機械加工技術などを学びます。野外モニュメントからオブジェ、カトラリー、装飾品に至る幅広い金属加工技術を総合的に学習し、集大成としての卒業制作に臨みます。

### 鍍金

鍍金は、制作した立体（原型）を型取って、型（鋳型）に溶けた金属を流し込むことにより、固い金属を自由に造形する技法です。ジュエリー、茶の湯釜や鉄瓶などの器物、奈良の大仏や工業製品に至るまで、鍍金で制作されたものは多種多様で、現代には不可欠なものとなっています。本学は、伝統技法から最新の技法までほとんど学ぶことができる、充実した工房設備を擁しています。熔けた金属の美しさ、金属を流し込んだ鋳型を開ける時の緊張感は鍍金でこそ体験できることであり、創造の喜びを最大限に味わえる専攻です。

**学部カリキュラム**


〈1年次〉【必修科目】基礎造形実習、絵画実習（素描）、表示図法・木工芸実習、塑像実習、絵画実習（毛筆・扇面）、ガラス造形実習、自由造形実習、工芸制作論、研究旅行

〈2年次〉【必修科目】実材実習（彫金、鍛金、鍍金、漆芸、陶芸、染織のうち3つを選択）、工芸理論または日本工芸史概説

学生数（2016年5月現在）  
〈1年次〉30名 〈2年次〉33名

教員 三神 慎一郎

<http://kogeikiso.geidai.ac.jp>



**学部カリキュラム**


〈3年次〉接合、象嵌、筥（各種色金）、装身具、打ち出しなど

〈4年次〉各種技法研究、卒業制作など

学生数（2016年5月現在）  
〈3年次〉5名 〈4年次〉4名 〈修士〉11名 〈博士〉1名

教員 飯野 一朗、前田 宏智

<http://choukin.geidai.ac.jp>



**学部カリキュラム**


〈3年次〉機械工作実習、木目金、溶接鍛造、接合、変形絞りなど

〈4年次〉卒業制作など

学生数（2016年5月現在）  
〈3年次〉5名 〈4年次〉5名 〈修士〉11名 〈博士〉0名

教員 篠原 行雄、丸山 智巳

[http://www.geidai.ac.jp/department/fine\\_arts/crafts#2](http://www.geidai.ac.jp/department/fine_arts/crafts#2)



**学部カリキュラム**

〈3年次〉真土込型鋳造、生型鋳造、石膏鋳造、精密鋳造など

〈4年次〉真土銅型鋳造、卒業制作など

学生数（2016年5月現在）  
〈3年次〉6名 〈4年次〉4名 〈修士〉9名 〈博士〉3名

教員 赤沼 潔

<http://www.geidai.ac.jp/labs/chu-kin/>



1 工芸基礎 工芸基礎造形実習 授業風景  
2 彫金 修了制作 学生作品  
3 鍛金 変形絞り実習 学生作品  
4 鍍金 石膏鋳造実習 授業風景



5 染織 自主研究制作 制作風景  
6 漆芸 卒業制作 学生作品  
7 陶芸 ロクロ実習 授業風景  
8 木工芸 伝統技法による箱制作ゼミ  
9 ガラス造形 ホットワーク実習 授業風景

### 漆芸

漆芸はウルシの木から採取した天然の樹液を用いた芸術です。漆を造形素材や絵画材料として多角的に使用し、下工程と塗りや研ぎといった漆芸基礎技術の習得はもちろん、素地（木胎、乾漆ほか）、髹漆（塗り、変り塗ほか）、装飾（蒔絵、螺鈿、平文、沈金ほか）などの授業を通して自身の表現を探究します。また漆芸専攻では、日本はもとよりアジア、ヨーロッパ各国の作家、修復家、研究機関とのネットワークを生かして共同研究を行うほか、毎年、国内外から有識者を招聘して技法研修や講演などを行い、幅広い観点から教育を進めています。

### 陶芸

本学における陶芸教育は、伝統工芸・ロクロ制作に軸足を置くアカデミックな方針を掲げて始まり、その後も、食文化を踏まえた器の本質の追究や、工芸と彫刻の融合などを課題に据え、その幅を広げてきました。現在の教育方針は、学生自身の発想を尊重し、実用だけに留まらない表現力を高めること、また海外との交流を深め、世界の陶芸を意識した広い視野と造形力を養うことを目標としています。ロクロの修練はもちろん、施釉、焼成法の習得、釉薬のテスト、石膏型によるデザインと制作など基礎的な学習を積み重ね、創造性を磨いていきます。

### 染織

染織専攻では、歴史的に確立された伝統技法を本格的に学び、今日における新しいツールの特性も理解しながら各自の表現を追求していきます。作家、教育者に加えて、現代のテキスタイルデザイン・ファッション・インテリアデザイン・空間演出の分野も含めて、次世代の染織表現や独自のブランドを確立していける人材を育成することを教育方針としています。カリキュラムは、染と織双方の技法をバランスよく編成し、多種の技法の基礎と専門の段階的教育によって、多角的視野と多様性に対応できる教育内容となっています。

## 大学院修士・博士

学部開設の6専攻に木工芸、ガラス造形を加えて8つの分野で構成されています。取手キャンパスの共通工房なども活用し、より高度な専門実習と創作研究を通じて経験の幅を広げ、国際的な展開も視野に、独自の表現と制作論を組み立てていきます。

### 木工芸

刃物研ぎなど道具の仕立て、道具の製作に始まるカリキュラムは、手加工を中心とする木工芸の技術全般を習得できるよう編成されています。また、関連技術講義やゼミを通じて幅広く素材・技術・造形に関する理論的、経験的な研究を深めます。木工芸専攻の研究目的としては、次の3点を掲げています。  
1. 素材(木材)に対して理解を深め、独自の素材観を培う。  
2. 制作に介入する技術とは何か。修練を通してその意味を理解し、制御する力を身に付ける。  
3. 作品における造形内容の考察を深め、品位の高い作品の在り方を追究する。

### ガラス造形

高温で溶けたガラスを用いて制作するホットワーク、電気炉を使ったキルンワーク、切削したり研磨したりして行うコールドワークなど、多彩な表現技法を活用して、工芸、立体造形、空間造形などの幅広い分野でガラス素材の可能性を追究します。ホットワーク用溶解炉、グローリーホール、徐冷炉、ベンチをはじめキルン電気炉、試験炉、各種コールドワーク加工機械など充実した環境と少人数教育体制の下、各学生それぞれのテーマや技法研究を、細かなチュートリアルと幅広い分野から招く講師の講義を通して深めています。

**学部カリキュラム**


〈3年次〉髹漆技法、装飾技法、漆造形（乾漆、木胎）、学外研修など

〈4年次〉漆造形、装飾技法、卒業制作など

学生数（2016年5月現在）  
〈3年次〉5名 〈4年次〉7名 〈修士〉11名 〈博士〉3名

教員 三田村 有純、小椋 範彦

<http://urushinews.blogspot.jp>



**学部カリキュラム**

〈3年次〉ロクロ成形、窯炉焼成、登り窯焼成、釉薬および絵具制作実験など

〈4年次〉ロクロ成形、窯炉焼成、石膏型成形、鑄込み・ロクロ成形、卒業制作など

学生数（2016年5月現在）  
〈3年次〉5名 〈4年次〉5名 〈修士〉13名 〈博士〉5名

教員 豊福 誠、三上 亮

[http://www.geidai.ac.jp/department/fine\\_arts/crafts#5](http://www.geidai.ac.jp/department/fine_arts/crafts#5)



**学部カリキュラム**

〈3年次〉捺染法、糊防染技法(缸型)、糊防染技法(友禅染)、織技法(二重織)、織技法(緞織)、織技法(綴織)など

〈4年次〉卒業制作など

学生数（2016年5月現在）  
〈3年次〉7名 〈4年次〉6名 〈修士〉12名 〈博士〉2名

教員 菅野 健一、上原 利丸

[http://www.geidai.ac.jp/department/fine\\_arts/crafts#6](http://www.geidai.ac.jp/department/fine_arts/crafts#6)



学生数（2016年5月現在）  
〈修士〉1名 〈博士〉1名

教員 園部 秀徳



<http://www.geidai.ac.jp/labs/mokkou/>

学生数（2016年5月現在）  
〈修士〉4名 〈博士〉4名

教員 藤原 信幸



<http://www.geidai.ac.jp/labs/glass-glass/>

# デザイン科

Design

世界は激しく変わり続けています。いまデザインには様々な力が必要とされています。未来の変化を先取りして人の暮らしに革新をもたらす新しい時代を切り拓く力。守るべき価値を見定めて伝統を次の世代へ継承する力。人を思いやり、声なき声に耳を傾ける力。人間や自然の営みをつぶさに観察し複雑な事象を整理することで変化の中に潜む見えざる文脈を抽出し本質を読みとる力。そして、その洞察をかたちにする造形力。デザイン科は、様々な専門領域をもつ10の研究室が基盤となった教育・研究体制で、こうした力を育みます。しなやかな感性、論理的思考、多視点の発想、幅広い教養によって、時代の変化に立ち向かう人材を育成します。

デザイン科は、「視覚・伝達」「機能・演出」「機能・設計」「空間・設計」「空間・演出」「環境・設計」「映像・画像」「描画・装飾」「企画・理論」「情報・設計」による、合計10の研究室を基盤に構成されています。学部は1学年45名程度で、対話を重視したきめ細かい少人数教育を行っており、10の研究室の専任教員と様々な領域の第一線で活躍する非常勤講師による実技課題・技法演習・講義は、専門的な技術や知識を段階的に積み上げると同時に、既存のジャンルにとらわれず自由に資質を伸ばすことを支援する内容となっています。学生は、学年進行にしたがって、ゆるやかに自分の適性を見定め、じっくりと「やりたいこと」を探し出せる、他には類を見ないカリキュラムの下で学ぶことができます。

### 学部1年次 「観察と表現」

デザインの基礎力を養います。デジタル基礎演習と塑像の基礎課題に始まり、「調べること」「機能性を考えること」「観察すること」「素材の可能性を追求すること」への視野を広げる実技課題をこなすことで、創造活動の「足腰」を鍛えあげます。

### 学部2年次 「発想と表現」

発想力と表現力を問う「生活」に根差した5つの実技課題が課せられます。併せて選択制の技法演習やデザインの意味を考える講義を通して、学生が自分の適性と「やりたいこと」を徐々に見つけだすことのできるカリキュラムとなっています。

### 学部3年次 「構想と表現」

現代の社会問題や日常の気づきを分析し、かたちにする実技課題で、構想力・問題提起力・問題解決力・伝達力を養います。進路を具体的に絞りこんでいけるように、専門性の高い選択授業も用意されています。必修の「古美術研究旅行」では、京都と奈良を2週間訪れます。

### 学部4年次 「卒業制作」

自分でテーマを決め、1年間かけて卒業制作に取り組みます。卒業制作の指導は10研究室の教員全員で担当します。少人数の学生と教員による指導となり中間検討会、講評会は全員で指導します。必要に応じて学生がどの研究室を訪ねてもよい、風通しのよい仕組みとなっています。

### 学部カリキュラム

- 〈1年次〉【必修科目】デザイン基礎実技1(デジタル基礎演習、塑造)、デザイン実技1「観察と表現」(調べる、にぎる、観る・探す、マテリアル)、デザイン技法(タイポグラフィ、実測、スピードスケッチ)など
- 〈2年次〉【必修科目】デザイン技法II(デジタルモデリング、アニメーション、タイポグラフィ、樹脂、スタディマテリアル、写真、プリント)、デザイン実技II「発想と表現」(プレイングラウンド、伝える、座る、食のデザイン、トキのカチ)など
- 〈3年次〉【必修科目】デザイン実技III「構想と表現」(フューチャービジョン、THINK1・2、スタジオ課題) 通年講義(ビジュアルデザイン、プロダクトデザイン、スペースプランニング、映像論※3・4年次に履修)
- 〈4年次〉【必修科目】デザイン実技「卒業制作」(プレ卒業制作、卒業制作)など



1 機械工房での作業風景  
2 製本実習  
3 オスロ芸術アカデミーとの合同ワークショップ

### 大学院 修士・博士

各研究室に1学年につき3～5名の学生が属し、指導教員との対話をもとに自分の研究活動・作品制作を深めていきます。修士1年次には、専門領域の違う学生が協働で地域コミュニティや企業に対してデザイン提案を行う必修共通課題が組まれており、このほか様々な社会連携プロジェクトや、他専攻の研究室との共同制作に主体的に参加することで、自分の専門を基盤に多様な領域をつなぐ幅広い視野を養います。また、国際的なコミュニケーション力の養成のために交換留学プログラムを積極的に利用しています。博士後期課程では、研究領域を越えた複数の教員の指導を受けながら、高度なデザイン研究を制作活動と理論構築の両面において深めていきます。

学生数(2016年5月現在)  
〈1年次〉45名 〈2年次〉47名 〈3年次〉49名 〈4年次〉46名 〈修士〉80名 〈博士〉8名

- |    |  |   |
|----|--|---|
| 教員 | 【情報・設計】須永 剛司<br>【環境・設計】清水 泰博<br>【視覚・伝達】松下 計<br>【機能・設計】長濱 雅彦<br>【企画・理論】藤崎 圭一郎<br>【映像・画像】箭内 道彦 | 【空間・設計】橋本 和幸<br>【描画・装飾】押元 一敏<br>【空間・演出】鈴木 太郎<br>【機能・演出】山崎 直由(10月より就任)<br>【助教】佐々木 里史 |
|----|--|---|



<http://design.geidai.ac.jp/>



デザイン科合同研究室

撮影:大城 喜彬

### 分野を越えた総合デザイン教育

東京藝術大学は我が国唯一の国立総合芸術大学です。様々な芸術分野の優れた才能が集う、他校にない創作環境があります。例えばデザイン科学生の制作するアニメーションに、音楽学部の学生がサウンドを提供するなど、異なる専門領域との交流を可能にしています。また、上野という土地がもつ歴史の重みと利便性の高さを生かし、様々な海外の大学や他大学、企業、行政機関などと連携プロジェクトを積極的に進めています。

この学内にとどまらない多彩な交流環境を生かした企画の一つが「企業のデザイン展」です。デザイン科が大学美術館などの学内の施設を使用して隔年で実施している大規模展示で、協力企業と共に企画しています。単なる企業PRとは一線を画し、大学という教育研究機関だからこそ実現できる「デザインと企業文化と社会」との関わりを探究するユニークな企画展として、これまでの5回の展覧会はいずれも高い評価を受けてきました。こうした多彩な産・学・官連携事業は学生の意識向上にもつながり、就職活動やその後の社会活動にも好影響を与えています。学内外の専門領域や芸術分野の壁を越えたデザインの総合教育を実践する東京藝術大学デザイン科の教育カリキュラムは学生たちに、必ず「ここでしかできない」体験をもたらすことでしょう。



4 学生作品「PAPER | FABRIC」鈴木 葉音野  
5 専用の展示スペースでの展示風景



撮影:阿部 文香



# 建築科 Architecture

建築科は、大学の前身である東京美術学校（1887年創設）のもとに、「図案科建築教室」が設置されたことから始まりました（1902年）。その後1923年に「建築科」となり、今日まで日本の建築界を代表する多くの建築家を輩出してきました。

本科が他大学の建築学科と大きく異なる点は、工学系ではなく美術系に属し、建築家の養成を目指す唯一の国立の教育機関であることです。

もう一つの特色は、教育の軸を建築設計に置いている点です。専任教員9人に対し1学年の定員は学部15人・大学院修士16名という少人数の恵まれた教育環境は、海外の教育機関においても例をみないものであり、こうした環境をもとに個性と創造力を伸ばす自由かつ緊密な教育が行われています。

なお、建築科の活動はウェブサイトで随時更新しています。下記のURL、QRコードを使って確認してください。

カリキュラムは、「建築の設計」の習得に重点を置き、感受性の鋭さや表現の独自性を追求できる教育システムとして、学年に応じ段階的に進められる専門実技科目（設計製図）と専門学科科目および教養科目で構成されています。

### 学部1年次

建築の設計に向かう導入部として、設計製図課題は建築の構成やその表現方法などの基礎的な学習と、各自の創造性の探求を目標に構成しており、「木」を素材とした椅子の課題では、その設計から実物の制作までを自らが行います。

### 学部2年次

前期の「住宅」から後期の「中規模施設」へ、個人の空間から共有の空間へと、設計製図課題の対象を広げていきます。各自の経験を起点とし、諸事例に学び創造力を広げながら、新たな提案を試みます。また、空間やその私たちの実在化を学ぶ「架構」の課題等も後期に設定されています。

### 学部3年次

建築の空間的な組織を学ぶために、集合的な建築や複合的な建築の設計製図課題に取り組みます。また、建築の社会性に広く目を向け、多様な価値観によって構築されている世界との関わり方を各自が見出すことを目指し、都市的なスケールの空間に取り組みます。

### 学部4年次

3年間で学んだこれまでの経験を駆使して表現に力点を置いた課題に取り組みます。分析やリサーチからプログラムの立案、表現方法などを学びながらプロジェクトの提案を行います。その後、卒業制作へとつながるプレディプロマ課題が設定され、夏期以降は卒業制作に取り組みます。卒業制作は、テーマや条件、プログラム設定等をすべて自らがを行い、長い時間とエネルギーをかけて各自の集大成となる作品を制作していきます。

### 学部カリキュラム

- 〈1年次〉【必修科目】設計製図(場所、基礎、家具)、塑造、建築構成、構造計画、構造力学、日本東洋建築史など
- 〈2年次〉【必修科目】設計製図(住宅、集合住宅、架構)、実測、構造材料演習、西洋建築史、環境工学など
- 〈3年次〉【必修科目】設計製図(教育施設+地域施設、地区設計)、建築計画、近代建築史、古美術研究旅行など
- 〈4年次〉【必修科目】設計製図(建築と表現、プレディプロマ)、卒業制作など



1

### 大学院修士・博士

修士課程では、カリキュラムは、大きく二つに区分しています。一つは、学部で身に付けた教育内容を基本とした、さらに高度かつ専門的な内容の学科科目（建築特論：建築史・構造・建築計画・建築論等）です。もう一つは、所属する研究室で行われるゼミで、教員の指導の下、自らの研究テーマを定め実施していきます。修士制作・修士論文はその集大成となります。博士後期課程では、所属する研究室を基盤としながら博士学位の取得を目指し、自らのテーマを深め、その成果を外部に向けて発信していきます。

学生数（2016年5月現在）  
〈1年次〉15名 〈2年次〉15名 〈3年次〉16名 〈4年次〉22名 〈修士〉49名 〈博士〉1名

教員 【建築設計】藤村 龍至、中山英之、トム・ヘネガン  
【環境設計】北川原 温、ヨコモツ マコト  
【構造計画】金田 充弘  
【建築理論】光井 渉、野口 昌夫  
橋本 圭央



<http://arch.geidai.ac.jp/>



2

- 卒業制作「共同主観的設計法」橋本 圭史
- 修了制作「輪郭—大地と空 インド、ジャンムー・カシミール州ラダック仏教僧院の調査と設計」樹永 絵理子
- 修了制作「Infinite Partition」シタムマラッド・ワナボン
- 学部4年次設計課題「建築と表現」  
学部課題の最終講評は学年をまたいで合同で行われます。



3



4

### 特色ある建築教育 — 「椅子」と「実測」

学部1年次に実施する「椅子」課題は、東京美術学校から東京藝術大学に移行した1950年にさかのぼり、各学生が実寸の椅子を作ることによって意匠、素材、構造などを自らの身体を通して掘むことを目的とした伝統的な課題です。

また、学部2年次夏期に実施する「実測」課題は、実際の建築に触れ、その構成を観察し、正確に記録し、表現する貴重な体験学習です。近年は、大学周辺の寺院、茶室などを対象として教員の指導の下、学生自らが実測を行い、野帳・図面作成、インキングと行程を進め、各自の図面を一冊の製本にして完成させます。

学部4年次に行う卒業制作では、比較的規模の大きい建築・都市的スケールでのプロジェクトに各学生は向き合いますが、こうした実測課題などが日本の伝統的な建築やその空間の仕組みを見つめ、現代の創造性との関わりを手助けするものとなっています。



5



6



7

- 学部1年次の「椅子」課題で制作された作品。完成後は展示され、多くの人に作品を見てもらうことができます。
- 学部2年次の「実測」課題では、古い建築物を実際に訪れ、その構成やディテールを学びます。

# 先端芸術表現科

Inter Media Art

大学の中に閉じてもってはいは、現代を呼吸することはできません。先端芸術表現科は、「取手アートプロジェクト」をはじめ、地域や社会に深く根差した、あるいは国際的なプロジェクトに積極的に参画し、私たちの生の意味について創造と提案を続けてきました。私たちが目指す教育は、ドローイング、工作、写真、映像といった「美術」の領域のメディアに加え、身体、音楽、コンピュータなど広範にわたる表現メディアの基礎を身に付け、「これからの芸術とはなにか」について実践的に学び、制作の側のみならず、芸術支援の総てにおける可能性を持った人材育成を基本理念としています。

### 学部1年次 「自己を知る」

1年次では、実技・必修講義など授業を上野校地を基本に行います。様々な専門性に特化したスタッフによるスタジオでの演習授業を中心として、ドローイング、コンセプチュアル・アート、写真、デザイン、工作・立体造形、身体表現、音楽、映像など、多種多様なメディアの特性を分野横断的に学びながら、表現活動に必要な基礎的な知識や技術の習得を目指します。また、コンピュータの操作方法、芸術・美術史などの理論、リサーチやプレゼンテーションに必要な語学力も集中的に身につけることによって、基本的な読解力、柔軟な構想力、創造的な思考力を鍛えます。このように、実技と理論の両方をバランスよく学び、多彩な経験を積み重ねることによって、新たな表現を生み出すための能力や素養を身につけていきます。

### 学部2年次 「他者と外部を知る」

2年次では、取手校地を基本に実技授業を行います。前期の「スタジオ選択カリキュラム」では、1年次に学んだ知識や技術を応用し、多様なメディアを選択的・複合的に扱い、独自の表現方法を探求します。後期の「フィールドワーク」では、グループワークを基本として、学外の特定の地域をリサーチし、そこで得られた知識や情報に基づきながら、作品制作を行います。異なる個性や意見をもったメンバーが綿密なリサーチ、議論、交渉を行い、作品プランを実現させる一連のプロセスを学びます。「エディトリアルワーク」では、アートブックやポートフォリオの作成など、画像編集から製本に至るグラフィック・デザインを学び、過去の自分の活動をまとめて他者に伝えるための技術を習得します。さらに、2年次の成果は学生の主体的な企画・運営によって開催されるアートイベント「取手アートパス」で一般公開されます。

### 学部3年次 「関係をつくる」

3年次では、教員別の「研究室」に所属し専門的な指導の下、1～2年次で学んだスタジオ指導から自分の専門性を模索、思考し創作研究を行います。各研究室の内容は多岐に渡り、個人制作と研究室での活動との両輪をうまく利用し、さらに表現の幅を広げていくことが求められます。また、学年展示の「ミクストメディア・プラクティス（前期・後期）」で、展示を実践する経験を積み重ねます。2～3年次に選択履修できる「IMA演習」は、外部から多彩な顔ぶれのゲストアーティストや講師を招いて学年横断的に行なう短期集中の演習授業で、表現に対する知見を広げていきます。「古美術研究旅行」では毎年テーマを設定し、熊野、奈良、京都を中心に日本の古美術を見学します。本科独自の行程により、日本の伝統文化・美術に対する造詣を深めます。

### 学部4年次 「統合する」

卒業制作を中心に、これまでの制作・研究活動を集大成していきます。所属研究室の教員の指導の下、領域横断的理論と実践を鍛えていきます。前期に「WIP (Work In Progress) 展」、後期には「最終審査会」と段階を踏みながら進みます。「卒業修了作品展」に向けては個々の作品制作とともに、展示会の企画運営にも学生が主体的に取り組んでいます。



1



2

1 古美術研究旅行  
2 スタジオ選択カリキュラム

### 学部カリキュラム

- 〈1年次〉[必修科目] メディアリテラシー基礎・応用、スタジオ講習(ドローイング、工作、音楽+映像、写真、身体、デザイン)など
  - 〈2年次〉[必修科目] スタジオ選択カリキュラム(工作、写真、映像、音楽、身体、電子工作)、IMA演習、フィールドワーク、エディトリアル・ワークなど
  - 〈3年次〉[必修科目] ミクストメディア・プラクティス、古美術研究旅行、IMA演習など
  - 〈4年次〉[必修科目] WIP展、卒業制作など
- ※ 平成28年度からは1年次は上野、2年次から4年次まで取手キャンパスで学習、創作研究を行います。

### 大学院 修士・博士

修士課程は少人数制による教育・研究環境となります。博士後期課程ではさらに個別の指導を行います。教員が学生に知識を伝達するのは、大学院教育の一面にすぎません。芸術が人々の意識を変革していくにあたって、教員と学生がパートナーシップを結び、その問題の所在を明らかにし、解決のための方策をともに考え創造していく場でありたいと願っています。狭隘な領域に分断することなく、共通のゼミ (Art in Context) をを設定し、美術に留まらない幅広い関連分野で活躍する多彩な人材が特別講義や演習などに参加し、様々な角度からアドバイスを与え、深く表現について学び、研究制作を進めます。博士後期課程では、自らの専門分野における研究を行います。作品制作や研究発表によって新たな知見を得、それに基づきながら博士論文を執筆します。

学生数 (2016年5月現在)

〈1年次〉24名 〈2年次〉30名 〈3年次〉30名 〈4年次〉38名 〈修士〉64名 〈博士〉23名

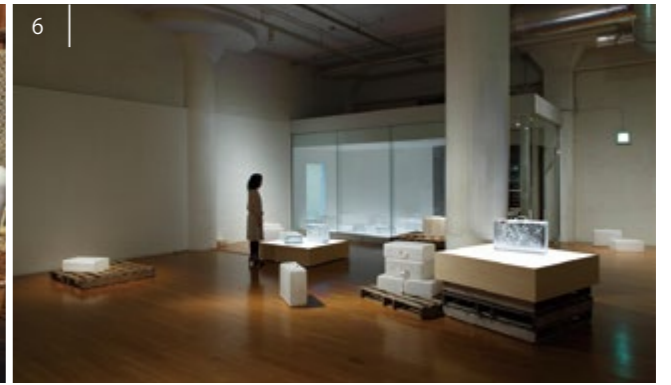
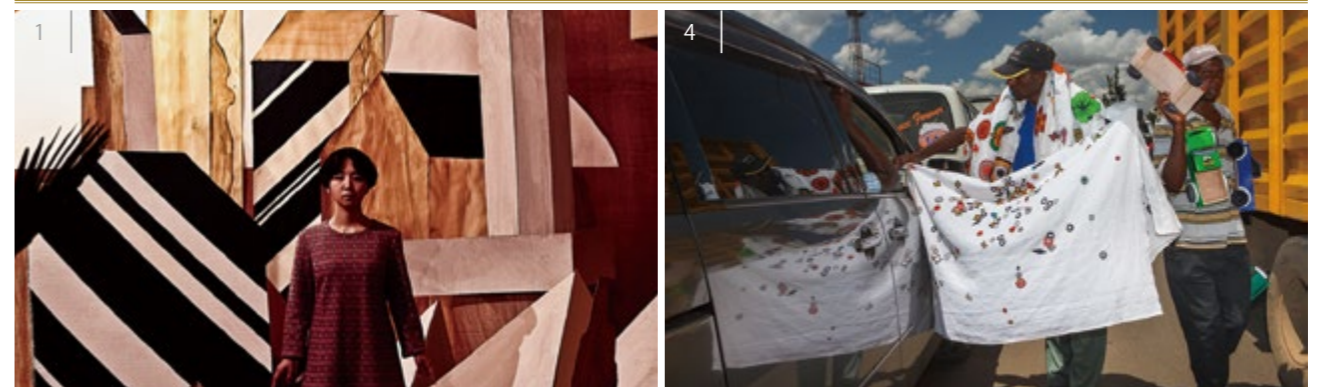
教員 たほりつと、伊藤 俊治、日比野 克彦、佐藤 時啓、長谷部 浩、古川 聖、小沢 剛、鈴木 理策、小谷 元彦、八谷 和彦、飯田 志保子、田中 一平



<http://www.ima.fa.geidai.ac.jp/>

### 卒業生の紹介

現在様々な分野で活躍している先端芸術表現科の卒業生の活動を紹介します。



### 1 | 最後の手段(有坂 亜由夢)

《茶の奥吹く街》2015年

映像作家。1985年千葉県生まれ。2012年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。ビデオチーム「最後の手段」結成。アニメーション作品、MV、グラフィックなどを国内外で発表。2014年「メディア芸術祭」エンターテインメント部門新人賞など受賞。「TOKYO ANIMA 2015」国立新美術館、「クリトビオシス：世界の種」（インドネシア）等に出展。National Institute of Design (インド)にてワークショップなど活動中。

<http://www.saigono.info>

### 2 | 石川 直樹

《8848》2011年 ©Naoki ISHIKAWA

写真家。1977年東京都生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現領域修士後期課程修了。受賞に、2005年「群馬青年ビエンナーレ奨励賞」群馬県立近代美術館、2012年「アートアワードトーキョー丸の内グランプリ」、2015年「3331 Art Fair 2015 和多利浩一賞、吉本光宏賞」。展覧会に、2010年「Identity, body it. -curated by Takashi Azumaya-」nca (東京)、2013年「あいちトリエンナーレ2013」(愛知)、2014年個展「you're mine」トラウマリス (東京) など。

<http://www.straightree.com>

### 3 | 片山 真理

《ballet》2013年

美術家。埼玉県生まれ、群馬県育ち。2012年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。受賞に、2005年「群馬青年ビエンナーレ奨励賞」群馬県立近代美術館、2012年「アートアワードトーキョー丸の内グランプリ」、2015年「3331 Art Fair 2015 和多利浩一賞、吉本光宏賞」。展覧会に、2010年「Identity, body it. -curated by Takashi Azumaya-」nca (東京)、2013年「あいちトリエンナーレ2013」(愛知)、2014年個展「you're mine」トラウマリス (東京) など。

<http://shell-kashime.com>

### 4 | 西尾 美也

《Kangaeru Street Fashionshow》2012年

撮影: James Muriuki  
美術家。1982年奈良県生まれ。2011年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現領域修士後期課程修了。文化庁芸術家在外研修員(ケニア共和国ナイロビ)等を経て、現在、奈良県立大学地域創造学部専任講師。アフリカと日本をつなぐアートプロジェクトの企画・運営の他、ファッションブランドも手がける。六本木アートナイト2014ではテーマプロジェクトを手がけ、六本木ヒルズ、東京ミッドタウン、国立新美術館の三カ所に大規模なインスタレーションを発表した。

<http://yoshinarinishio.net>

### 5 | 藤田 俊太郎

《ミュージカルThe Beautiful Game》2014年

撮影: 宮川 舞子  
演出家、演出助手。1980年秋田県出身。2005年東京藝術大学美術学部先端芸術表現科卒業。在学中の2004年、二ナガワ・スタジオに入る。俳優として活動したのち、2005年から2016年現在まで蜷川幸雄作品に演出助手として関わっている。主な活動に2011年《喜劇一幕・虹艶聖夜》新宿ゴールデン街劇場(東京) [作・演出]、2012年さいたまネクスT・シアター《ザ・ファクトリー2 (話してくれ、雨のように……)》彩の国さいたま芸術劇場(埼玉) [演出]、2014年1月～2月《ミュージカルThe Beautiful Game》新国立劇場小劇場(東京) [演出]がある。2015年、第22回読売演劇大賞 杉村春子賞 優秀演出家賞受賞。絵本ロックバンド「虹艶(にじいろ) Bunny」としてライブ活動展開中。

<http://www.shuntarofujita.com>

### 6 | 宮永 愛子

《手紙》2013年 ©MIYANAGA Aiko Courtesy Mizuma Art Gallery

撮影: 木奥 恵三  
美術家。1974年京都府生まれ。2008年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。日用品をナフタリンでかたどったオブジェや、塩を使ったインスタレーションなど気配の痕跡を用いて時を視覚化する作品で注目を集める。2013年「日産アートアワード」初代グランプリ受賞。主な展覧会に2012年「宮永愛子：なかそら一空中一空一」国立国際美術館(大阪) など。

<http://www.aiko-m.com>

## 芸術学科 Aesthetics and Art History

芸術学科の学生は、美学・美術史の知識を身に付け、芸術を研究する方法を学ぶことで、制作者とは異なる様々な立場から芸術に関わる専門家を目指します。美学、日本・東洋美術史、西洋美術史、工芸史を専門とする9人の専任教員による少人数教育が芸術学科の特色の一つです。美学・美術史の分野に関してこれだけの数の教員を揃えている大学は他に見られません。



撮影：永井文仁

### 学部1・2年次

1・2年次は芸術に関する広い知識と語学能力を習得します。同時に油画、版画、写真、日本画、彫刻などの実技を各科の教員から学びます。芸術学科には制作の実体験を通して作品の理解を深めるという伝統があり、成立当初より基礎実技が必修科目とされています。このことも東京藝術大学芸術学科の大きな特色です。また2年次には教員と学生が2週間合宿して京都・奈良をめぐる、貴重な文化財を鑑賞する古美術研究旅行があります。

### 学部3・4年次

3・4年次になるとより専門性の高い講義や演習を受講します。3年次には美学、日本・東洋美術史、西洋美術史、工芸史から自分が専門とする研究領域を定めます。卒業論文は担当教員の指導のもとで1年以上かけてしっかりと取り組み、4年次に完成させます。

### 学部カリキュラム

- 〈1年次〉【必修科目】基礎造形実技(素描、油画、映像メディア)、外国語、美学・美術史演習、美学・美術史特殊講義、西洋・日本・東洋美術史概説、美学概論、美学史概説など
  - 〈2年次〉【必修科目】基礎造形実技(日本画、彫刻)、外国語、美学・美術史演習、美学・美術史特殊講義、古美術研究、西洋・日本・東洋美術史概説、美学概論、美学史概説など
  - 〈3年次〉【必修科目】外国語、美学・美術史演習、美学・美術史特殊講義、西洋・日本・東洋美術史概説、美学概論、美学史概説など
  - 〈4年次〉【必修科目】論文作成演習、卒業論文、外国語、美学・美術史演習、美学・美術史特殊講義など
- ※1年次から4年次まで上野キャンパスで学習、研究を行います。

### 大学院修士・博士

修士課程では学部で獲得した知識をさらに広げるだけでなく、学術的研究の方法を十分に身につける必要があります。最終年度には教員の指導のもとで修士論文を執筆します。博士後期課程での研究には独自の成果が求められます。その成果を学外の学会、研究会、学術誌において発表し、専門的な研究者としての経験と実績を積んでいきます。最終年度には研究成果をまとめた博士論文を執筆することが目標となります。平成27年度に博士号(美術)を取得した学生は2名、最近5年間では16名の取得者がいます。



日本美術史特講の調査実習



研究室所有の図書数は国内屈指

撮影：永井文仁

### 卒業・修士生の進路

芸術学科での学生生活を通して、学生は自分が芸術とどのように関わりたいのかを考え、それぞれの将来を見つけていきます。習得した知識を大学院でさらに深めて、美術館・博物館の学芸員や大学の研究員となる学生もいます。特に芸術学科出身の学芸員数の多さはよく知られています。また、学習の成果を専門機関とは別の場所で活かしている卒業生も数多くいます。これまでギャラリーや出版社、新聞社などにはたくさんの卒業生が進みました。

### 卒業・修士生の主な就職先

美術館：宇都宮美術館、ヴァンジ彫刻庭園美術館、熊本県立美術館、国立新美術館、国立西洋美術館、埼玉県立歴史と民俗の博物館、佐倉市立美術館、札幌芸術の森美術館、サントリー美術館、島根県立美術館、東京農業大学「食と農」の博物館、富山県立近代美術館、中村キース・ヘリング美術館、平山郁夫美術館、ボア美術館、横浜美術館

大学教員：愛知県立芸術大学、学習院女子大学、神戸大学、立命館大学

出版：KADOKAWA、小学館、日本文芸出版、フィルムアート社、福音館、ポプラ社

官公庁・公益法人：岡崎市役所、国立天文台、東京都庁、特許庁意匠審査官、横浜市芸術文化振興財団  
一般企業：アートアンドパート、アッシュ・ペー・フランス、アド・エンジニアーズ・オブ・トキヨー、NHK文化センター、カイカイキキギャラリー、クオラス、クリック・アンド・リバー、小山登美夫ギャラリー、財団法人地域創造、三省堂書店、JR東日本ステーションリテイリング、昭栄美術、電通ヤング・アンド・ルビカム、東京国際フォーラム、東宝、日本NCR、サンゲツ、凸版印刷、橋原、ヒロミヨシイ六本木ギャラリー、便利堂

学生数(2016年5月現在)  
〈1年次〉22名 〈2年次〉22名 〈3年次〉20名 〈4年次〉23名 〈修士〉33名 〈博士〉28名

教員 [美学] 松尾大、川瀬晋之  
[日本・東洋美術史] 佐藤道信、松田誠一郎、片山まび、須賀みほ  
[工芸史] 片山まび  
[西洋美術史] 越川倫明、田邊幹之助、佐藤直樹  
[助教] 太田智己

<http://www.geidai.ac.jp/labs/geigaku/>



## 芸術学専攻 美術教育 Art and Education

美術教育研究室は、1963(昭和38)年に大学院の独立講座として設立されて以来、有為な存在を多数輩出し、修了生は大学をはじめとした教育機関、美術館、作家活動など様々な分野で活躍しています。修士・博士後期課程とともに、実技制作と理論研究から多角的に研究に取り組んでいます。修了要件として、修了作品と修了論文が課されます。美術制作者として各自の専門的な能力を高めるとともに、人間形成における美術の意義などについても理論的に探究します。制作者の視点から美術教育の重要性を社会に発信していくことのできる人材を育成することを目指しています。

### 大学院修士・博士

実技に関しては、各自の多様な専門領域における素材や技法の探求、表現の追求、展示方法に至るまでを、日々の制作活動に加えて教員や学生間の対話によって深めていきます。そして年2回の実技講習会が行われます。本研究室は様々な実技分野の学生が集まっていることが特色であり、異なる専門領域の学生と広く交流することで自己の制作を高めていきます。また指導にあたる教員の専門分野は、彫刻・絵画・工芸・教育学・美術解剖学など幅広く、横断型の専攻ならではの多様な体験や知見を得られます。実技制作と並行して理論研究も進めます。「課題研究」という授業では、各自の課題に即した研究発表を全員が行います。「素材論」「構成論」などの授業では、制作に関わる高度な学習を通して美術の本質的意義を探ります。また「美術教育ゼミ」「美術教育論」といった、美術教育の現状や本質について理論的に考察する授業があります。理論研究では常に実技制作と往還しながら、美術と教育について対話することで自らの美術教育観を形成していきます。また、内外の芸術家や研究者を招いた集中講義、幼稚園や学校・博物館など、様々な教育機関と連携したプログラムも学生の学びの場となっています。



講評会風景

学生数(2016年5月現在) 〈修士〉17名 〈博士〉4名

教員 本郷寛、木津文哉、小松佳代子  
豊福誠\*、齋藤典彦\*、丸山智巳\*  
宮永美知代、西山大基

\*…兼任



<http://bikyou.com/>

## 芸術学専攻 美術解剖学 Artistic Anatomy

美術解剖学は、美術を学ぶものが、その創作のため、また美術作品の研究のために、人体の形態と構造を研究する学問です。あるときは骨を手に、またあるときは生体を観察して、人体の形態と構造を徹底して理解することを目指し、いわば「自然」を美の最高の教師として、芸術の本質に迫ろうというものです。

### 大学院修士・博士

講義としては、美術学部の全ての専攻の学生を対象に、人体の骨や筋肉について学ぶ美術解剖学Aと、人体とそれ以外の生物の体について学ぶ応用的な内容の美術解剖学Bの授業を開設していますが、美術解剖学専攻の修士課程では、講義、演習、また解剖実習などを通して、より専門的で高度な美術解剖学を学びます。講義は、マクロ解剖学や形態学、生体観察など、また美術史の中の人体表現の研究、造形表現の諸技法などがあります。また海や森の大自然の中でかけて自然観察の実習も行います。古美術研究旅行や美術館見学など、美術の現場での実習も行います。このようにして自然と古典に学ぶことで、美への理解を深めることを目指します。大学院修了には、論文の提出が課せられますが、芸術への考えと経験を言葉で整理しまとめることは、芸術へのスタンスがより明瞭になり、研究や作品の制作への力となることでしょう。博士後期課程では、より明確な研究テーマを決めることが求められます。博士論文の執筆に向けて、オリジナルで完成度の高い研究をまとめるべく、上記の講義・実習などに加えて個別の講義・演習を行います。



大学院の授業風景

学生数(2016年5月現在) 〈修士〉4名 〈博士〉2名

教員 布施英利

<http://www.geidai.ac.jp/labs/artistic-anatomy/>



## 文化財保存学専攻

Conservation

文化財保存学専攻は、文化財の保存と修復に関する専門家の養成を目的として設置された大学院の独立専攻です。保存修復分野は、日本画、油画、彫刻、工芸、建造物の5講座で、それぞれに応じた修復技術、材料、古典技法の調査と研究を行っています。保存科学分野は、文化財測定学と美術工芸材料学の2講座で、文化財および美術工芸品の材料学的知識の習得とそれらの性状・劣化現象の研究を行っています。システム保存学分野は、保存環境学講座と修復材料学講座の2講座で、東京文化財研究所との連携の下、文化財を取り巻く環境や材料の研究を行っています。

また、それぞれの専門科目や実技科目のほかに、文化財保存の様々な分野を学ぶ共通科目を通じて、専門の違いや出身大学の違いに配慮した研究室間の学生同士の相互交流を図っています。

## 大学院 修士・博士

## 保存修復日本画

保存修復日本画研究室では、日本や東洋の古典絵画の模写や修理を通して伝統文化を継承するカリキュラムと、現代的な感性や豊かな表現力を磨きカリキュラムの両立によって、画家、研究者、修復師などとして社会で活躍できる多彩な人材育成を行っています。修士課程では、同素材による現状模写を通して古典絵画の優れた技法や材料などについて専門的に学びます。博士後期課程では、模写や修理の実技に基づきながら、美術史や自然科学などの知見を含めた複数の視点から古典絵画の研究を行って学位の取得を目指します。このようなカリキュラムの下、日本画の保存修復や技法材料に関する分野で将来の指導者となる高度な専門家を育成しています。

学生数(2016年5月現在)  
〈修士〉11名 〈博士〉7名  
教員 宮廻 正明、荒井 経



<http://www.geidai.ac.jp/labs/hozonnihonga/>



2

## 保存修復油画

保存修復油画研究室では、油彩画の保存修復を軸にして幅広い文化遺産に対応した教育と研究を行っています。特に絵画作品調査では、光学調査(高精細デジタル撮影、紫外線蛍光撮影、赤外線撮影、X線透過撮影)や絵具などの絵画技法材料分析に力を入れています。

修復では、大学美術館が所蔵する明治期作品を対象に修復実習を行って修復技術を向上させ、さらに学外から積極的に修復作品を受け入れるなど社会貢献にも努めています。研究面でも学外の美術博物館と共同で調査研究を行い、広い視野を持つ人材育成を目指しています。

学生数(2016年5月現在)  
〈修士〉9名 〈博士〉5名  
教員 木島 隆康、秋本 典透\*



<http://hozonyuga.geidai.ac.jp/>



3

## 保存修復彫刻

保存修復彫刻研究室は、彫刻文化財修復に関する理念を、実技を通して学ぶ研究室です。修士課程では、修了研究として模刻制作を中心とした古典技法研究を課題の一つとしています。それと同時に、所蔵者ご協力の下、実際の修復に取り組むことで、より実践的な修復家の養成に努めています。また博士後期課程では、修復と模刻制作に加え、実技者の視点から古典技法の解明を目指す博士論文の執筆を研究課題としています。

修了後の進路としては、個人の修復家として独立するほか、公益財団法人美術院国宝修理所へ就職する者、習得した古典技法を生かした作家活動に取り組み、活躍している者も多くいます。

学生数(2016年5月現在)  
〈修士〉5名 〈博士〉3名  
教員 敷内 佐斗司、深井 隆\*  
鈴木 篤 \*… 兼担



<http://tokyogeidai-hozon.com/index.html>



4

## 保存修復工芸

工芸文化財の修復とは、その文化財作品の持つ情報を、後世に正しく伝え残して行くことです。工芸には漆工・染織・陶磁器・金工などがあり、各分野ごとに伝統技法があります。保存修復工芸研究室では志望分野の専門教官の指導のもとで材料の理解を深めながら必要な技術を習得します。

本学の特徴である制作指導、研究、展示公開の体制が同地にあるという強みを活かし、多様な観点から保存修復を学んでいきます。また、大学美術館の協力のもと、収蔵作品の化学分析を行い、構造や古典技法を解析し、歴史的背景を研究しながら、模造制作をし、制作当時の姿を再現することも学びます。

学生数(2016年5月現在)  
〈修士〉1名 〈博士〉1名  
教員 辻 賢三、小椋 範彦\*、豊福 誠\*  
\*… 兼担



[http://www.geidai.ac.jp/department/gs\\_fine\\_art/independent\\_course#5](http://www.geidai.ac.jp/department/gs_fine_art/independent_course#5)



5



1

## 保存修復建造物

歴史的建造物の保存修復に際しては、保存理念、修復技術、保存・活用計画、復原設計、遺跡整備、保存管理、防災対策、まちづくり、保護制度、国際協力などの多岐にわたる視点からの総合的な判断が求められます。保存修復建造物研究室では、各人の専門領域を深めることに加えて、広い視野を備えた人材を育成したいと考えています。

また、我が国で高度に発達してきた木造建造物の修復技術を習得するために、建築技術史、修復技法、調査と評価、修復計画、実測・製図演習などの実践的な学習を通じて、文化財修理はもとより歴史的建造物の保存・活用のために必要な技を身に付けます。このような基礎の上に立って自ら調査・研究を進めることで、個性性の強い文化遺産の性格に応じた対処の考え方や手法を身に付けることとしています。

学生数(2016年5月現在)  
〈修士〉4名 〈博士〉3名  
教員 長尾 亮、光井 渉\*

\*… 兼担



<http://www.geidai.ac.jp/labs/ca/n/kenzoubutu.html>



6

## 保存科学

保存科学研究室では自然科学的な視点から文化財を調べ、劣化原因の特定による最適な保存環境の提案や、用いられた材料や制作技法などの解明を行っています。対象となる文化財は金属、紙、陶磁器、油彩画など多岐にわたり、研究室での調査・研究はもとより、屋外での調査まで幅広く行うため、先端の理化学機器を固定型や可搬型など用途により使い分けします。研究室の構成は、教員が9名、学生が19名(修士が8名、博士が11名)、日本学術振興会特別研究員1名、外国人客員研究員1名(2016年4月現在)であり、留学生が多いのも特徴の一つです。修了生の進路は美術館・博物館の学芸員、大学や高校の教員など多彩です。

学生数(2016年5月現在)  
〈修士〉8名 〈博士〉11名  
教員 稲葉 政満、桐野 文良、塚田 全彦



<http://www.geidai.ac.jp/labs/hozon/top.html>



7

## システム保存学

システム保存学は、1995年4月より東京国立文化財研究所(現 独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所)との連携講座としてスタートした研究室であり、計6名の東京文化財研究所の所員が兼任教員として学生指導にあたっています。

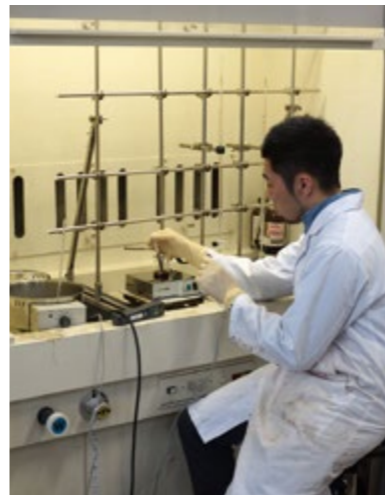
研究室は、文化財の保存環境を研究する「保存環境学講座」と保存修復に用いる材料について研究する「修復材料学講座」からなっており、文化財の環境と保存修復のための材料・技法の科学的かつ実践的な研究をテーマにしています。

学生の基本的な拠点は、本学から300mほど離れた東京文化財研究所であり、文化財の保存事業に関わる研究所の活動を目の当たりにしながら勉強できるところが特徴です。

学生数(2016年5月現在)  
〈修士〉1名 〈博士〉0名  
教員 佐野 千絵、岡田 健、朽津 信明、吉田 直人、佐藤 嘉則、早川 典子



<http://www.geidai.ac.jp/labs/preventive/>



8

- 1.2 保存修復日本画研究室
- 3 保存修復油画研究室
- 4 保存修復彫刻研究室
- 5 保存修復工芸研究室
- 6 保存修復建造物研究室
- 7 保存科学研究室
- 8 システム保存学研究室

# グローバルアートプラクティス専攻

## Global Art Practice

2016年4月から大学院美術研究科修士課程において、グローバルアートプラクティス（GAP）専攻を新設しました。GAP専攻は、グローバルな文脈で現代アートの社会実践を志向する研究と人材育成を目的とする専攻です。本専攻は、国境を越えてオルタナティブなネットワークや相互の社会関係を拡大するものです。国際的に活躍するアーティストや世界のトップクラスの専門家の指導による本専攻は、大学院生がアーティストや研究者として指導的な役割を果たせるために、授業は英語で行われ、柔軟に構成された革新的なプログラムを開発します。

### 大学院 修士

#### 主なカリキュラム

##### 1. グローバルアートプラクティス

世界最高峰の美術系大学と本専攻の教員・学生がユニットを構成して共同カリキュラムの授業を実施し、日本と相手国において実技授業を開講します。授業は原則として英語で行います。2016-2017年のグローバルアート共同カリキュラムはロンドン芸術大学・セントラル・セント・マーティン校、パリ国立高等美術学校と実施。それぞれのテーマのもとで講義、リサーチ、ワークショップ、制作、発表等を行います。これらのグローバルアート共同カリキュラムのプロセスや結果は、リアルタイムでHPに公開すると共に、日本とフランスにおいて展示予定です。

##### 2. 社会実践論講義

現代アートの世界をリードするトップクラスの専門家による講師陣を本専攻のためのゲスト教授として海外から招聘し、グローバルな文脈で現代アートの社会実践における重要な問題を取り上げるセミナー形式の授業、講演会ならびにフォーラム等を開催します。また、招聘した教授から直接個人指導を受けることができます。グローバルな文脈について多面的に理解を進めることで、他者の考えや感情を共有できる基盤をつくります。それらのプロセスを通じて、学生が互いに個性を尊重しながら、討議や発表など活動の場を展開できる能力を育てます。2016-2018年に招聘する教授陣には、アルフレッド・ジャー、イ・ヨンウ、ワン・フィ、マレック・バルテルック、ホウ・ハンル他を予定しています。

##### 3. GAP 演習

独自の近代化を経た日本で唯一の国立芸術大学である本学が培った美術諸領域の伝統と技術のダイナミズムを紹介します。本演習は、実技を通じて近代化と伝統を熟考し批評的洞察に導く、他に類をみない講座となります。2016-2018年は、木工芸、漆、染色、和紙・木版画、ガラス、金工、プログラミング、パフォーマンス等を選択履修することができます。

##### 4. 日本文化体験演習

本学はアジア広域の文化財保存領域において世界を牽引しています。本演習では伝統と現代的な技術を融合させた研究技法など、世界の豊かな文化財に関する知見と、文化財保存の多彩な活動展開や現代における意義を学びます。

##### 5. GAP 古美術研究旅行

長い歴史をもつ京都と奈良への古美術研究旅行は、本学の伝統的なカリキュラムのひとつです。その一環としてGAP専攻の学生のために、京都の三大祭りである祇園祭の宵山での山鉦巡業を中心とした滞在研究が特別に企画されます。

##### 6. 英語による日本アート特別講義

絵画、彫刻、工芸、デザイン等における日本に特有の側面を、各領域の第一線の研究者である本学教員による特別講義の選択科目として受講することができます。

学生数 (2016年5月現在) 〈修士〉18名  
 教員 たほりつこ、O JUN、大巻伸嗣、小沢剛、飯田志保子、菌部秀徳  
 [助教] 柴田悠基、田村かのこ

<http://gap.geidai.ac.jp/>



1



2



3



4



5

1 GAP演習 (木工芸) 授業風景  
 2 グローバルアート共同カリキュラム パフォーマンス風景  
 3 社会実践論 授業風景  
 4 グローバルアート共同カリキュラム パフォーマンス風景  
 5 グローバルアート共同カリキュラム 講評風景

### 国境を越え新たな人間性を志向する芸術教育

#### たほりつこ

世界各地から学生が集まり、相互に今日的状況についての意見交換や文化的背景を理解しながら、傍観者ではなく積極的に現在を問ひかけ、多様な変化を志向し、まったく新しい芸術への発想、表現、態度、行動を生みだすことを目指しています。GAP専攻は、国境を越えた芸術表現の批評的インキュベーターであり、世界各地の伝統と現代の芸術表現が混交する自由な実験の場です。自分を守り束縛する「繭」としての言説や価値観を内破した自由な地平から人間の在り方を問う芸術表現の人材育成が今日的役割です。意欲的な学生を期待します。

#### 小沢剛

もしもアートで言語も文化も超えて理解し合えるのであれば、これほどすばらしいことはありません。私たちはそのアートを、それ以外の世界の人に対してに翻訳して活用させるのが仕事だと考えます。それが作品を作るということでしょう。現在の世界のアートシーンは多極化されており、特定のエリアに新しいものが生まれるわけではありません。様々なバックグラウンドの人が集う切磋琢磨の空間にこそ新しい価値観が生まれると考えています。

#### O JUN

お互いがそれぞれ異なる民族、言語、文化を持ちながらそれぞれのある時期にたとえば一つの場を共有したとすれば、私たちはその場でどのような出会いを経験し、お互いを行き来し、思考し、行動をすするだろう?ともシンプルな問いでありながら、同時代性を認識し、そこから手応えとしてのイメージ(実体)を創り出すことができるかどうか、これは壮大な実験になると思う。様々なカリキュラムとプロジェクトに参加して学生たちに未来を体験してもらいたい。GAPはその最初の実験場です。

#### 飯田志保子

GAPでは国際的な現代アートのアクチュアルな潮流と実践ならびに各地域固有の方法で築かれてきた芸術の歴史と伝統を、学内のみならず海外の芸術大学との共同授業を通して学ぶ機会があります。そこでは新たな人々や文化との出会いとともに、さまざまな知識、問い、時に葛藤ももたらされることでしょう。本専攻は、ソナタが述べたように「世界は『私』のためにあるのではない」ことを実感し、グローバルな現代社会を生きるアーティストに必要な批評的視座と、社会におけるアートの実践とは何か各自の芸術哲学を培う場となります

#### 大巻伸嗣

国際になる事は、客観的になる事かもしれない。日本、アジア、地球私たちの今をどのように捉え海外の大学の学生たちと一緒に考えていくところそれがGAPというところだ。積極的に関わり自ら発見し、行動ができる場となります

#### 菌部秀徳

国籍、芸術分野ともに様々な背景を持つ学生が集まり、美術家、研究者の育成のために開かれた専攻です。魅力的で柔軟性ある海外の他大学との共同カリキュラムや社会実践論はグローバルな視野で現代社会を背景とし、制作や研究に幅と充実した内容もたらします。また、取手校地の特色である美術学部の様々な工房は個人制作やGAP演習として開かれ、作品制作における作者の素材観の形成、専門的な技法の体得とその原理の理解を助けます。



# SOIN



## 音楽学部・大学院音楽研究科

東京藝術大学音楽学部は、その前身である文部省音楽取調係（1879年）および東京音楽学校（1887年）を経て、音楽教育の水準を西洋と肩を並べることを目指し、西洋音楽文化の吸収に努めるなど、日々の研鑽を積み重ねてきました。

その後、昭和24年（1949年）には国立学校設置法施行により東京藝術大学が設置され、平成16年（2004年）には国立大学法人として130年を超える歴史を持つ、国立大学の中で由一の音楽を専門とした教育・研究を行っています。

これまでに多くの名だたる演奏者・研究者を輩出しており、今後も学生個々の才能に磨きをかけるとともに、それだけに留まらず社会における音楽の役割を訴え続け、人々が音楽を身近に感じ、音楽の力で人と人のふれあいを取り戻すようにすることこそが本学部の使命と感じています。

このため、子どもたちの未来に、音楽が共にあるような社会となるよう本学部は、平成26年度から早期教育プロジェクトを開始し、飛び入学、早期卒業、海外留学、キャリア支援等と、音楽の教育が一連のつながりをもった人材育成ができるよう推進をしています。

本学部は、日本における音楽の最高学府としての立場ばかりではなく、広く社会に開かれた目と独自性に富む発想を常に持つ教育を目指していきたいと思います。

音楽学部長  
大学院音楽研究科長 迫 昭嘉

### 音楽学部 アドミッションポリシー

音楽学部は、音楽についての深い学識と高い技術を受け、音楽の各分野における創造、表現、研究に必要な優れた能力を養い、社会的要請に応える人材の育成を目指しています。この教育理念に基づき、本学部からは、百年以上にわたり世界的な音楽家や広く社会の文化発展に寄与した多くの人材を輩出してきました。こうした伝統と遺産を継承しつつ、新たな歴史を刻み込む強い意志と意欲を持った方を求めています。具体的に本学部各科が求める学生像は次のとおりです。

- 作曲科：優れた音楽的能力のみならず、伝統的な語法に関する確かな素養を身に付け、かつ自発性、創造性を有する人材
- 声楽科：優れた声楽家になる可能性を持ち、智と人間性に優れた人材
- 器楽科 ピアノ：優れたピアノ演奏技術と芸術的感性のみならず、音楽全般に対して幅広い関心を持っている人材
- 器楽科 オルガン：確かな目的意識と意欲を持ち自分の才能を伸ばす熱意と忍耐力を持ち、音楽とオルガンに喜びを持って取り組む人材
- 器楽科 弦楽：優れた基礎能力のみならず音楽表現に対する積極性を兼ね備えている人材
- 器楽科 管打楽：演奏家として、人間と音楽に関心を感している人材
- 器楽科 古楽：専攻する楽器の構造と歴史に深い関心を持ち、喜びと熱意を持って演奏表現に取り組む将来性ある人材
- 指揮科：優れたソルフェージュ力や豊かな説得力に富んだ音楽性を持ち、音楽的、芸術的に優れたリーダーシップを兼ね備えた人材
- 邦楽科：専攻分野のみならず専攻以外の音楽にも幅広く研究を重ね、技術・人格ともに優れた演奏家となるべく努力する人材
- 楽理科：幅広い資料を検証する語学能力、独自の視点・問題点を発見する独創力、批判的に歴史・社会・文化を考察する思考力と論理性、様々な音楽に感動する柔軟な心を備え、将来何らかの形で音楽研究・実践・教育に携わる志を持つ人材
- 音楽環境創造科：従来の枠をこえた観点で音楽芸術の創造を目指し、音楽・文化・社会の関わりについて強い関心を持ち、音楽を中心とした新しい文化環境創造を志す人材

### 大学院音楽研究科 アドミッションポリシー

大学院音楽研究科は、高度に専門的かつ広範な視野に立ち、音楽についての深遠な学識と技術を授けること、音楽に関わる各分野における創造、表現、研究又は音楽に関する職業等に必要となる職業等に必要となる能力を養うこと、さらには自立して創作、研究活動を行うに必要な高い能力を備えた教育研究者の養成を目的としています。この教育理念に基づき、本研究科は、音楽に関しての豊富な知見、高度の技術と卓越した研究能力を持ち、なおかつ、幅広い視野や興味・関心、柔軟な感性、独創的な構想力、論理的な思考力、強い意志を持っている人材を求めています。

### 楽器等の略号一覧

【Comp】作曲	【Pf】ピアノ	【Fl】フルート	【Trb】トロンボーン	【Rec】リコーダー
【Sop】ソプラノ	【Org】オルガン	【Ob】オーボエ	【Euph】ユーフォニアム	【Cemb】チェンバロ
【Ms】メソソプラノ	【Vn】ヴァイオリン	【Cl】クラリネット	【Tub】チューバ	【BOrg】バロックオルガン
【Alc】アルト	【Va】ヴィオラ	【Fg】ファゴット	【Perc】打楽器	【FP】フォルテピアノ
【Ten】テノール	【Vc】チェロ	【Sax】サクソフォーン	【BVo】バロック声楽	【Cond】指揮
【Bar】バリトン	【Cb】コントラバス	【Hr】ホルン	【BVn】バロックヴァイオリン	【Cond】指揮
【Bs】バス	【Hp】ハープ	【Trp】トランペット	【BVc】バロックチェロ	【chamber orch】チェンバーオーケストラ

## 飛び入学

## Special Soloist Program

東京藝術大学 SSP (飛び入学) の目的は、音楽分野における卓越した才能を高度に発展させ、我が国はもとより世界的な音楽文化の振興に対して生涯にわたって貢献する個性的・先駆的な人材を戦略的に育成することです。類い希な表現力や高度な専門的技術、強靱なメンタル等のきわめて優れた資質・能力を有し、将来的に国際舞台での活躍を志す若者に対して、入学当初から特色ある高度な大学教育の機会を提供するものです。

## 学部1・2・3・4年次

本プログラムの特徴として、次の特別カリキュラム等が用意されます。

- 個人レッスン時間を通常カリキュラムから倍増すること
- 海外一流演奏家による特別レッスをはじめ、海外一流音楽大学等への留学や国際舞台における演奏の機会等を優先的に提供すること
- 選択科目は実技教員と検討の上、自由な組み合わせ(語学科目に重点を置く等)が可能となること
- 成績優秀者については、学部を3年間で早期卒業して、大学院進学や海外留学を可能とする特別カリキュラムを編成するとともに、授業料免除や特別奨学金による経済的支援を開始すること
- 複数教員による手厚い指導・サポート体制等、充実したキャリア形成支援を行うこと

本プログラムでは、世界最高水準の指導体制・教育環境のもと、質の高い専門実技教育や、それを支える音楽理論等の幅広い学びを通じて、技術や知性、感性を徹底的に磨き上げることにより、将来、国際的な音楽家として新たな地平を開拓し歴史に名を刻む強い意志と意欲を持った学生を求めています。

## 入学選抜における基本方針

提出書類(自己推薦書、推薦書、調査書等)、実技検査及び面接により、多角的な視点から学生の資質・能力を評価し、総合的に合否を決定します。

- 自己推薦書では、国際コンクールにおける入賞歴等、これまでの音楽活動における顕著な業績などを高く評価します。
- 推薦書及び調査書等では、早期に大学教育を受けるために必要な基礎学力などを評価します。
- 実技検査及び面接では、海外一流演奏家にも参画いただき、音楽の基礎能力及び専攻実技に関する表現力などを評価します。

## 入学までに身に付けて欲しいこと

高等学校における基礎的な学力を修得していること。さらに、専攻実技に関する高度な技能と豊かな表現力を身に付けていることを望みます。



## 作曲科

## Composition

近代市民社会の中での音楽家＝作曲家は、同時代の文化的な感性を生かした創作を行うと同時に、受け継がれてきた伝統的音楽の在り方を、歴史的であるとともに同時代的に理解して、それらを保持していく役割を負っています。

作曲技術と創作術の習得は、「音楽作品」を生み出すのみではなく、演奏、理論全体の今日的な在り方を俯瞰できる能力の養成を目指すものでなければなりません。

## 学部1・2・3・4年次

4年間の学習プログラムは、大別して3つのカテゴリーからなっています。

- 1) 実技Ⅰ 1年次…二重奏(ピアノを含む)作品、2年次…室内楽作品、3年次…声楽作品および管弦楽作品、4年次…卒業作品(編成自由)の提出。
- 2) 実技Ⅱ 1年次…和声および嚴格対位法とフーガ、2年次…フーガからなる伝統的音楽書法の習得。
- 3) 1年次…楽曲解析(分析)、2年次…管弦楽法(実習)は必修。また2年次より、作曲研究として「音楽と言語」から「コンピュータ・ミュージック」のように、歴史的なものから今日の技法に至る科目が選択必修。提出作品の演奏審査(二重奏、声楽作品)のほか、提出作品から2年次提出の室内楽作品6曲程度が「木曜コンサート」(旧東京音楽学校奏楽堂)で、また3年次提出の管弦楽作品4曲が「モーニング・コンサート」(奏楽堂)、首席卒業作品が新卒生紹介演奏会(奏楽堂)で、それぞれ藝大フィルハーモニアにより公開演奏されます。また著名な作曲家、現代音楽演奏者による特別講座やワークショップが多数企画されます。

## 学部カリキュラム

- 〈1年次〉【必修科目】作曲実技Ⅰ(二重奏曲)、作曲実技Ⅱ(和声)、作曲理論(嚴格対位法とフーガ、楽曲解析)、副科ピアノ、ソルフェージュ 【選択科目】西洋音楽など
- 〈2年次〉【必修科目】作曲実技Ⅰ(室内楽曲)、作曲実技Ⅱ(フーガ)、作曲理論(管弦楽法)、副科ピアノ、ソルフェージュ 【選択科目】副科実技(独唱、弦楽器、管打楽器、邦楽)など
- 〈3年次〉【必修科目】作曲実技Ⅰ(声楽作品、管弦楽曲) 【選択科目】作曲研究(和声、フーガ、コンピュータ・ミュージック、管弦楽法、楽曲研究、現代音楽技法、音楽と言語)、副科実技など
- 〈4年次〉【必修科目】作曲実技Ⅰ(卒業作品、学内演奏) 【選択科目】作曲研究(和声、フーガ、コンピュータ・ミュージック、管弦楽法、楽曲研究、現代音楽技法、音楽と言語)、副科実技など

## 大学院 修士・博士

- 1) 1年次提出作品(編成自由)の演奏審査。
- 2) 修了作品の提出と口述試問。  
作曲研究分野とエキリチュール(和声、フーガ等音楽書法)研究分野からなり、作曲実技演習のほか、コンピュータ音楽演習では、ライヴ・エレクトロニクスを援用した作品の制作も学ぶことができます。
- 3) 20世紀以降の音楽作品、音楽技法、音楽理論等に関する修士論文の提出。特に外国語による基本文献の理解、自作の英語プレゼンテーション等、語学教育が重視され、修士課程から博士後期課程への一貫した現代音楽研究が推奨されます。修士課程における優れた管弦楽作品は、隔年開催の「創造の杜・藝大現代音楽の夕べ」で演奏されます。

## 学生数(2016年5月現在)

〈1年次〉15名 〈2年次〉15名 〈3年次〉15名 〈4年次〉20名  
【作曲】〈修士〉12名 〈博士〉0名 【エキリチュール】〈修士〉2名 〈博士〉0名

教員 小鍛治 邦隆、野平 一郎、安良岡 章夫、鈴木 純明、林 達也、西村 朗\*、土田 英介\*、渡辺 俊哉\*、伊藤 弘之\*、金子 仁美\*、鈴木 輝昭\*、折笠 敏之\*、小河原 美子\*、市川 景之\*、石井 佑輔\*

\*…非常勤講師



レッスン風景

## ユマニズムと厳格な技術

作曲科では、あらゆる音楽分野で応用可能な技術と知識・見識を、歴史的・伝統的音楽技法の習得を通じて指導します。

利便的な(安易に使い回せる)作曲技法ではなく、ヨーロッパ近代音楽の伝統的な創作術として、「人間性(ユマニズム)」に基づく表現である「音楽作品」の、厳格な技術による実現を教育の根本としています。

教員の多くは内外の現代音楽界で重要な活動や作品で注目されており、海外の現代音楽思潮を共有しながら、日本文化の中でいかに今日的な音楽活動や作品を生み出していかということが、作曲科における教育活動の最重要課題です。

また、教員と同様、内外の現代音楽コンクール受賞、現代音楽講習会で注目される学生も多くいます。作曲科での演奏審査のほか、藝大フィルハーモニアによる公開演奏、アンサンブル・アンテル・コンテンポランやアンサンブル・リティネレル等の優れた現代音楽演奏団体による特別講座やワークショップの中で学生の作品が演奏され、こうした貴重な経験を得て、プロフェッショナルな道程へと進んでいきます。

<http://www.geidai.ac.jp/department/music/composition>



# 声乐科 Vocal Music

声乐科では、個人レッスンにおいて個々の発声等の声乐技術と音楽表現を磨くことを軸に、「合唱」「声乐アンサンブル」等のアンサンブルの授業や「オペラ基礎」「オペラ実習」等の授業を通じて、声楽家としての基礎能力と知識を習得します。演奏家としての国際性と音楽の果たす役割の重要性を認識し、演奏家同士のコミュニケーション能力はもとより、自らの演奏を通して広く社会に貢献することのできる心豊かな人材育成を目指しています。



撮影：永井 文仁



藝大定期第367回 藝大フィルハーモニア・合唱定期演奏会「J.S.バッハ(クリスマス・オラトリオ) BWV248より」

### 学部1・2・3・4年次

学部4年間を通して、個人レッスンでは、発声などの基礎的な声乐技術を習得すると同時にソリストとして求められる高い音楽表現能力を学びます。また、楽曲を演奏する上で重要な音楽的・語学的知識を深め、智と人間性にも優れた音楽家を目指します。声乐の演奏は一人ではできません。常に共演者を必要とします。そのため、1年次から3年次までの「合唱」、それに続く「声乐アンサンブル」「室内合唱」等、また「オペラ基礎」「オペラ実習」等の授業においては、アンサンブル能力を高めるプログラムが用意されています。これらのプログラムによって、音楽の果たす役割の重要性を認識し、自らの演奏を通して広く社会に貢献できる人材育成を目指します。

### 学部カリキュラム

- 〈1年次〉[必修科目] 声乐実技、合唱、ソルフェージュ、器楽実習、和声  
[選択科目] 声乐実習(フランス歌曲、スペイン歌曲、ロシア歌曲、ドイツ歌曲)、コレパティツィオンなど
- 〈2年次〉[必修科目] 声乐実技、合唱、ソルフェージュ  
[選択科目] オペラ基礎、声乐実習、声乐実習、古典舞踊、副科実技、理論(和声、管弦楽概論、対位法)など
- 〈3年次〉[必修科目] 声乐実技、合唱  
[選択科目] 声乐アンサンブル、オペラ実習、声乐実習、声乐実習、古典舞踊、舞台語発音、副科実技、理論など
- 〈4年次〉[必修科目] 声乐実技、合唱、学内演奏、卒業演奏  
[選択科目] 声乐アンサンブル、オペラ実習、声乐実習、声乐実習、古典舞踊、舞台語発音、副科実技、理論など

### 大学院修士・博士

大学院では「独唱」を学びます。「独唱」ではオラトリオなどの宗教曲や歌曲などを中心に研究し、「オペラ」ではオペラ歌手としての実体験を積み重ねます。また、「声乐特殊研究」では、日本・ドイツ・イタリア・フランス・英米の歌曲と、宗教音楽・重唱(アンサンブル)等の多くの選択肢を設けており、幅広く学ぶことができます。修士課程、博士後期課程いずれも、自らの演奏体験から導き出された、演奏家ならではの研究分析が中心となり、特に原典研究などの論文作成に必要な外国語の知識が重要となります。

### 学生数(2016年5月現在) ※左より(1年次)(2年次)(3年次)(4年次)

- [Sop] 32名 / 28名 / 20名 / 29名
- [Alt] 6名 / 4名 / 6名 / 9名
- [Ten] 6名 / 15名 / 14名 / 14名
- [Bs] 10名 / 7名 / 14名 / 11名
- [独唱] (修士) [Sop] 24名 [Ms] 3名 [Ten] 5名 [Bar] 5名 (博士) [Sop] 5名 [Ms] 4名 [Ten] 1名 [Bar] 1名 [Bs] 2名
- [オペラ] (修士) [Sop] 7名 [Ms] 3名 [Ten] 2名 [Bar] 4名 (博士) [Sop] 1名 [Ms] 1名 [Ten] 0名 [Bar] 1名

- 教員 [Sop] 佐々木 典子、平松 英子、菅 英三子 [Ms] 永井 和子、手嶋 真佐子 [Ten] 川上 茂、吉田 浩之、櫻田 亮 [Bar] 勝部 太、福島 明也、甲斐 栄次郎



<http://vocal.geidai.ac.jp/>

### 二つの定期演奏会

声乐科では「合唱定期」と「オペラ定期」の二つの定期演奏会を通じて、学生たちに実践経験の場を設けています。「合唱定期」は、授業としての「合唱」の年1回の発表の場となります。学部1年次から3年次までの履修者が合唱を、オーディションにより選出された大学院生がソリストをそれぞれ務め、第一線で活躍されている指揮者と藝大フィルハーモニアが演奏する、まさに声乐科を上げての定期演奏会です。ソリストたちはもちろんのこと、学部生による合唱の高い演奏水準は、常に各方面から絶賛されています。「オペラ定期」では、合唱は学部3年次、オーケストラは藝大フィルハーモニアが演奏します。主要なキャストは大学院修士課程2年次の学生を中心に選出され、お招きした指揮者、演出家と共に充実した舞台を作り上げます。大学院修了後に国内外で活躍する声楽家・オペラ歌手にとって、多くを学ぶ貴重な機会となっています。このように学部生から大学院生までの力を結集して、二つの定期演奏会を行えることは、声乐科の一貫した教育・研究の賜物であり、藝大ならではのことができるでしょう。



撮影：TAKE-O

2015年10月3日 第61回藝大オペラ定期公演 W.A.モーツァルト作曲《フィガロの結婚》全四幕 第三幕婚礼の踊り 奏楽堂



撮影：TAKE-O



2015年10月4日 第61回藝大オペラ定期公演 W.A.モーツァルト作曲《フィガロの結婚》全四幕 第四幕フィナーレ 奏楽堂



2011年2月11日、12日 平山郁夫先生一周忌追悼公演 松下功作曲 オペラ《遣唐使》 奏楽堂



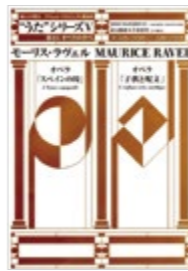
2013年 10月26日、27日 藝大アーツイン 東京丸の内2013 D.チマローザ作曲 《秘密の結婚》ハイライト公演 丸ビル・マルキューブ



2012年 10/28 奏楽堂シリーズ特別演奏会、日英連続公演: B.プリテン作曲 教会オペラ: 《カーリユー・リヴァー》能: 隅田川



2005年 9/18、19 うたシリーズ: Chr.W.グルック作曲 オペラ: 《オルフェウス》



2005年 6/28 うたシリーズ: M.ラヴェル作曲 オペラ: 《スペインの時/子供と呪文》



撮影：TAKE-O



撮影：TAKE-O

# オペラ専攻 Opera

藝大が推し進めてきた「グローバル大学創成」(平成26年度文科省支援事業に採択)の下、2016年春から大学院音楽研究科に「オペラ専攻」がスタートしました。専攻概要については、カリキュラムポリシーやディプロマポリシーを含め多くは従来通り声乐科にありますが、入学試験を声乐専攻とは別に行いこれまで以上に世界の芸術機関との連携を通し国際的な感覚を身につけた優れたオペラ歌手やオペラに深く関わる人材の育成を目的としています。

### 大学院修士・博士

従来の「オペラ歌唱」関連科目をより専門化すると同時に、各科目の連携を強化することで、オペラ歌唱に係る総合的教育を行い、オペラ史、作品分析や台本購読などによって音楽理論や他分野の芸術との関連、歴史・社会的背景などの理解を深めることを目指します。具体的には「グローバルに活躍するオペラ芸術家の個人指導による発音・発声・歌唱表現・演技等の実技研究」、「指揮やソルフェージュ、作曲、ピアノ等他専攻との連携強化による、総合芸術としてのオペラ制作」、「国内外の歌劇場との連携によるインターンシップ」、「社会と連携した芸術活動」などにより、オペラ歌手に必要な歌唱力、テキスト解釈、舞台演技、多言語に亘るディクシオン(舞台語発音法)をはじめ高度な専門的能力、演技の表現能力や理論等を習得することを目的としています。

### 修士課程カリキュラム

- [必修科目]
  - ・声乐実習・楽曲分析演習…学生の研究課題に応じて、オペラ歌手になるために必要な声乐技術・言語表現・音楽表現等を学修する。
  - ・オペラ総合実習Ⅰ・Ⅱ…オペラ・ハイライト、オペラ定期公演におけるオペラ作品の実演を通じてオペラ歌唱・演技の特性を学修する。
  - ・オペラ実習Ⅰ・Ⅱ…舞台上の身体表現、運動・演技能力を培う。
  - ・オペラ特殊研究A…コレパティツィオンを通じてディクシオンを学び、ドラマの解釈を深め知識と創造性に富んだ表現を身につける。
  - ・オペラ特殊研究B…正確なディクシオンを身につけ、歌詞や楽曲の理解・解釈を深め、歌唱表現を探究する。
- [選択科目]
  - ・オペラ台本購読、オペラ特殊研究C(オペラ史)、オペラ分析演習、インターンシップ

- 学生数(2016年5月現在) [Sop] 5名 [Ms] 1名 [Ten] 1名 [Bar] 2名

- 教員(声乐専攻兼任) [Sop] 佐々木 典子、平松 英子、菅 英三子 [Ms] 永井 和子、手嶋 真佐子 [Ten] 川上 茂、吉田 浩之、櫻田 亮 [Bar] 勝部 太、福島 明也、甲斐 栄次郎 招聘教授 S.ローチ 特別招聘教授 M.テンメ



# 器楽科 弦楽

## Strings Instruments

弦楽専攻は、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス、ハープの5つの楽器種からなっています。優れた基礎能力のみならず、音楽表現に対する積極性を兼ね備えた人材を育成することを目標にしています。

### 学部1・2・3・4年次

専攻楽器の個人レッスンを中心として、それぞれの楽器演奏の基礎的なテクニックを見直しながら、さらに演奏技術を高め、表現力豊かな演奏を目指します。具体的には、ソロ作品や二重奏ソナタのレパートリーを軸に、作品の様式感や和声感を基として演奏解釈を学ぶことになります。また、1年次の弦楽合奏、2年次以降のオーケストラ、三重奏以上の室内楽を履修し、様々な形態に対応できるアンサンブル能力を身に付けます。これらの授業においては、弦楽専攻の教員全員が一丸となって各学生の成長を促し、見守り、折に触れてアドバイスを与える、きめ細かい指導体制を整えており、さらに海外から招聘する世界一流の教授陣による指導と併せて、充実したプログラムを受講することができます。

各年次後期に行う実技試験は、福島賞などの奨学金や藝大フィルハーモニアとのコンチェルト協演（モーニング・コンサート）、学外コンサート出演のためのオーディションを兼ねており、またこれとは別に、3年次の秋には演奏会形式による実技試験（学内演奏会）を行います。

### 学部カリキュラム

- 〈1年次〉【必修科目】専門実技、副科ピアノ、西洋音楽史、和声、弦楽合奏、室内楽、ソルフェージュなど
- 〈2年次〉【必修科目】専門実技、西洋音楽史、和声、オーケストラ、ソルフェージュなど  
【選択科目】副科実技、室内楽など
- 〈3年次〉【必修科目】専門実技、学内演奏、オーケストラ  
【選択科目】副科実技、ソルフェージュ、和声、室内楽など
- 〈4年次〉【必修科目】専門実技、卒業演奏、オーケストラ  
【選択科目】副科実技、ソルフェージュ、和声、室内楽など

### 大学院 修士・博士

大学院では、さらなる鍛錬を通じて演奏技術や音楽表現を高めていくことを目指します。実技レッスンにおける楽曲研究はもとより、楽器別の特殊研究授業、チェンバーオーケストラや藝大フィルハーモニアへのエキストラ出演、室内楽など、多様なカリキュラムから、より自発的な研鑽が望まれます。

学生数（2016年5月現在）※左より〈1年次〉〈2年次〉〈3年次〉〈4年次〉〈修士〉〈博士〉  
[Vn] 23名/18名/21名/18名/17名/1名 [Va] 3名/6名/5名/7名/3名/0名 [Vc] 6名/6名/7名/7名/7名/0名 [Cb] 3名/4名/2名/5名/2名/0名 [Hp] 0名/2名/2名/2名/3名/0名

教員 [Vn] 漆原 朝子、澤 和樹、清水 高師、玉井 栄採、野口 千代光\*1、松原 勝也\*1、大谷 康子\*2、植村 太郎\*2、小川 有紀子\*2、長原 幸太\*2、篠崎 史紀\*2、花田 和加子\*2、堀 正文\*2、村澤 瑠紀\*2 [Va] 市坪 俊彦、川崎 和憲、大野 かおる\*2 [Vc] 河野 文昭、中木 健二、西谷 牧人\*2、向山 佳絵子\*2、山本 裕康\*2、冨田 雅治\*2、山澤 慧\*2 [Cb] 池松 宏、吉田 秀、西山 真二\*2 [Hp] 早川 りさ子\*2、松井 久子\*2

\*1…兼任 \*2…非常勤講師



1



2

撮影：永井 文仁（1・2）

### アンサンブル教育

弦楽専攻では、ソリスト・レパートリーの教育のみならず、弦楽器奏者として必須のアンサンブル能力を身に付けるための教育に力を入れています。協調性を育みながら個性も生かすという、社会に出てから必要不可欠な素養を育てる方針の下、1年次の弦楽合奏では各教員が分担して授業を行い、2年次からの室内楽履修においても、室内楽専攻の教員だけでなく、弦楽専攻全教員による指導を行っています。

[http://www.geidai.ac.jp/department/music/instrumental\\_music#string](http://www.geidai.ac.jp/department/music/instrumental_music#string)



# 器楽科 管打楽

## Wind and Percussion

木管・金管・打楽器からなる管打楽はフルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、サクソフォーン、トランペット、ホルン、トロンボーン、ユーフォニアム、チューバ、打楽器の各専攻に細分されます。これらの楽器で編成されている吹奏楽をはじめ、弦楽器とともに管弦楽や室内楽の授業を通してコミュニケーション力を育て、芸術家として高い人格と感性あふれる人材育成を目標にしています。

### 学部1・2・3・4年次

専攻楽器の個人レッスン、吹奏楽、管弦楽、室内楽が実技にかかわる主な必修科目です。専攻実技においては1～3年次の前期・後期試験、4年次での学内演奏会・卒業演奏会と成果を発表し、経験を重ねながら演奏技術を向上させ、成績優秀者には賞の授与のほか、モーニング・コンサート（藝大フィルハーモニアとのコンチェルト協演）など学内外での演奏会出演の機会が与えられます。海外のトッププレイヤーも継続的に特別招聘教授として招いており、世界の先端のレッスンが受講できます。吹奏楽は前期の学内演奏会や後期の定期演奏会、管弦楽でも年間を通して発表の場が設けられ、即戦力となる確実な技術を身に付けられるカリキュラムです。そのほか、即興演奏、特殊奏法、オーケストラスタディ、ジャズといった関連科目も開設され、将来、幅広い分野での活動に対応できる演奏家を育てるべく、充実した教育プログラムを用意しています。

### 学部カリキュラム

- 〈1年次〉【必修科目】専門実技、管打合奏、室内楽、和声、ソルフェージュ、副科ピアノ、西洋音楽史  
【選択科目】管楽器特殊奏法、オーケストラスタディなど
- 〈2年次〉【必修科目】専門実技、吹奏楽、オーケストラ、西洋音楽史  
【選択科目】室内楽、和声、ソルフェージュ、副科ピアノ、管楽器特殊奏法、オーケストラスタディなど
- 〈3年次〉【必修科目】専門実技、吹奏楽、オーケストラ  
【選択科目】室内楽、和声、ソルフェージュ、副科ピアノ、管楽器特殊奏法、オーケストラスタディなど
- 〈4年次〉【必修科目】専門実技、学内演奏、卒業演奏  
【選択科目】吹奏楽、室内楽、和声、ソルフェージュ、副科ピアノ、管楽器特殊奏法、オーケストラスタディなど

※専攻楽器によって多少の違いがあります

### 大学院 修士・博士

学部卒業後、さらに専門性を高める課程として修士・博士後期課程があります。専門実技や室内楽レッスン、藝大フィルハーモニアでの管弦楽演奏のほか、演奏解釈論や作品研究といった学術的なアプローチにも力を入れ、総合的な学識を持つ自立した音楽家の養成を目指します。

学生数（2016年5月現在）※左より〈1年次〉〈2年次〉〈3年次〉〈4年次〉〈修士〉〈博士〉  
[Fl] 7名/7名/7名/6名/11名/1名 [Ob] 4名/3名/4名/3名/6名/0名 [Cl] 5名/5名/6名/6名/7名/0名 [Fg] 4名/3名/4名/4名/2名/0名 [Sax] 4名/3名/4名/4名/4名/0名 [Trp] 2名/3名/3名/4名/2名/0名 [Hr] 3名/2名/5名/2名/0名 [Trb] 3名/1名/3名/3名/0名/0名 [Euph] 0名/2名/1名/2名/1名/0名 [Tub] 1名/2名/1名/1名/2名/0名 [Perc] 3名/3名/3名/5名/3名/0名

教員 [Fl] 高木 綾子、神田 寛明\*2、木ノ脇 道元\*2、小池 郁江\*2、竹澤 栄祐\*2、萩原 貴子\*2 [Ob] 小畑 善昭、青山 聖樹\*2、池田 昭子\*2 [Cl] 山本 正治、伊藤 圭\*3、十亀 正司\*2、金子 平\*2 [Fg] 岡崎 耕治\*1、岡本 正之\*2、水谷 上総\*2 [Sax] 須川 展也\*2、MALTA\*1、林田 祐和\*2、大石 将紀\*2 [Trp] 柳本 浩規、菊本 和昭\*2、佐藤 友紀\*2 [Hr] 日高 剛、五十畑 勉\*2、伴野 源介\*2 [Trb] 古賀 慎治、石川 浩\*2 [Euph] 藤木 薫\*2 [Tub] 池田 幸広\*2 \*1…客員教授 \*2…非常勤講師 [Perc] 藤本 隆文、安江 佐和子\*2、竹島 悟史\*2 \*3…特任准教授



1



2



3

撮影：永井 文仁（1・2・3）

### 日々の練習は何のために…？



楽器がうまく演奏できるように一生懸命練習していても、つい見失いがちな本当の目標。音楽家として、楽器を通して何ができるのか、何を伝えたいのか。管打楽専攻が重点を置いて取り組んでいることの一つに、地方との交流事業があります。地域の文化振興から震災復興支援まで目的は様々ですが、福島県伊達市、新潟県妙高市、茨城県取手市、長野県安曇野市、長崎県五島市などの交流都市に年数回、学生が指導に向き、主に中高生を対象とした指導会やミニコンサート、交流演奏会を開きます。数年にわたる交流を経て、少しずつ実力をつけてくる中高生の様子を楽しみに、学生も楽器を指導するという貴重な経験を得ています。旅を共にする仲間との交流、また迎えてくださる地域の風物や人々との触れ合いを通して、豊かな人間性を育てています。

[http://www.geidai.ac.jp/department/music/instrumental\\_music#windpercussions](http://www.geidai.ac.jp/department/music/instrumental_music#windpercussions)



# 器楽科 古楽

## Early Music

J.S.バッハをはじめとする17～18世紀の音楽を主な対象として、作品が生まれた時代の様式の楽器、演奏習慣にいつも立ち戻りながら、作品の魅力を追求していきます。学部は「チェンバロ」「バロックヴァイオリン」「リコーダー」の3専攻、大学院ではさらに「バロック声楽」「バロックチェロ」「バロックオルガン」「フォルテピアノ」が加わった7専攻からなり、ソロ、アンサンブルの両方をしっかりと学んでいきます。よく聴くことのできる柔軟な耳、そして作品と聴衆を自在につなぐしなやかな身体や心を持った音楽家を育てることを目標としています。

### 学部1・2・3・4年次

週に1度の「個人レッスン」を基盤とし、学年末の試験や勉強会での公開演奏を経験していきます。よく聴くこと、また楽器の性能をよく理解し、無駄な力の抜けた合理的な奏法を身に付けていくことが1～2年次の大きな課題です。3～4年次には、様式感を大事にして様々なレパートリーを弾き分けること、雄弁であることを課題として、「学内演奏」「卒業演奏」などを通じ、ソロ奏者としての表現力を磨いていきます。また、毎週の「古楽アンサンブル」の授業では、1～4年次まで様々な楽器・声楽と交わりながら経験を積んでいきます。そのほか「通奏低音」「和声」「ソルフェージュ」「語学」「古典舞踏」「古楽文献研究」など作曲家や共演者との共通の語彙を増やすための科目を学びます。集中講義や特別講座の形で、国内外の講師によるレッスンやワークショップを受講する機会もあります。

### 学部カリキュラム

- 〈1年次〉【必修科目】専攻実技、古楽アンサンブル、研究発表、古楽通奏低音実習、西洋音楽史、和声 【選択科目】古楽器概論またはオルガン概論、古典舞踏、鍵盤音楽史など
- 〈2年次〉【必修科目】専攻実技、古楽アンサンブル、研究発表、和声 【選択科目】副科オルガン、古楽器概論またはオルガン概論、古典舞踏、鍵盤音楽史など
- 〈3年次〉【必修科目】専攻実技、古楽アンサンブル、研究発表、古楽通奏低音実習、対位法 【選択科目】古楽アンサンブルまたは副科古楽、古楽ソルフェージュなど
- 〈4年次〉【必修科目】専攻実技、古楽アンサンブル、研究発表、古楽通奏低音実習、学内演奏、卒業演奏 【選択科目】古楽アンサンブルまたは副科古楽、古楽ソルフェージュなど

### 大学院 修士・博士

学部の3専攻に加え、「バロック声楽」「バロックチェロ」「フォルテピアノ」「バロックオルガン」の専攻が増え、計7専攻となります。「専攻レッスン」「古楽アンサンブル」「修士リサイタル」などで研鑽を積むほか、「古楽特殊研究」のゼミや修士論文執筆を通じて、自らの演奏家としての問題意識を客観視し、広く共有していくための方法論を学びます。

学生数(2016年5月現在) ※左より(1年次)(2年次)(3年次)(4年次)(修士)(博士)  
※BVo、Bvc、BOrg、FPIは(修士)(博士)のみ  
[Cemb] 3名/2名/3名/1名/4名/1名 [Bvn] 0名/0名/0名/0名/6名/1名 [Rec] 0名/0名/0名/1名/1名/0名 [BVo] 4名/2名/6名/3名/0名 [BOrg] 0名/0名/0名 [FP] 1名/1名

教員	[BVo] 野々下 由香里 [Cemb、BOrg] 大塚 直哉 [FP] 小倉 貴久子* [Bvc] 鈴木 秀美* [Rec] 山岡 里治* [Bvn] 若松 夏美*、戸田 薫*	[通奏低音] 廣澤 麻美* [ヴァイオリン・ダ・ガンバ] 福澤 宏* [フラウト・トラヴェルソ] 前田 リリ子* [バロックオーボエ] 三宮 正満* [古典舞踏] 市瀬 陽子*
----	--	--

\*…非常勤講師

<http://www.geidai.ac.jp/labs/kogaku/>



撮影：永井 文仁(1・2)



2

- 1 チェンバロの個人レッスン。楽器との一体感を増す身体の使い方、楽譜の読み取り方など様々な角度から追求していきます。
- 2 声楽と器楽が一緒になったアンサンブルレッスン。よく聴くことからすべて始まります。

### 声楽家と器楽奏者が深く交流しつつ学ぶ充実したカリキュラム

専攻別の個人レッスンのほかに、よく本学の古楽専攻の特徴として挙げられるのは「古楽アンサンブル」の授業です。毎週3つのクラスが開講され、それぞれバロックヴァイオリン、バロックチェロ、バロック声楽、ヴィオラ・ダ・ガンバ、チェンバロ、オルガンなど古楽演奏の第一線で活躍する演奏家がペアとなって講師となり、様々な形態のアンサンブルを学びます。このように自分の専攻ではない演奏家からも演奏に関わる様々なアドバイスを受ける機会に恵まれていること、また声楽と器楽がいつも一緒に学ぶ環境にあることは本専攻の大きな特徴です。試験も公開演奏の形で行われ、やる気のある学生はかなりの数の「現場」を体験できます。また、毎週ではなくその都度開催される「集中講義」「特別講座」では国内外の演奏家による様々なテーマ・レパートリーの下でのワークショップ、マスタークラスが行われるほか、「通奏低音」「古楽ソルフェージュ」「古典舞踏」「古楽文献研究」など理論や知識と実践をつなげるための、専攻を越えた科目も充実しています。卒業生の多くは、演奏家や音楽教育者として活動することを志望しており、海外に留学する者、また国内で地道な活動を積み上げて信頼ある音楽家の地位を築く者など様々です。近年は、国内外のコンクールの上位入賞者も目立っています。

# 器楽専攻 室内楽

## Chamber Music

コミュニケーションが多様化し、複雑となってきた現代において、室内楽は従来以上にその重要性を増しています。一つの作品に対して演奏家がどう表現するか、他者とどう融合させるのか、その過程はまさしく演奏を通じての対話と言えるでしょう。本学では室内楽の分野にいち早く注目し、東京音楽学校研究科の時代からその教育に重きを置いてきました。アンサンブル感覚を磨くことは学生間の音楽的交流を活発にし、豊かな音楽性を育みます。自発的な室内楽への興味を喚起させるためのより良い環境と、高度で専門的な室内楽研究を望む学生に対する細やかなサポート体制を整えています。

1 大学院室内楽研究分野レッスン風景  
2・3・4 室内楽定期演奏会



1



2



3



4

### 学部1・2・3・4年次 大学院

器楽科に在籍する学生(一部を除く)を対象に、1年次では室内楽の基礎を学ぶ必修科目として、2年次以降(および大学院)では自主的にグループを組む選択科目として、レッスン形式の授業を開講しています。指導陣には国内外で活躍する演奏家が揃い、室内楽の専任教員や講師はもろん、ピアノ、弦楽、管打楽の各専攻の専任教員も授業を担当し、年間を通してじっくり室内楽を学ぶことができます。1年間の集大成とも言える室内楽定期演奏会は1974年に始まり、現在では、本学で開催される種々の定期演奏会の中核を担う存在となっています。期末試験において優秀な成績を収めたグループは、この伝統ある室内楽定期演奏会に出演するなど、演奏の機会にも恵まれます。

学生数(2016年5月現在) ※左より(修士)(博士)  
[PF] 3名/0名 [Vn] 5名/0名 [Va] 1名/0名

### 大学院 修士・博士

より専門的に室内楽を極めたいという志の下、実践的な研究を進め、高い表現力と洗練されたアンサンブル感覚を身に付けることを目的とした大学院室内楽研究分野は、その存在自体が非常に珍しく、今後ますます注目されていくことだろう。第一線で活躍する室内楽奏者と共演しながら指導を受ける「リハーサル」は、本学独自の特筆すべき指導法の一つです。室内楽のスペシャリストと1対1で接する時間は学生の意識を高め、自発的なアンサンブル能力を引き出します。さらに担当教員のレッスンを受けることにより、多角的な視点からのアドバイスを得ることができ、室内楽奏者として問われる素質を着実に育むことができます。

教員	[Vn] 松原 勝也 [Va] 市坪 俊彦 [Hr] 日高 剛 ピアノ専任教員*1、弦楽専任教員*1、管打楽専任教員*1 [Pf] 津田 裕也*3、村田 千佳*3、居福 健太郎*3 [Vn] 西野 ゆか*3、山田 百子*3、佐原 敦子*3、 澤 亜樹*3 [Va] 川本 嘉子*3 [Vc] 菊地 知也*3、林 俊昭*3 [Fl] 斎藤 和志*3 [Ob] 和久井 仁*3 [Cl] 三原 秀実*3 [Fg] 岡崎 耕治*2、佐藤 由起*3 [Hr] 伴野 涼介*3 [Sax] 有村 純観*3、林田 祐和*3 [chamber orch] 別府 一樹*3
----	---

\*1…兼担  
\*2…客員教授  
\*3…非常勤講師

[http://www.geidai.ac.jp/department/music/instrumental\\_music#chamber](http://www.geidai.ac.jp/department/music/instrumental_music#chamber)



# 指揮科 Conducting

東京藝術大学が設置された1949年(昭和24年)に指揮科は開設されました。指揮科では将来プロフェッショナルな指揮者として、オーケストラ音楽・オペラ・バレエ・オラトリオ等を幅広く指揮する学生を育成しています。また、実技レッスンや各種指揮科授業等を通じて、優れた音楽家、芸術家であるとともに、優れた人格と統率力を備えた指揮者を育てることを教育理念としています。



撮影：永井文仁(1・2)

### 学部1・2・3・4年次

指揮科では「指揮実技」「演奏理論」「楽曲分析」など全学年の必修科目に加え、1、2年次はスコアリーディング、ソルフェージュ、和声、副科実技(弦管打楽器の中からいずれか)を必修することで、音楽の基礎的な知識を学び、また、3、4年次ではそれぞれの科目の上級クラスに加え、音楽史やオペラ指揮実習等を学ぶことで幅広い知識と実技能力を身に付け、実際にオーケストラの前に立ち指揮することに備えます。

学年末実技試験では、1年次から藝大フィルハーモニア(教員のオーケストラ)を前にしてのリハーサルと試験を行い、4年次になるとそれまでの経験を基に、学内演奏会・卒業演奏会の2つの演奏会(管弦楽:藝大フィルハーモニア)、藝大シンフォニーオーケストラ(学生オーケストラ)との公演に同行して、学外の演奏会で指揮をするなど、実践的なプログラムとなっています。

### 学部カリキュラム

- 〈1年次〉【必修科目】指揮実技、演奏理論、楽曲分析、スコアリーディング、副科ピアノ、ソルフェージュ、和声、弦管打楽器実技【選択科目】オペラ指揮演習など
- 〈2年次〉【必修科目】指揮実技、演奏理論、楽曲分析、スコアリーディング、副科ピアノ、ソルフェージュ、和声、弦管打楽器実技【選択科目】オペラ指揮演習、副科独唱、副科合唱など
- 〈3年次〉【必修科目】指揮実技、演奏理論、楽曲分析【選択科目】スコアリーディング、副科ピアノ、ソルフェージュ、和声、西洋音楽史、オペラ指揮演習、弦管打楽器実技など
- 〈4年次〉【必修科目】指揮実技、演奏理論、楽曲分析、学内演奏、卒業演奏【選択科目】スコアリーディング、副科ピアノ、ソルフェージュ、和声、西洋音楽史、オペラ指揮演習、弦管打楽器実技など

### 大学院修士・博士

大学院では「指揮実習」「指揮演習」の指揮実技を学びながら、指揮をする多くの機会が与えられます。指揮特殊研究ではオーケストラでの指揮をはじめ、オペラ科との授業により、オペラ指揮をすることはもちろんのこと、オペラ制作においての必要な経験と知識を身につけます。また、国内外より指揮者を迎えるマスタークラスの実施など、より専門的で実践的なプログラムとなっており、実技と並行して「指揮楽書特殊研究」や「原典特殊講義」をはじめとする授業を履修し、修士論文または修了演奏会に備えます。

### 学生数(2016年5月現在)

〈1年次〉2名 〈2年次〉2名 〈3年次〉1名 〈4年次〉2名 〈修士〉3名 〈博士〉0名

教員 高関 健、迫 昭嘉\*1、山下 一史、酒井 敦、  
ティハニ・ラーズロー\*3、ペーター・チャパ\*4、ドミニク・ウィラー\*4、尾高 忠明\*5、  
梅田 俊明\*2、現田 茂夫\*2、下野 竜也\*2、鈴木 織衛\*2、広上 淳一\*2、三河 正典\*2

\*1…兼担 \*2…非常勤講師 \*3…卓越教授 \*4…特別招聘教授 \*5…特別教授

### 2



実技レッスンは、演奏研究員(ピアニスト)も加わった2台ピアノ8手で行います。

### 恵まれた環境の中で

東京藝術大学は「毎日学内のどこかで必ずオーケストラがリハーサルや演奏会をしている」という、指揮科学生にとってはまさに理想的な大学です。学内には「藝大フィルハーモニア(管弦楽研究部)」や「藝大シンフォニーオーケストラ」のほか、「藝大チェンバーオーケストラ」「藝大ウインドオーケストラ」「附属高校オーケストラ」などの数多くのオーケストラから指揮者に直に学ぶことができ、さらに、学年末試験をはじめ、五芸祭、旧奏楽堂「木曜コンサート(指揮)」、旧奏楽堂「木曜コンサート(オペラ・指揮)」、藝祭演奏会、指揮科学内演奏会、伊澤修二記念音楽祭(於:伊那市)など多くの演奏会で指揮できることは、国内唯一とも言うべき恵まれた環境です。

### 将来に向けて

指揮科学生は授業以外にも藝祭をはじめ、オペラ公演、学生企画公演、旧奏楽堂「木曜コンサート」などの公演に参加しており、弦楽器、管打楽器、ピアノ、オペラ、そして邦楽に至るまでの多くの優秀な学生たちとの幅広い活動から有為な経験を数多く得ています。

### 多くの実績

指揮科では充実した教授陣に加え、国内外で活躍する指揮者を迎えるためのマスタークラスを数多く実施しています。これらの貴重な経験により、国際コンクールの入賞実績も数多く、卒業後はプロフェッショナルな指揮者として各地で活躍しています。

# 邦楽科 Traditional Japanese Music

三味線音楽(長唄、常磐津、清元)、箏曲(山田流、生田流)、尺八(都山流、琴古流)、能楽(観世流、宝生流)、能楽囃子、邦楽囃子、日本舞踊、雅楽の分野を有しています。国立大学法人における唯一の邦楽科として、各専攻の古典の研究に務め、それに伴った実技指導と演奏理論を教育するとともに、洋楽をはじめとした様々な音楽に対する知識と経験を深め、総合的な音楽能力・音楽理論を体系的に習得し、優秀な演奏家・教育者を育成することを目標としています。



撮影：永井文仁



撮影：永井文仁



藝大21(和楽の美)邦楽絵巻「義経記〜静と義経を巡って」

### 流派・ジャンルを越えて

邦楽科は、流派や分野を越えて、さらには洋楽や美術など他ジャンルとの交流ができる恵まれた環境を生かして、現代における邦楽の可能性を追求することができることに特徴があります。その象徴とも言うべき取り組みが、伝統音楽、洋楽、美術、舞踊などの専門家たちの自由な発想によって繰り上げられる創作舞台企画「和楽の美」です。多彩な交流の中で、学生も音楽に臨む姿勢や視野を広げています。

### 学部1・2・3・4年次

専攻により差はありますが、おおむね専攻実技の個人レッスンを中心に、副主専攻(主専攻と対になる実技)、副専攻(主専攻、副主専攻以外で専攻に必要な実技)等の各種邦楽を学び、総合的に邦楽実技を習得するカリキュラムが組まれています。また、演奏会形式の授業「総合実習」を通じてアンサンブルについての技術と知識を習得するほか、自身で作品を創作する「創作実技」といった授業を通して、幅広く能力を養い、加えて、邦楽科専用のソルフェージュ等の洋楽理論を学習し、邦楽を客観的に捉える視野を育みます。選択科目としている研究旅行は、奈良の古美術研究施設に宿泊し、邦楽に所縁の深い地へ赴いて古典音楽を学ぶ貴重な機会です。また、年間を通じて様々な演奏機会が設けられており、4年次の学内演奏会、卒業演奏会はその集大成の場となります。

### 学部カリキュラム

- 〈1〜3年次〉〔三味線〕主専攻、副主専攻(長唄・常磐津・清元)、副専攻(箏、小鼓、大鼓、太鼓)、三味線作曲法、創作実技、ソルフェージュ【長唄・常磐津・清元】主専攻、副主専攻(長唄三味線、常磐津三味線、清元三味線)、副専攻(箏、小鼓、大鼓、太鼓)、三味線作曲法、創作実技、ソルフェージュ【邦楽囃子】主専攻、副主専攻(箏、小鼓、大鼓、太鼓)、副専攻(長唄、長唄三味線)、現代邦楽囃子、歌舞伎下座太鼓、江戸祭囃子、邦楽囃子作調法、創作実技【日本舞踊】主専攻、副専攻(長唄、長唄三味線、箏、小鼓、大鼓、太鼓)、舞台関連実技、仕舞実技、狂言小舞【箏曲山田流】箏実技、唄実技、三絃実技、アンサンブル実技、山田流箏曲演奏論、箏歌歌唱法、ソルフェージュ【箏曲生田流】箏曲実技、三絃実技、歌唱、箏曲生田流演奏論、ソルフェージュ【尺八】主専攻(本曲、外曲)、副主専攻(箏曲実技、三絃実技)、他流派の尺八、ソルフェージュ【能楽】主専攻(謡、舞、舞楽)、舞楽合奏実技、歌舞実技、舞楽実技など
- 〈4年次〉〔全専攻〕主専攻、副主専攻、副専攻、学内演奏、卒業演奏など

### 大学院修士・博士

修士課程では高度な演奏技術の習得と、論文作成に必要な学術研究の基礎能力を高め、音楽研究に必要なスキルを身に付けることを目標としています。各演奏会の伴奏・助演を通じて、演奏家としての活動の礎を築くことも求められます。博士後期課程では、リサイクルを2回実施し、企画から運営・演奏を学生自身で行い、各自の研究テーマに沿った演奏会を催します。

### 学生数(2016年5月現在)

※左より(1年次)(2年次)(3年次)(4年次)(修士)(博士)  
〔長唄三味線〕1名/3名/3名/3名/2名/0名〔長唄・常磐津・清元〕2名/2名/2名/2名/1名/0名〔邦楽囃子〕3名/1名/1名/0名/1名/1名〔日本舞踊〕4名/4名/4名/1名/1名/1名〔箏曲(山田流)〕5名/1名/0名/4名/0名〔箏曲(生田流)〕5名/8名/3名/7名/6名/1名〔尺八〕1名/3名/1名/3名/3名/0名〔能楽〕4名/3名/0名/3名/0名/0名〔能楽囃子〕1名/0名/1名/1名/0名/0名〔雅楽〕0名/1名/2名/3名/0名/0名

教員 【長唄三味線】東音小島直文、東音瀬川晴代\*、東音塚原勝利\*  
 【長唄】東音見純、岸屋秀子\*  
 【清元】清元志寿子太夫\*  
 【常磐津】常磐津兼太夫\*  
 【箏曲山田流】萩岡松韻、鈴木厚一\*、山岸紀貞子\*、杉本龍代賢\*、伊藤ちひろ\*、久本桂子\*、武田博雄\*、都一中\*(一中節)  
 【箏曲生田流】深海さとみ、富山清琴\*、福永千恵子\*、吉澤昌江\*、上條紗子\*  
 平野裕子\*、池上典吾\*、吉村七重\*、福田恭子\*  
 【尺八琴古流】青木彰時\*  
 【尺八都山流】野村峰山\*、武田旺山\*  
 【能楽観世流】関根知孝、岡久廣\*、藤波重彦\*  
 【能楽宝生流】武田孝史、宝生和英\*、水上優\*  
 【能楽下掛宝生流】宝生欣哉\*

【能楽狂言】野村万蔵\*  
 【能楽囃子】一噌隆之\*、幸信吾\*、安福光雄\*、小寺真佐人\*  
 【清元】清元敬之、福原敬彦\*、西川浩平\*、望月庸子\*、藤舎円秀\*、福原百之助\*、吉聖香\*  
 【日本舞踊】花柳輔太郎、花柳奈卯女\*、五條珠実\*  
 【雅楽】上研司\*、多忠純\*、植原宏樹\*、小原完基\*、三浦元剛\*、八槻純子\*、高多祥司\*  
 \*…非常勤講師

http://www.geidai.ac.jp/department/music/traditional\_japanese\_music



http://www.geidai.ac.jp/department/music/conducting



## 楽理科

Musicology

音楽とはなにか——。この問いに、研究を通じて答えようとする試みが音楽学(楽理)です。ここでいう「音楽」には、いわゆる西洋クラシック音楽のみならず、あらゆる時代、世界のあらゆる場所で生み出され、行われたすべての音楽が含まれます。そうした音楽について、哲学的、歴史的、人類学的など様々なアプローチで探求を行い、議論を重ね、その成果を世界に発信することで、演奏や作曲と同様に音楽の未来に貢献することが音楽学の目指すところ。本学楽理科は、日本最初の音楽学専門の学科として設けられて以来、現在までこの学問を名実ともにリードしてきました。

## 学部1・2・3・4年次

音楽学部楽理科のカリキュラムは、4年間の学びを通じて、音楽学の基礎知識と応用力を身に付け、各自の問題設定に対して広い視野と鋭い批判精神を持って取り組むことのできる人材を育成するよう構成されています。1、2年次には、音楽学を学ぶ上で必要な基本的知識と技法(「音楽学概説」「初級演習」)のほか、音楽の基礎能力(「ソルフェージュ」)、専門書を読む言語力(外国語科目、「楽書講読」)を身に付けます。その後、学生は各自の興味に従って、特定領域(時代、地域、ジャンル等)をより詳細に探求するための「音楽学講義」や「音楽学演習」等の履修を経て、3、4年次には専任教員からの個人指導「音楽学実習」を受け、最終的に4年次に提出する卒業論文に各自の研究成果をまとめます。

対象も方法も多岐にわたる音楽学の全体像を理解するために、楽理科ではカリキュラム上、①音楽美学、②西洋音楽史、③音楽理論、④日本音楽史、⑤東洋音楽史、⑥音楽民族学の六分野を設定し、それに沿って専門科目を編成しています。しかし、これらの分野に縛られるのではなく、むしろ分野を越えて共通の問題を見出し、広い視野と自由な発想で音楽に向き合うことが、学生に強く期待されています。

## 学部カリキュラム

〈1年次〉【必修科目】音楽学概説、楽書講読、初級演習、ソルフェージュ  
【選択科目】和声、音楽学専門基礎科目(声楽史、管弦楽史、楽器学、ジャズ・ポピュラー音楽、対位法)、副科実技など  
〈2年次〉【必修科目】音楽学概説、初級演習、音楽学講義、ソルフェージュ  
【選択科目】和声、音楽学専門基礎科目、楽書講読、副科実技など  
〈3年次〉【必修科目】音楽学実習、音楽学講義、音楽学演習  
【選択科目】音楽学専門基礎科目、研究旅行、楽書講読、副科実技など  
〈4年次〉【必修科目】音楽学実習、卒業論文、音楽学講義、音楽学演習  
【選択科目】音楽学専門基礎科目、楽書講読、副科実技など

## 学生数(2016年5月現在)

〈1年次〉23名 〈2年次〉24名 〈3年次〉23名 〈4年次〉25名

教員 植村 幸生(音楽民族学・東洋音楽史)、大角 欣矢(西洋音楽史)、塚原 康子(日本音楽史)、土田 英三郎(西洋音楽史)、西間木 真(西洋音楽史)、福中 冬子(西洋音楽史・音楽美学)



<http://www.geidai.ac.jp/labs/musicology/>



## 実践に根差した音楽研究

一般大学と違う本学楽理科の特徴は、音楽の実践に根差した音楽研究を重視している点にあります。副科実技はもちろんのこと、楽理科が独自に「西洋古楽」「シタール」「ガムラン」「中国琵琶」の実習授業を開講しています。これらの実技科目履修を通じて、実際の音の響き、音のシステムを身体で理解し、それを的確に研究に反映させることのできる学生を育成しています。各学年の枠を越えて学生が学び合い議論することは楽理科のよい伝統です。学部3、4年次の学生と大学院生の合同授業「総合ゼミナール」は、卒論・修論の中間発表、博士課程学生の研究報告、国内外ゲストによる講演、学生の自主企画など多彩な内容を持ち、学生間の積極的な交流を促しています。楽理科の卒業生は、音楽に関する専門的な識見はもとより、芸術、文化、社会一般に対する鋭敏な分析力や優れた語学力などを生かして、学術・教育界や楽壇のみならず国内外の一般企業や官公庁にも活躍の場を広げています。楽理科として学生の就職活動を支援し、社会に出た先輩とのつながりを維持するために、卒業生の協力を得て特別講座「音大生のための就職入門講座」を開催したり就職情報を学生に提供するなどの取り組みを行っています。

## 音楽環境創造科

Musical Creativity and the Environment

現代社会では、領域を越えた感性、知識、表現技術を活用できる人材が求められています。音楽環境創造科では、テクノロジーや社会環境の変化に柔軟に対応し、領域横断的な発想を具現化できる能力を養うべく、理論と実践の両面から教育研究に取り組んでいます。具体的には、「音楽や音響に関する創作と研究」、「映像、身体、言語、空間、メディアなど、音楽に隣接する表現分野の研究」、「音楽社会学やアートマネジメント、文化研究」など、芸術と社会の関係に関する研究を通じて、芸術やそれを取り巻く環境を総合的に学習することを基本としています。

この学科を卒業した学生は、新しい芸術創造や芸術運営の現場はもとより、様々なメディアや企業、研究・教育機関、行政、NPOなど広く社会全般で活躍することが期待されます。

- 1 録音調整室
- 2 スタジオでの録音風景



## 学部カリキュラム

〈1年次〉【必修科目】スタディ・スキル、音楽文化史、音楽基礎演習、音楽環境創造概説  
【選択科目】特殊講義・演習、副科実技など  
〈2年次〉【必修科目】プロジェクト、音楽文化史、音楽基礎演習、音楽環境創造概説  
【選択科目】特殊講義・演習、副科実技など  
〈3年次〉【必修科目】プロジェクト  
【選択科目】特殊講義・演習、副科実技など  
〈4年次〉【必修科目】卒業制作・研究  
【選択科目】特殊講義・演習、副科実技など

## 学部1・2・3・4年次

カリキュラムの中核となるのは「プロジェクト」と呼ばれる実践授業です。1年次には「スタディ・スキル」で学業の基礎となる知識や考え方を全般的に学び、2～3年次にはプロジェクトへと接続されます。学生は、各教員が開設するプロジェクトのいずれかを選択し、専門的な能力を磨いていきます。プロジェクトでは、様々な授業で学んだ知識と技術を柔軟に組み合わせ、制作やグループワークを通じて理論と実践の両方を学びます。

音楽基礎演習や音楽文化史など音楽の基礎を学ぶ科目に加え、録音や音響、音響心理、舞台芸術、映像やメディア芸術論、文化研究、芸術運営論など多彩な科目が開設されています。また、他学科や学外との連携も盛んに行われています。

プロジェクトや他の科目を通して培われた実践と研究の成果は、年1回開催される学外向けのアートバスと学内向けの研究発表会において発表します。学生にとって、自分自身が力を注いだ作品や研究報告を客観的に評価してもらうまたとない機会となっています。そして4年次には、それまでの研究の集大成として卒業作品・論文を作成し、卒業展にて発表を行います。

## 学生数(2016年5月現在)

〈1年次〉20名 〈2年次〉21名 〈3年次〉21名 〈4年次〉27名

教員 西岡 龍彦(作曲)、亀川 徹(音響・録音技術)、丸井 淳史(音響心理学・コンピュータ工学)、熊倉 純子(文化環境・アートマネジメント)、市村 作知雄(身体表現・NPO論)、毛利 嘉孝(社会学・文化研究)



<http://mce.geidai.ac.jp/>

**プロジェクト1** (担当:西岡 龍彦) 音楽・音響作品の創作を行います。新しいテクノロジーを用いた表現や、西洋音楽、邦楽、民族音楽、ジャズ・ポップスを研究することで、これまでになかった音楽や音響の新たな可能性を追求しています。大学院映像研究科、美術学部や学科内の他のプロジェクトとのコラボレーション、学外の公共機関や企業との共同研究や受託研究の中で、様々な音楽制作を行っています。

**プロジェクト2** (担当:熊倉 純子) アートマネジメントや文化環境の研究、複合的メディア表現を扱うプロジェクトです。特に、芸術表現を通じた地域社会へのアプローチを実践的に模索しています。マネジメントを担当する学生は、共同で企画を立ち上げ、場を作ることを学びます。表現活動を志す学生は、作品制作を通して社会に新たな表現の場の提示を行っていきます。

**プロジェクト3** (担当:亀川 徹) 音楽や音を主体とする録音制作や音響に関する研究に取り組み、千住キャンパスのスタジオシステムの概要を理解した上で、録音制作、編集作業などの実習を行います。またオーディオドラマやアニメーションなど

の映像作品のサウンドデザインや、第7ホールの舞台音響などにも取り組んでいます。

**プロジェクト4** (担当:市村 作知雄) 演劇およびダンスの実践。一語一語のこぼれ、一つひとつの動きを丁寧に積み重ねることから作品の創作を目指します。

**プロジェクト5** (担当:毛利 嘉孝) 表現の全領域に拡大しつつあるデジタル化によって音楽や美術、映像の表現はどのように変化しつつあるのでしょうか。特にポピュラー音楽研究とメディア芸術や文化の理論研究と実践を通じてメディアと文化の未来を考えます。

**プロジェクト6** (担当:丸井 淳史) 音をどのように聞き、感じ、表現するのかについて、音響心理実験を通じて明らかにしていきます。実験研究は音楽文化には関係ないようにも思えますが、音の聴き方を理解することは、音楽作品の制作・分析・演奏に直接的にも間接的にも役立つものです。研究に必要な音の解析や実験データの統計分析のために、数学やコンピュータ技術を道具として使います。



# 音楽文化学専攻 音楽学

Musicology

音楽研究科音楽文化学専攻音楽学領域は、大学教員等の専門的な研究者をはじめ、音楽に関する高度で専門的な知識を生かした職業に就く者の養成を行っています。本領域は、その歴史、規模、実績において、日本の音楽学を牽引する最大の拠点と言えます、今後もその役割を着実に果たしてまいります。本領域は音楽学の多様な方法に応じて、三講座制(第一講座：音楽民族学および音楽美学、第二講座：西洋音楽史、第三講座：日本・東洋音楽史)が敷かれ、学生はいずれかの講座に所属しますが、昨今の音楽学の領域横断的な展開に対応すべく、学生には自身の所属講座以外のゼミ等にも積極的に参加し、柔軟かつ多角的な観点をもって各自の研究を進めることが期待されています。

## 大学院 修士・博士

音楽学領域の修士課程は、学生が学士課程で習得した知識や能力、経験を基に、より専門に深化した研究を行うよう構成されています。各学生は、学期ごとに設定されたトピックにゼミナール形式で取り組む「音楽学演習(院)」 「音楽学特殊研究」の履修を通じて、音楽学の最新の問題や研究動向を把握し、調査、発表、討論を繰り返すことで、自らの研究に必要な様々なスキルの上達や知識の深化を目指します。同時に2年次に提出する修士論文執筆に向け、指導教員による個人指導「音楽学実習(院)」を受講しながら現地調査や資料収集などを行います。博士後期課程は、修士課程の成果を踏まえ、自立した研究者として必要な着実な方法と該博な知識、そして独創的な発想を博士論文に結実させるべく研究に取り組むプログラムです。「音楽学演習(院)」 「音楽学特殊研究」の履修のほか、学会誌等への投稿や口頭発表などの実績も単位として認定されるので、研究活動の成果をたえず学問の現場に投げかけ、その文脈に位置づけることが学生には求められます。例年、本領域に所属する大学院生の2割程度を本学楽理科以外の出身者および外国人留学生が占めています。一方多くの大学院生が短期・長期の海外留学に出ており、自らの研究の水準を高めるだけでなく文化交流にも貢献しています。

# 音楽文化学専攻 音楽教育

Music Education

音楽教育研究分野では、音楽と人間の多様なかかわりを「教育的視点」から理論的・実践的に追究しています。学生の研究対象は、学校の音楽教育にとどまらず、音楽の専門教育、幼児の音楽教育、障がい児の音楽教育、社会教育・生涯教育としての音楽教育など、多岐にわたっています。これまでの修了生の多くが、教員養成系の大学や音楽大学等で、音楽教育担当の教員として活躍しています。

## 大学院 修士・博士

修士課程では、研究室全体のゼミで音楽教育研究の方法と分野についての基本的な知識や技能を身に付けるとともに、各自のテーマに基づいて研究を遂行します。研究論文の作成に加えて、専門実技(作曲、演奏)の研鑽が課せられている点(音楽の専門性を生かした音楽教育研究)、授業研究等を通して様々な教育実践現場と連携しながら教育研究活動を推進している点(教授・学習の実際根差した音楽教育研究)などが、大きな特色です。博士後期課程では、修士課程での研究を深化・発展させながら、各自のテーマに基づいて研究を遂行します。その過程では、論文の投稿や学会での口頭発表を行うことが求められます。学生一人一人の研究については、複数の教員と学生が常に密接にかかわりながら、その方向や内容を決めるような指導体制が確立されています。さらに、課程修了後の進路を視野に入れて、音楽の教育研究を指導する際に必要となる専門的知識や技能を身に付けていきます。



学生数(2016年5月現在) <修士>21名 <博士>24名  
教員 橋村 幸生(音楽民族学・東洋音楽史)、大角 欣矢(西洋音楽史)、塚原 康子(日本音楽史)、土田 英三郎(西洋音楽史)、西間木 真(西洋音楽史)、福中 冬子(西洋音楽史・音楽美学)



http://www.geidai.ac.jp/labs/musicology/



1



2

- 1 研究室全体のゼミ
- 2 教育実践現場での演奏(足立区立おおやた子ども園)

学生数(2016年5月現在) <修士>6名 <博士>4名  
教員 佐野 靖(音楽教育学)、山下 薫子(音楽教育学)、塚原 康子\*1(音楽学)、照屋 正樹\*1(ソルフェージュ)、杉本 和寛\*1(日本文学)、今川 恭子\*2(幼児教育)、横地 早和子\*2(教育心理学・認知心理学)、石上 則子\*2(音楽科教育学)、新藤 浩伸\*2(生涯学習)、岡田 猛\*2(認知心理学)

\*1…兼任 \*2…非常勤講師



http://www.geidai.ac.jp/labs/ongakukyoku/

# 音楽文化学専攻 ソルフェージュ

Solfège

音楽の基礎能力とは、楽譜から多くの情報を素早く読み取り、表現する能力です。学部のソルフェージュ講座では、演奏、創作、研究活動、すべての分野に共通して必要な、音楽家として活躍するにふさわしい、基礎能力の育成を目標に掲げています。大学院のソルフェージュ研究分野では、深い音楽的教養全般を習得したソルフェージュ教育者や研究者、またこれらの資質を備えた音楽家を育成するため、広く様々な出自を持つ学生を受け入れています。



## 学部

ソルフェージュは1年ないし2年間、ほとんど全科の学生に必修科目として設定されています。新入生は少なくとも半年間、「基礎」のクラスで、音程、リズム、和声、フレーズに対する感覚、アンサンブルにおける即応性等を養う基礎能力の向上訓練を行います。具体的には、聴音、各種音部譜表による読譜、視唱、リズム打ち、理論等が主要学習項目です。またこの5種は学期末ごとに実施される「基礎修了試験」の5項目でもあり、一定以上の成績を修めた学生は、より専門に密着した「展開」クラスでの学習へと進みます。「展開」は、「応用」、「器楽」、「声楽」、「ピアノ伴奏」の4クラスが開講されています。その他、自由選択科目として、「古楽」、「現代音楽」、「即興演奏」の3クラスが開講されており、共に他に類のない開講科目です。また、関連科目として、「スコアリーディング」が開講されています。本講座では、楽譜の全体像を的確に理解し、表現するための音楽的な基礎訓練を目指した授業を展開しています。

## 大学院 修士・博士

修士課程ではソルフェージュに関わるすべての課題に対し、柔軟な思考力と深い洞察力に基づき、理論と実践の両者を本義としつつ、主体的に行動できる人材の育成を目的としています。学生たちの研究目的や将来の活動目的は様々で、これまでに本学、および本学附属音楽高等学校をはじめとする教員、国内外のピアノ演奏者、オペラのコレパティートル等多岐にわたる活動分野に、優秀な人材を多数送りだしています。博士後期課程では、十分な音楽的資質を備え、柔軟な知性、論理的な思考力、言語能力等の総合的な視野を持つ専門家、研究者として、ソルフェージュとソルフェージュ教育を支える知的基盤を有していることが研究を行う条件となるでしょう。本専攻では、広い視野から総合的な教育活動、研究活動に従事しうる適正を持ち、かつ創造性に富む高度な研究能力と学識を身に付けた専門家、研究者として広く社会で活躍できるよう、適切な研究プログラムの提供、および論文作成指導を行なっています。

学生数(2016年5月現在) <修士>5名 <博士>2名  
教員 照屋 正樹(作曲)、テシュネ ローラン(チェンバロ)、佐野 靖(音楽教育)\*1、青嶋 広志\*2、市川景之\*2、大橋 浩子\*2、大矢 素子\*2、岡嶋 礼\*2、甲斐 史子\*2、金丸 めぐみ\*2、神本 真理子\*2、川島 余理\*2、栗形 亜樹子\*2、稲垣 富美子\*2、山岡 智\*2、渋谷 由香\*2、清水 敬一\*2、高橋 和江\*2、時松 綾\*2、日野原 秀彦\*2、見崎 清水\*2、平野 公崇\*2、藤井 一興\*2、藤田 朗子\*2、三ツ石 潤司\*2、茂木 真理子\*2、安田 結衣子\*2、山口 博史\*2

\*1…兼任 \*2…非常勤講師



http://www.geidai.ac.jp/department/g\_s\_music/independent\_course#2

# 音楽文化学専攻 応用音楽学

Applied Musicology

オーケストラやオペラ団体のマネジメント、音楽療法、芸術による地域振興など、人の心に音楽を届け、音楽で人と人を結びつけるために何ができるかを考察し、実践する力をもった人材を育成してきました。開設以来16年を経た現在、すでに多くの修了生が、全国の大学でアートマネジメントや音楽療法の専任教員として研究教育にあたっています。また、公立私立の音楽ホールやマスコミなど、文化関連組織で活躍する者も数多くいます。



幼稚園・保育園での演奏活動

## 大学院 修士・博士

修士課程では、開設されている専門講義や他分野のゼミなどで研究領域の知識を深めることと並行して、音楽ホールなどでのインターンシップや学内外での音楽療法のセッション実施といった実践活動を行いながら、音楽と社会の関係を現場から学ぶことを重視しています。修士論文も、その多くが実社会における応用実践を課題としたものとなっています。一方、博士後期課程では、それぞれの研究領域をさらに深化させ、関連学会での発表や論文投稿を経ながら、学術的価値の高い博士論文の作成を目指しています。それゆえ、博士の学位取得者には、北海道教育大学、昭和音楽大学、東京音楽大学、国立音楽大学、武庫川女子大学、早稲田大学などで、専任の教授、准教授、講師、助手などに就いている者が多くいます。

学生数(2016年5月現在) <修士>4名 <博士>2名

教員 畑 剛一郎(音楽文化学、音楽療法)、枝川 明敬(文化政策、アートマネジメント)、依田 俊伸\*(芸術経済学)、桑野 雄一郎\*(音楽著作権)、石田 麻子\*(舞台芸術マネジメント)、伊志嶺 絵里子\*(芸術文化環境論)、阪上 正巳\*(精神医学)、藤山 真美子\*(音楽療法)、山下 久美子\*(音楽療法)、今野 貴子\*(音楽療法)、菊地 由記子\*(音楽療法演奏法)

\*…非常勤講師



http://www.geidai.ac.jp/labs/gcam/

## 音楽文化学専攻 音楽文芸

Literature in Music

音楽にかかわり、かつ音楽を生み出す言語表現を研究対象とし、音と言葉の関係性について研究することを目的とする専攻です。具体的には、オペラ・歌曲・ミュージカル・謡曲・歌舞伎・浄瑠璃・童謡・唱歌等における、音楽と言葉とのかかわりやその背景についての研究、あるいは文学テキストと音楽作品とのかかわりについての研究を行います。修了した学生は、博士の学位を取得するなどして研究者の道に進む者、音楽や舞台芸術に関わる企業に就職する者など、広く社会で活躍しています。

## 大学院 修士・博士

本専攻では、既存の学問領域の枠組みにとらわれない、学際的なアプローチを目指しています。歌詞・戯曲の内部構造の分析を行うことや、注釈的読解の方法論習得を通じて、作品の内在的研究を深めるとともに、音楽と結びついた言語の表現効果や、テキスト・演出の比較研究、さらにはテキストの周辺領域をも視野に入れ、作品を文化的・社会的位相の中で立体的に捉えます。

そのために、言葉と音楽からなる音楽文化に強い関心をもつ学生を歓迎します。その前提として、テキストを読み解く言語能力に優れていることと、研究の基盤となる、音楽史をはじめとする歴史に関する知識があることが必須の条件となります。したがって、具体的な研究計画をたてた上で、その研究に関する基礎知識を確実なものとし、文章力・思考力を高める努力が日ごろから求められています。

専任教員のそれぞれは、各国語によるテキスト研究を専門としていますが、より効果的な指導を行うために、理論系・実技系を問わず、音楽を専門とする他専攻の教員との緊密な連携が図られています。これは本学ならではの特色と言えるでしょう。

## 音楽文化学専攻 音楽音響創造

Creativity of Music and Sound

本専攻では、母体となる音楽学部「音楽環境創造科」で掲げる「21世紀の新たな芸術と、それにふさわしい環境の発展、創造に資する人材育成」という教育理念を引き継ぎ、音楽、音響関係の分野において、より専門的な知識、技能の習得を行い、トーンマイスターと呼ばれる録音制作ディレクター・エンジニア、作曲家、プロデューサー、研究者など、高度な専門職業人の養成に重点を置きます。

## 大学院 修士・博士

指導教員の下で、学生が主体的に研究および創作を行います。音楽と音響に関わる知識や技術を身に付けた上で、それらを横断する様々な作品制作（映像・舞台・身体表現やメディアに関わる音楽音響作品）、新しい録音技法によるサウンド制作、音の知覚と表現との関係についての実験研究など、先進的な研究テーマに取り組んでいます。音楽と音響を対象として様々なアプローチからの研究を通して、音楽文化の発展に寄与します。

所属する研究室によって成果の形は異なりますが、国内外のコンクールや発表会での公演、シンポジウムや学術会議などで、研究成果の発表を行っています。修士課程・博士後期課程ともに、学位論文の提出・審査を経て修了となります。



撮影：永井文仁

学生数 (2016年5月現在)  
〈修士〉4名 〈博士〉4名

教員 橋山 哲彦 (ドイツ文学)、  
畑 瞬一郎 (イタリア文学)、  
杉本 和寛 (日本文学)、  
大森 晋輔 (フランス文学)、  
佐美 真理 (イギリス文学)

<http://ongakubungei.geidai.ac.jp/>



学生数 (2016年5月現在)  
〈修士〉16名 〈博士〉11名

教員 西岡 龍彦 (作曲)、  
亀川 徹 (音響・録音技術)、  
丸井 淳史 (音響心理学・コンピュータ理工学)

<http://mce.geidai.ac.jp/grad-school/musicandsound/>



## 音楽文化学専攻 芸術環境創造

Creativity of Arts and the Environment

本専攻では、音楽、舞台芸術、映像、メディア表現など、様々な芸術表現の研究およびそれらと社会との結びつきを多角的に研究します。学部「音楽環境創造科」の理念を引き継ぎ、21世紀の新たな芸術と、それにふさわしい環境の発展と創造に資する人材育成のために、幅広い芸術表現とそれを取り巻く社会環境や文化全般について、より専門的な知識と技能の習得を行います。研究は文化事業の企画運営、様々な文化的事象の調査研究、表現作品の制作など、実践を取り入れた多様な形式で取り組まれます。

※ 芸術環境創造研究分野は、国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻に統合されました。

## 大学院 修士・博士

文化政策やアートマネジメントの実践的研究、劇場やフェスティバルなどのプログラミングや演劇論、振付論の研究、文化芸術全般の運営やそれを取り巻く文化環境に関する実践的研究、文化理論研究、メディア芸術理論および調査研究、ポピュラー文化研究、そして芸術文化と社会の関係を参与観察しながら考察する実践的研究などを行います。

学生数 (2016年5月現在)  
〈修士〉12名 〈博士〉9名  
教員 熊倉 純子 (文化環境・アートマネジメント)、  
市村 作知雄 (身体表現・NPO論)、  
毛利 嘉幸 (社会学・文化研究)

<http://mce.geidai.ac.jp/grad-school/artsandenvironment/>



## 別科

Practical Music Course

音楽の専攻実技を教授する2年制のコースです。

専攻実技には声楽、器楽(ピアノ・オルガン・弦楽器・管打楽器・古楽)、邦楽(三味線音楽・邦楽囃子・箏曲・尺八・能楽・能楽囃子)があり、個人指導による授業が行われます。ただし、単位の認定および教員免許等の資格は得られません。

修了者には「修了証書」を授与します。

## 附属音楽高等学校

The Music High School

音楽の早期専門教育を目的とする、日本で唯一の国立の音楽高校として、1954年に設立されました。学年定員40名の個性的な生徒たちが、未来の音楽家を目指して学んでいます。毎年実施している公開実技試験や演奏修学旅行、定期演奏会のほか、近年はバリのユネスコ本部での演奏、中国の中央音楽学院・上海音楽学院との交流演奏会といった国際交流事業にも積極的に取り組んでいます。また、大学に隣接する立地を生かして、専攻実技だけでなく、ソルフェージュ、音楽理論、オーケストラ、室内楽の教育でも緊密な高大連携を推進しています。

平成28年度～平成32年度の5年間は、文部科学省のスーパーグローバルハイスクール指定を受けて、グローバルリーダーの育成のために、独自な取り組みのさらなるレベルアップと一層の発信力強化を進めます。



<http://geiko.geidai.ac.jp/>



# FILM AND MEDIA

## | 大学院映像研究科 |

大学院映像研究科は、2005年（平成17年）に映像研究の拠点として設立された、修士課程および博士後期課程を有する研究科です。修士課程は「映画専攻」「メディア映像専攻」「アニメーション専攻」と3つの専攻があり、博士後期課程は「映像メディア学」として広い見地から理論と実践に基づく研究を行っています。

映像研究科は映像表現やその在り方を、実制作を通じて革新し続けることを目指しています。例えば「新時代の映像革命」といわれるデジタルシネマ。撮影、編集、サウンドデザイン、そして配給までもがデジタルシネマ方式で行われる時に、これまでの映画制作のワークフローや制作者に求められる専門性はどうか変わるのか。一方、今やクールジャパンの代名詞となった日本のアニメーション。これまで産業界で培われてきたアニメーションの制作技術や表現を、学問の場で次世代の教育に生かすにはどうしたらいいのか。更には、高度に進化するメディア技術や映像の叡智を、医療などの異なる分野や、地域間のコミュニケーションに使うとどうなるのか。映像研究科では、このような課題についての研究が実践的に行われており、その活動は国際的にも高く評価されています。インターネットの発達で、本質的にグローバルである映像の特性はますます強まっています。その中で映像研究科の教育プログラムでは、海外の大学との連携による実践的な共同制作を行っています。また国際コンクール等へ積極的に参加し、多くの入賞を果たしています。その他、交換留学や海外からの講師招聘などグローバルな映像制作者を育てるための教育が積極的に実践され、成果を生んでいます。

映像表現はメディア技術の発展とともに、今まさにダイナミックに変化しています。デジタル化の潮流の中で映像を取り巻く環境は急激に変化しており、制作ワークフローに大きな変革をもたらすと同時に、映像の在り方にも新しい展開が生じています。19世紀末に生まれた映像が、既に20世紀には「映像の時代」とまで言われ、そして現在の21世紀にはどのように進化していくのか…。我々はまさにダイナミックな潮流の中に身を置いています。大学院映像研究科のメンバーには、世界の中の「映像拠点」にいるものとして、そのパイロット的な役割を果たしていくことが期待されています。

大学院映像研究科長 桐山 孝司

### | 大学院映像研究科 アドミッションポリシー |

大学院映像研究科は、映像に関する学術的な理論および実践を教授研究し、自立して研究活動と創作活動を行うに必要とされる独創性と同時代性を備えた芸術家と教育研究者を養成することを目的としています。この理念を踏まえ、本研究科では真摯な態度で制作や研究に励むことのできる学生を求めています。



## 映画専攻

### Film Production

国際的に流通しうる物語性を持った映像作品を創造する作家、高度な専門知識と芸術的感性を併せ持つ映画技術者を育成することを目標としています。専攻内は監督、脚本、プロデュース、撮影照明、美術、サウンドデザイン、編集の7領域に分かれています。この区分は商業映画の職能区分とほぼ同じで、プロと同様の映画制作工程を自然に学習できるようになっています。

#### 大学院 修士

カリキュラムの軸となるものは作品制作です。物語性を持った映画を主に、短編から長編まで年間数本の作品を実習として制作します。その制作費用は作品規模に応じて実習費として用意されます。1年次は、実習を通して映画ならではのチームワークを理解すると同時に個人個人の技能を高めます。一般公開作品の製作を目指す「プロデュース企画」では、プロデュース領域の学生を中心に1年次から企画を練り上げ、2年次の前半に撮影に入ります。2年次の後半になると「修了制作」に集中します。それまでに身に付けた知識や技能を最大限に発揮し、国際映画祭への出品も視野に入れた水準の作品を目指します。学生は作品制作に向けて、領域別にゼミナール形式で専門的指導を受けます。また、自らの領域の学習だけでなく、他領域の基礎知識を学ぶ授業も用意されているので、映画についての総合的な知識を深め、感性を高めることができます。

教員 【監督領域】黒沢 清、齋藤 敦彦  
【脚本領域】坂元 裕二  
【プロデュース領域】梶井 省志  
【撮影照明領域】柳島 克己  
【美術領域】磯見 俊裕  
【サウンドデザイン領域】長尾 寛幸  
【編集領域】筒井 武文  
馬場 一幸



<http://film.fm.geidai.ac.jp>



#### 監督領域

専門家集団の共同作業である映画制作の中で、映画監督は作品に対して決定的な影響力を持ちます。監督領域の学生は、授業やゼミで映画に対する理解を深め、実習作品では現場での判断力を研鑽し、自分ひとりだけでは作ることができない映画作品に自己の作家性をどう反映させるかという感覚を身に付けていきます。

学生数 (2016年5月現在) 〈修士〉8名

#### 脚本領域

脚本は文字によって書かれる映画の設計図であり、脚本家は映画制作における第一走者でもあります。孤独なランナーとしての覚悟が必要です。ゼミでは課題、実習制作の脚本の執筆と同時に、オリジナルの企画を作り脚本にしていくまでを学びます。その過程で、他領域の仲間と意見を交わし合い、映画作りという共同作業も身に付けていきます。修了制作の脚本は「脚本集」として書籍化され、外部に届けることができます。

学生数 (2016年5月現在) 〈修士〉11名

#### プロデュース領域

映画プロデューサーの責任は重大で仕事は多岐にわたります。実習制作ではプロデューサーとして各種の交渉から制作費の管理までをこなします。どのようなことに、どのくらいの時間、人手、予算が必要になるのかを実体験として知ることができます。とりわけ例年、2年次の前期に撮影される「プロデュース企画」では、企画開発から作品公開に至るまで中心的役割をはたします。

学生数 (2016年5月現在) 〈修士〉8名

#### 撮影照明領域

撮影と照明は映画の映像を全面的に支える領域です。その重責を担うために、必要な知識と技能を身に付けるとともに映像の審美眼を養います。専門性の高い撮影機材や照明機材の運用には複数人の連携が不可欠です。実習では個人個人の技術力もさることながら、撮影・照明特有のチームワークとコミュニケーションを習得します。

学生数 (2016年5月現在) 〈修士〉10名



#### 美術領域

映画に登場する家具、衣装、小道具といったものについては、時代や場所の状況が不自然でないだけでなく、その作品の雰囲気にもふさわしいものを用意する必要があります。そのためには非常に幅広い知識と感性が要求されます。美術領域ではゼミと実習を通じて、単なるテクニックには留まらない物の有り様による演出的工夫や見識を学びます。

学生数 (2016年5月現在) 〈修士〉8名

#### サウンドデザイン領域

実習制作においては、撮影現場での録音からスタジオでの整音作業に至るまでに必要な音響技術を習得し、映像業界の音響プロフェッショナル、サウンド・アーティスト、映像音楽家などになるための具体的なスキルを学び、講義においては、「サウンドデザイン」という観点から映像表現についての知識を深め、「自分にとってのサウンドデザイン観」を構築します。

学生数 (2016年5月現在) 〈修士〉14名



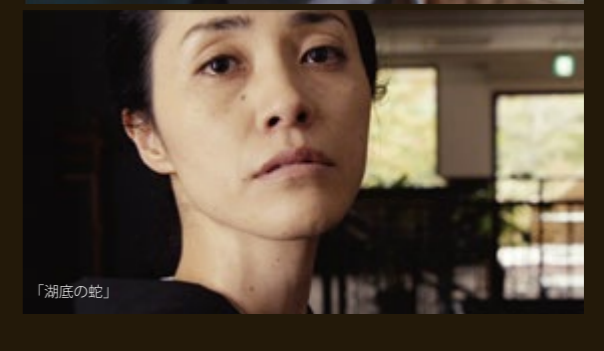
「魔法」



「結タクシー野郎 昇天御免」



「ブンデスリーガ」



「湖底の蛇」

#### 編集領域

時間を取り扱う芸術である映画にとって、編集は本質に関わる極めて重要な工程です。編集領域では、ゼミでは映画表現技法の専門的理解を深め、実習制作ではポスト・プロダクション作業全般を通じて、作業手順や機材の操作方法を習得することだけでなく、映画を形作る様々な要素を芸術的に統合するための感性を養います。

学生数 (2016年5月現在) 〈修士〉8名

#### 共同作業としての映画制作

共同作業としての映画制作では、関係者全員が自らの役割について理解しながら専門性を発揮しなければなりません。各学生は必修の講義科目と演習科目で映画制作に必要とされる知識と技術を共有すると同時に、映画の制作過程全体を経験します。作品制作に使用する施設・機材・備品はプロが使用しているものと同等クラスのもので、講師陣には第一線で活躍する専門知識を持った多種多様なプロが揃っています。

## メディア映像専攻

New Media

メディア映像専攻は、メディアという概念や技術を通じて人間が行う様々な表現行為を根源的に問い直すことによって、映像表現、メディア表現、パフォーマンスアートなど、異なる領域での新しいイメージ創造の地平を切り開くことに挑戦しています。従来の芸術が向き合ってきた社会的かつ同時代的な諸問題に対して多様な側面から教育研究においてアプローチし、新しい技術を用いた展示やプレゼンテーションの提案をしながら、多様な分野で表現者として創造的な活動を行うことのできる人材の育成を目指しています。

## 大学院 修士

学部で修得した専門分野とは関係なく、1年次前期では入学者全員がメディア映像専攻の修士課程を修了するために必要とされる、映像技術やデバイス技術、身体表現やコミュニケーションに関する表現技法あるいはそれらの高度化に向けた方法論を専門的かつ集中的に修得します。1年次後期からは各研究室に分かれて、個人が目指す表現についての先行事例調査や開発研究を担当教員の指導の下に深化させていきます。

メディア映像専攻の各研究室ではフランス、カナダ、台湾、コロンビアなど国際的な教育研究プロジェクトをはじめ、横浜美術館や神奈川芸術劇場との連携事業、放送局や出版社あるいはデベロッパーとの共同事業、精神衛生保険施設やNPOとの連携による地域連携プロジェクトなどが進行しており、メディア表現を用いた多様な教育研究活動を通して、専攻の教育研究が社会に開かれる可能性を探究しています。そうした教育研究の成果は、横浜市との共同事業として企画・運営されているOPEN STUDIOやMedia Practideで展示・公開されています。

学生数(2016年5月現在) 〈修士〉24名

教員 桂英史、桐山孝司、佐藤雅彦、高山明、畠山直哉、木村 稔

## 映像芸術をめぐる先駆的表現者を目指して

メディア映像専攻は従来のメディアやジャンルにはない先鋭な芸術表現やプロジェクト実践を探索する場です。芸術系やデザイン系の学部で映像メディアを用いた表現を修得した方はもとより、音楽や身体表現などの専門分野をもち、メディアを用いて、より多様な芸術表現を目指そうとする方々も歓迎しています。また、情報学や工学の分野でユニークな開発やプロジェクト実践の経験と知見をもち、さらに自らの表現の幅を広げたい人々にも広く門戸を開放しています。

メディア映像専攻では以下のような専門家を想定しています。

- 柔軟に分野を横断しながら活躍することのできる、映像メディアやデジタルデバイスを駆使する先駆的なアーティスト
- マスメディアに特化したデザインやコンテンツを柔軟に企画し実現することのできるクリエイター
- 芸術表現を深化させることのできるフィールドエンジニア
- 芸術の諸分野はもとより、人文科学、社会科学、理工学などの融合による従来の領域にとらわれない新たな研究分野や方法論を創出できる研究者・アーキヴィスト
- 複製技術を用いた文化の資源を、同時代的あるいは歴史的に評価し管理できる社会構想家

<http://www.fm.geidai.ac.jp/>



1



2

- 1 OPEN STUDIO (修士1年特別演習成果発表) 展示風景
- 2 Media Practice (修士課程修了制作展) 展示風景
- 3・4 修士1年特別演習制作風景



3



4

## アニメーション専攻

Animation

昨今の映像メディアの急激な進展に伴い「アニメーション」の表現領域は大きく広がり、そのイメージは多様化しています。こうした中、アニメーション表現を歴史的な文化背景の中で捉え、立体的な奥行きのある世界として捉え直すクリティカルな視点が、作り手の側にも求められています。アニメーション専攻では、拡張するアニメーションの宇宙を再構築し、我が国におけるアニメーション表現の独自性を国際的な視野から評価し、その自立的発展を実現しうる創造性豊かな人材育成を目指しています。

## 大学院 修士

多様なバックグラウンドを持つ学生たちに対して、1年次前期にまず様々なアニメーション技法や企画開発手法、研究手法などを学ぶ集中演習が設けられ、アニメーションに対する総合的な理解を深めます。その上で、1年次の夏から個別の作品制作や研究プロジェクトに取り組みます。その際、音楽・音響面については音楽環境創造科とのコラボレーションによって進められ、ポストプロダクションに至る一連の工程を実践的に学びます。その後、2年次は修了制作(または論文等)に1年がかりで取り組みます。ゼミや講評会の場で様々な助言を受けながら、長期にわたる制作期間を経て、最終的な作品の仕上げ作業は、学外のスタジオを使って最高の品質で完成させることができます。また、国際的なアニメーション分野のネットワークを生かし、年間を通じて海外の作家や研究者のゲストを多数招聘して、講義やワークショップを実施しています。中国伝媒大学や韓国芸術総合学校と連携して行う国際共同制作プロジェクトや、南カリフォルニア大学等との連携による研究プロジェクトなど、国際的に活躍しうる人材育成を目指した実践的教育が積極的に行われています。

学生数(2016年5月現在) 〈修士〉38名

教員 伊藤有香(立体アニメーション)、岡本美津子(企画制作)、山村浩二(平面アニメーション)、布山タルト(研究・理論)、村上 寛光



1



2

- 1 アニメーションデスクによる作画
- 2 パベットアニメーション制作
- 3 外部ポストプロダクションスタジオでのMA作業
- 4 立体アニメーション表現演習の授業風景



3



4

## 高度な表現能力を持った革新的創造者の養成

自己の作品の質への理解、文化的・産業的な位置づけなど、作品に対する客観的な視点を持ち、大きな射程で進むべき方向性を示すことのできる「リーダー」となりうる人材の養成を目指します。既存のアニメーション表現に安住することなく、新たな表現のための実験的モチーフやテーマ、手法や道具などを自ら開拓し、さらには自らの作品を社会化するプロデュースの方法まで提案しうる「革新的創造者」を育てます。

## アニメーションの「知の体系化」を目指す

これまで美術表現の分野において育まれてきた、「つくる」ことを基盤とした現場中心の教育研究手法を引き継ぎつつ、そこでの実践知を次世代に継承していくための、アニメーションの「知の体系化」を行います。

## 国際的ネットワークの構築と発展

文化・芸術としてのアニメーションを世界的な規模で発展させるため、国際的な研究ネットワークの構築を目指し、国内外のアニメーション教育研究機関や団体、作家らと、情報交換だけでなく人的な交流の機会を積極的に作っていきます。

<http://www.fm.geidai.ac.jp/>



# GLOBAL ARTISTS



「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」  
野村誠 千住だじゃれ音楽祭「千住の1010人」  
会場：東京都中央卸売市場 足立市場 撮影：加藤健

## 大学院国際芸術創造研究科

グローバル化で世界が近くなった今日、人びとは居場所とコミュニティを求めて、地球上を彷徨っています。資本主義がさまざまな行き詰まりを見せる先進国がある一方、高度経済成長のただなかにある国々もあります。そうした世界との交流を通じて、常に変化する現在の多様な価値観に新たな文脈を提示すべく、芸術文化活動を構想・実践し、かつ理論化できる人材を育むことが本研究科の目的です。

今年度新設されたアートプロデュース専攻では、次の3つの角度から芸術と社会の関係にアプローチします。

アートマネジメントは、芸術の作り手と受け手をつなぐことを目的とし、公演や作品、プロジェクトなどの企画・製作・運営、資金や支援の獲得、利害関係者との連携・調整などの役割を担う活動です。美術・音楽・映像など、さまざまな領域のアートマネジメントの在り方を、その理論や歴史を踏まえ、各種事業の企画・運営といった現場における実践を通じて、自治体や企業、財団、メディア、NPO、芸術家、そして市民との関係をどのように構築するのかを学修します。また、時代の変化への対応を探り、より創造的な社会の構築に資するような、芸術と社会の新たな関係構築をめざします。

キュレーションは、主として展覧会などにおいて、テーマを考え、コンセプトを構築し、それに基づいたアーティスト・作品・展示空間などを選択して、その展覧会の哲学が視覚的に伝わる演出や運営を行う活動です。また、次代に向けて成果を残すためのカタログの作成など、さまざまな言語的情報発信も活動の一環です。本専攻では、芸術やキュレーションに関わる最新の批評理論や実践を学びながら、さまざまな規模で、場の文脈を踏まえた展示企画を行い、理論と実践を学修します。また、キュレーションを行うにあたって必要な知識である人文学や社会科学、さらには自然科学などの多様な分野についても幅広く学びます。

リサーチの角度からは、社会学・メディア文化研究・文化経済学・文化政策学などの社会科学的な視点から、芸術と社会の関係を分析します。特に、近年の理論的な発展を踏まえつつ、芸術と社会の関係を、文献調査および具体的なフィールドワークを通じて考察します。さらに、メディアを中心とする情報テクノロジーの発達によって生まれつつある新しい芸術文化領域についても研究の対象とします。

国際芸術創造研究科研究科長 熊倉 純子

### 国際芸術創造研究科アドミッションポリシー

大学院国際芸術創造研究科は、今日のグローバル化とそれに伴った芸術と社会の変化に対応するために、芸術文化のさまざまな実践を横断的かつ有機的に結びつけながら、芸術と社会との新しい関係を提案する人材を育成することを目指している。  
この理念を踏まえて、本研究科では、各研究分野においてグローバルなレベルで活躍するための知識と創造力、そして実践的な能力を持ち、真摯な態度で研鑽を積むことのできる学生を求めている。

## アートプロデュース専攻 Arts Studies and Curatorial Practices

アートプロデュース専攻は、美術、音楽、映像など、さまざまな芸術ジャンルを専門とする教員・学生が集まり、公演や展覧会、ワークショップ、セミナーなど、多様な形態の文化事業を研究対象とします。芸術ジャンルを横断的に学べる環境の中で、「理論と実践の往還」を教育理念として掲げ、教員の指導のもとで学生が実際に文化事業を構想・実現することを習得しつつ、同時に世界各国の文化事業の背景にあるさまざまな文化・社会状況や、文化政策や文化経済学など、芸術と社会の関係を支える諸理論を学びます。

### 修士課程

マネジメント、キュレーション、リサーチの3つの領域の教員によって、概論（1年次）・特論（2年次）など基礎理論を学ぶ講義科目と、学生各自が実践的な演習やリサーチ活動を行う演習科目が開設されています。

### アートプロデュース概論

「アートの生産、流通、需要に関するエコシステム」（長谷川）、「美術館と現代社会の関係の変容」（住友）、「コンサートホールを拠点とした公演制作の仕組み」（箕口）、「文化政策、法制度、組織運営」（熊倉）、「文化社会学理論」（毛利）、「芸術作品の経済学」（枝川）。

### アートプロデュース特論

「横断領域化する芸術創造：方法と理論」（長谷川）、「美術家が非専門家と共同して制作したアートの分析」（住友）、「アートマネジメントに関する文献購読、国内外の文化事業例のリサーチ」（熊倉）、「演奏家とコミュニティを結ぶファシリテーターの基礎と実践」（箕口）、「メディアの変容と芸術・文化・社会研究」（毛利）、「地域固有の価値としての文化資源研究」（枝川）。

### アートプロデュース演習

「過去の展覧会のケーススタディおよび藝大の陳列館における展覧会企画の実施」（長谷川）、「展覧会企画の構想演習（アーティストや作品の選定、会場構成、関連イベントなど）」（住友）、「音楽学部の学生を擁したコンサート企画のプロデュース」（箕口）、「地域アートプロジェクトのプロデュース」（熊倉）、「聞き取り調査、フィールドワーク、参与観察など質的調査の基礎演習」（毛利）、「文化政策における国家と助成対象者、鑑賞者との法的側面や助成内容に関する討議」（枝川）。

### グローバル時代の芸術文化概論

海外からのゲスト講師を迎え、専攻の全学生が集まる必修科目です。マネジメント、キュレーション、リサーチの各領域から、2016年度は年間5～6回ゲストを迎える予定です。世界の第一線で活躍する人々やアーティスト、著名な研究者などの講義やワークショップを通じて濃密なディスカッションを展開し、世界の状況に直接触れます。授業は基本的に英語で実施されます。

### 修士論文と修了企画

学生各自がそれぞれに設定したテーマに沿ってリサーチを行い、分析や理論化を試みる修士論文を提出して修了となりますが、論文に加えて独自にプロデュースした文化事業を修了企画として実施することも可能です。その場合の修士論文は、自身がプロデュースした企画の概要に加えて、企画の意義や背景を歴史のあるいは同時代的な位置づけとともに論述し、構想段階の目標と実際に実施した結果の分析などを記述することになります。「理論と実践の往還」を自らの企画プロデュースで具現化する試みです。

学生数（2016年5月現在）〈修士〉14名

教員【アートマネジメント】熊倉 純子、箕口 一美【キュレーション】長谷川 祐子、住友 文彦  
【リサーチ】利 嘉孝、枝川 明敬【助教】川出 絵里、居原田 遙

### 特徴ある取り組み

学生は、3つの領域の中で、美術、音楽、複合芸術、文化研究、文化政策など各自の専門領域を選択しつつ、複数の専門領域の講義や演習を組み合わせることで、複眼的な視座を養うことを奨励されます。また、講義や演習にはアーティストや研究者、プロデューサーなど、多彩なゲストを招き、世界の芸術の現在を肌で感じる授業が行われます。



### 熊倉 純子

国際性の進む21世紀において、芸術の役割はどのように変化してゆくのでしょうか？これまで私は、多くの学生と研究を進めてきました。理論と実践を往還するのが私の研究室の特徴で、現場で学び、内外の理論を学び、経験と考察を修士論文にまとめてゆくなかで、学生個人のオリジナルな視座を見出してゆくお手伝いをしています。アートマネジメント以外の分野を学部で学んだ学生も数多く入学しており、入学後に本学の学部授業で基礎を学べますので、心配は不要です。希望者は、私とともに実社会のなかで開催されるアートプロジェクトの現場で実践的研鑽を積むことも可能です。アーティストのみならず、行政や企業、市民など多方面との折衝が必要で、大変難しい現場ですが、修了後にどのような芸術現場に携わることも、また、企業に就職する場合にも役立つ多くの経験を積むことができます。



### 箕口 一美

新研究科のアートプロデュース専攻は、ホールや劇場などのアーツセンター運営とそのコアになる創造・企画をバランスさせられる、本当の意味でのディレクターを養成する「ビジネススクール」となるべきだと思っています。アーツマネジメントを志す人は、間違いなく何らかの動機と目的を持っているでしょう。「夢」と言い換えてもいいかも。ここでは、その夢を、醒めれば消える幻ではなく、しっかり目を見開いて実現させる訓練を受けることになります。ですから、ここで学ぶ人には、人と人をつなぐものの結びを丁寧に根気強く纏っていく辛抱強さと、その結びを纏うアーツとアーティストたちへの尊敬と愛情、共感と協働を養ってほしい。同時に、アーツとアーティストを人々につなげる環境を整え、何かを実現させるためのあらゆる知識、技備、そして知恵と勇気を身に付け、それらを巧みに操る冷静な頭脳を鍛えてほしいと思っています。



### 長谷川 祐子

キュレトリアルは実践批評であり、理論と実践の間をたえず往還しながら、アートだけでなくさまざまな文化、社会事象を観察し、これを解釈し、展覧会の生産につなげます。それは美術史の生産であり、知の生産、観客の中に新たな知と感性を生産するきっかけをつくっていく行為でもあります。グローバル時代にあってキュレーションの仕事やアートは重要性を増しています。この研究科では、1990年代以降のアートの動きを観視する概論や、グローバル美術史の可能性を探る講義が予定されています。アートの可能性を拡張すること、世界を知ること、感じ、思考することを促し、新たなコミュニケーションと知の生産につなげていくために、2年間でできることをプログラムしています。世界に通用するキュレーターや批評家、美術史の専門家を育てることがこの研究科の役割と思っています。



### 住友 文彦

一言で言うと、キュレーターとはいつも答えのない問いについて粘り強く考え続け、そうした他者の行為に寄り添うような仕事ではないかと思っています。人や物を相手に多面的な価値観の間を行き来することができる能力をむしろ必要とします。これは、もしかしたら生き方や態度と言ってもいいかもしれません。私自身は、最近では新しい美術館の開設を通して、地域社会と美術の関係が国内で変わりつつあることを実感しています。また、この仕事をはじめすぐに西欧中心の美術の世界に大きな変化が生じたので、東欧、中国や韓国などアジアの美術にも強く関心を持ち、作品や作家と関わり続けています。現代において「グローバル」と述べるこの意味は何でしょうか。ひとつの規範が今も強くマーケットや権威を占めている現状は変わらなくありますが、実際には大きな地盤の変化が生じています。その音をどう聴き分けることができるか、それがこの新しい研究科の大きな役割ではないかと考えています。



### 毛利 嘉孝

21世紀に入り、私たちは時代の転換期に立っています。芸術や文化も例外ではありません。グローバル化、政治や経済の変容、テクノロジーの発展。こうした出来事が絡まり合いながら、新しい芸術文化のあり方が生まれつつあります。もちろん、現状を過度に楽観視することはできません。この新しい時代は、「危機」の時代でもあります。けれども、「危機」とは、重層的な状況の中で新しい文化的、政治的、経済的編成を生み出すための批判的／決定的な契機でもあります。私の研究室では、社会学、文化研究・メディア研究を基盤としながら、芸術と文化の研究と教育を行っています。この危機の時代に「知性のペシミズム、意志のオプティズム」の精神で、一緒に新しい芸術や文化のあり方を考える人を求めています。とりわけ、トランスナショナルな視点を持ち、理論から実践まで幅広く領域横断的な研究活動のできる人に来てほしいと私たちは考えています。



### 枝川 秋敬

芸術に親しみ、文化活動に参加することは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で言われたように時間合理主義とは相容れない行為で、「消費過程」を楽しむことに価値があります。文化芸術と経済とは従前より正反対のもののように言われましたが、文化経済学発展により、経済からの文化芸術への接近と文化芸術の史的発展面からの経済制度と政治制度との密接なつながりがあらためて、見直されています。以上の視点から、幅広く研究と学生への指導を行っています。今まで指導した学生の博士・修士論文テーマは、「オペラマネージメント」「文化会館の人材育成と運営」など芸術・文化施設への経営学的接近、「沖縄の民俗伝承」「韓国の無形文化財」「地域構造と文化会館」などの地域文化問題、「フランスの文化政策」「シンガポールの文化戦略」といった文化政策など幅広く広がっています。学生と以上のような幅広い議論を展開したいと思います。





## 大学の取り組み

### グローバルに躍動する藝大

東京藝術大学は、日本の芸術文化の継承・発展に寄与するとともに、常に世界を見据え、国際レベルの活動を展開してきました。これは、日本の芸術教育の礎を築いた岡倉天心、伊澤修二の両巨頭時代以来の藝大の歴史そのものであり、世界に羽ばたく芸術家を輩出し、グローバルスタンダードな大学としての地位を築いています。激動の時代である今、日本固有の芸術文化をよりいっそう振興し、世界に発信していくことが求められており、芸術文化の力を社会の繁栄に役立てるという使命のもと、藝大はグローバルに躍動しています。

#### 美術学部・研究科 |

##### 世界の芸術大学と創る国際共同プロジェクト

美術分野では、ロンドン芸術大学、パリ国立高等美術学校、シカゴ美術館附属美術大学との共同授業として、藝大と各連携大学の学生・教員の混成ユニットによる共同調査・制作を行い、芸術祭等で成果を発表しています。平成27年度は、パリ国立高等美術学校（エコール・デ・ポザール）と「私と自然」というプロジェクトテーマのもと、第1セッションとして6月に2週間、パリのポザールでワークショップ等を行い、日仏の学生がペアとなり「仮面」の制作・展示をしました。第2セッションは6月末から8月中旬までの7週間行われ、ポザールの教員と学生が来日し、共同レクチャー等を経て、成果発表として「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」において日仏の学生ペア10組がパフォーマンスを披露しました。ロンドン芸術大学、シカゴ美術館附属美術大学との共同プロジェクトにおいても、それぞれ東京とロンドン/シカゴを往来しながら共同リサーチや共同制作を重ね、香川県高松市の栗林公園での成果発表等を実施しました。



ロンドン芸術大学との共同プロジェクトにおける教員作品 作品名《高松から那覇への航海》

平成28年4月に新設されたグローバルアートプラクティス専攻ではこの三大学との連携をさらに推し進め、成果発表の場を海外へと広げるとともに、国際共同学位プログラム（ジョイントディグリー）の構築を目指しています。また、イスラエルのベツアルエル美術デザインアカデミーやトルコのミマール・シナン美術大学、アナドル大学との交流も活発化しており、長年交流を続けている中国・韓国・ASEAN諸国の芸術大学とあわせ、欧米・中東・アジアと、世界中のネットワークを活かし、多彩な共同プロジェクトを展開しています。



パリ国立高等美術学校内におけるマスク共同制作課題展示



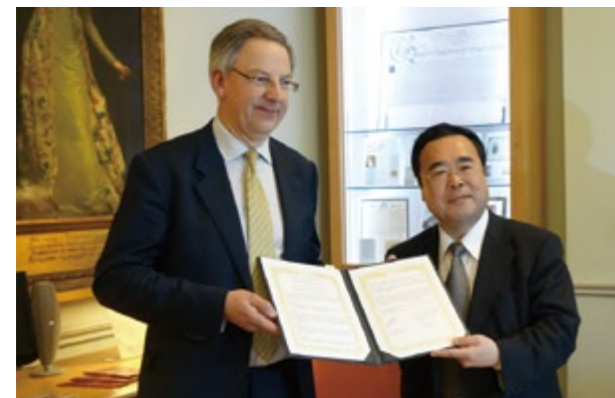
大地の芸術祭でパフォーマンスを披露する藝大生とパリ国立高等美術学校生

#### 音楽学部・研究科 | 世界で活躍する演奏家との共演

パリ国立高等音楽院、英国王立音楽院、リスト音楽院、ベルリンフィルハーモニー管弦楽団など、世界最高峰の音楽機関から第一線で活躍する演奏家を教員として招聘し、藝大の教員による指導とあわせて学生に対する個人レッスンを倍増させており、その成果の発表として、奏楽堂等で開催される演奏会での共演を実現しています。また、韓国や中国など、アジアの国々の音楽大学とも交流演奏会を開催しているほか、海外の音楽祭や講習会に参加する機会もあります。平成27年度は、イギリス湖水地方での音楽祭、ロサンゼルスで開催された国際ホルン・シンポジウム、モスクワ音楽院における邦楽イベントなどにおいて、多くの学生がレッスン受講やコンサート出演をしました。



フィリップ・ミュレル元パリ国立高等音楽院教授を招聘してのレッスン



英国王立音楽院との交流協定調印式



パリ国立高等音楽舞踊院より招聘のミシェル・ペロフ氏のレッスン



英国王立音楽院での邦楽ワークショップ



Arts & Science LAB.の視察に来訪されたオランダ王国のマルク・ルッテ首相

#### 映像研究科 | 世界の学生との共同制作

映画専攻では、韓国映画アカデミー、フランス国立映画学校と、短編映画の共同制作を実施しています。また、アニメーション専攻でも中国伝媒体大学、韓国芸術総合学校との短編アニメーション共同制作を毎年実施しており、この取組では、日中韓の3カ国の学生からなる混成チームで、企画・制作・ポストプロダクションまで行い、チームごとに作品を完成させます。平成27年度は、成果発表を兼ねて金沢21世紀美術館において「日中韓学生アニメーションフェスティバル」を開催しました。また、映像メディア教育では世界最先端の南カリフォルニア大学から教員を招き、ドキュメンタリー、ミュージックビデオ、バーチャルリアリティなどの特別講義を行っているほか、韓国の檀国大学やイランのテヘラン大学からも映画分野の教員を招き、映画制作や脚本についての特別講義を開催しています。



南カリフォルニア大学ユニットのアニメーション・ドキュメンタリーのワークショップ

#### 国際芸術創造研究科 | 世界と芸術を解く

ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジなど世界有数の機関と連携。絶え間なく変化する世界との交流を通じて、変幻する現在の多様な価値観に新たな文脈を提示すべく、芸術文化活動を構想・実践し、かつ理論化できる人材を育てています。平成27年度には同研究科の創設に向けて、ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジのパトリック・ロックリー学長を特別ゲストに迎え、「グローバル時代の芸術大学の未来」と題した公開シンポジウムを開催し、パトリック学長からは「メディアよりもメッセージが大事だ。どうやって神を笑わせるか考えよう」という言葉が述べられました。



公開シンポジウム「グローバル時代の芸術大学の未来」におけるロンドン大学ゴールドスミスカレッジのパトリック・ロックリー学長の講演

#### 大学全体 | 世界の要人も注目する藝大のポテンシャル

グローバル化が急速に進展するなか、芸術文化を活かした国際交流や外交の重要性が増しています。藝大が有する環境や教育研究成果には世界各国の要人も注目しており、特別講演や連携に向けた会談、視察来訪などが行われています。平成27年度には、イタリア共和国マッテオ・レンツィ首相による日伊の芸術文化交流をテーマとした特別講演や、フランス前首相・ナント市名誉市長であるジャン＝マルク・エロー氏による特別講演「よみがえるナント-文化による都市再生の軌跡-」を開催しました。また、オランダ王国のマルク・ルッテ首相が、芸術と科学との融合等の分野における日蘭の国際連携体制の構築・国際共同プロジェクトの実施に向け、Arts & Science LAB.を視察され、学長と会談を行いました。



フランス前首相・ナント市名誉市長であるジャン＝マルク・エロー氏による特別講演



イタリア共和国マッテオ・レンツィ首相による日伊の芸術文化交流をテーマとした特別講演



## 世界を知る

## 世界を舞台にした実践型プロジェクト

先端芸術表現科の佐藤時啓教授は、2015年3月、本学が進める国際的実践型プロジェクトの一環で、スイスのリゾート地、クラン・モンタナの滞在制作プログラム「COMBAZ7」に参加し、学生と共に制作展示を行いました。アルプス山脈を望む風光明媚な観光地で、眼前の風物をいかに表現として昇華するか。教授との協働制作と並行して各自の制作に取り組んだ学生たちにとっても、日本とは異なる環境や限られた条件の下、3週間という短い期間で結果を導き出すためのサバイバル力が問われる貴重な機会となりました。

世界を知るとは、新しい関係を築くことと言えるでしょう。未知の文化圏で知見を広め、翻って相対的に自身を客観視すること。専門分野に特有の言語を介して意志や感情を伝える力を鍛えること。こうした体験を多くの学生が得られるよう、様々な国際プロジェクトが世界各地で実施されています。

## 特別講演・マスタークラス

国内外からゲストを招聘して行う特別講演会、マスタークラスも、各キャンパスで盛んに実施されています。

(2015年度実績より抜粋)

## 美術

五十嵐 太郎(東北大学大学院教授)  
小川 重雄(写真家)  
小倉 紀蔵(京都大学教授)  
小倉 桂子(平和のためのヒロシマ通訳者グループ)  
オットー・クンツリ(ジュエリーデザイナー)  
黒田 泰三(出光美術館理事・学芸部長)  
河野 太通(臨濟宗妙心寺派龍門寺)  
志賀 賢治(広島平和記念資料館長)  
常 嘉煌(画家)  
瀧 徹(彫刻家)  
田中 毅(彫刻家)  
名児 耶明(五島美術館理事・学芸部長)  
宮 伸穂(南部鉄器職人)  
メアリー・ジェイン・ジェイコブ(キュレーター)

## 音楽

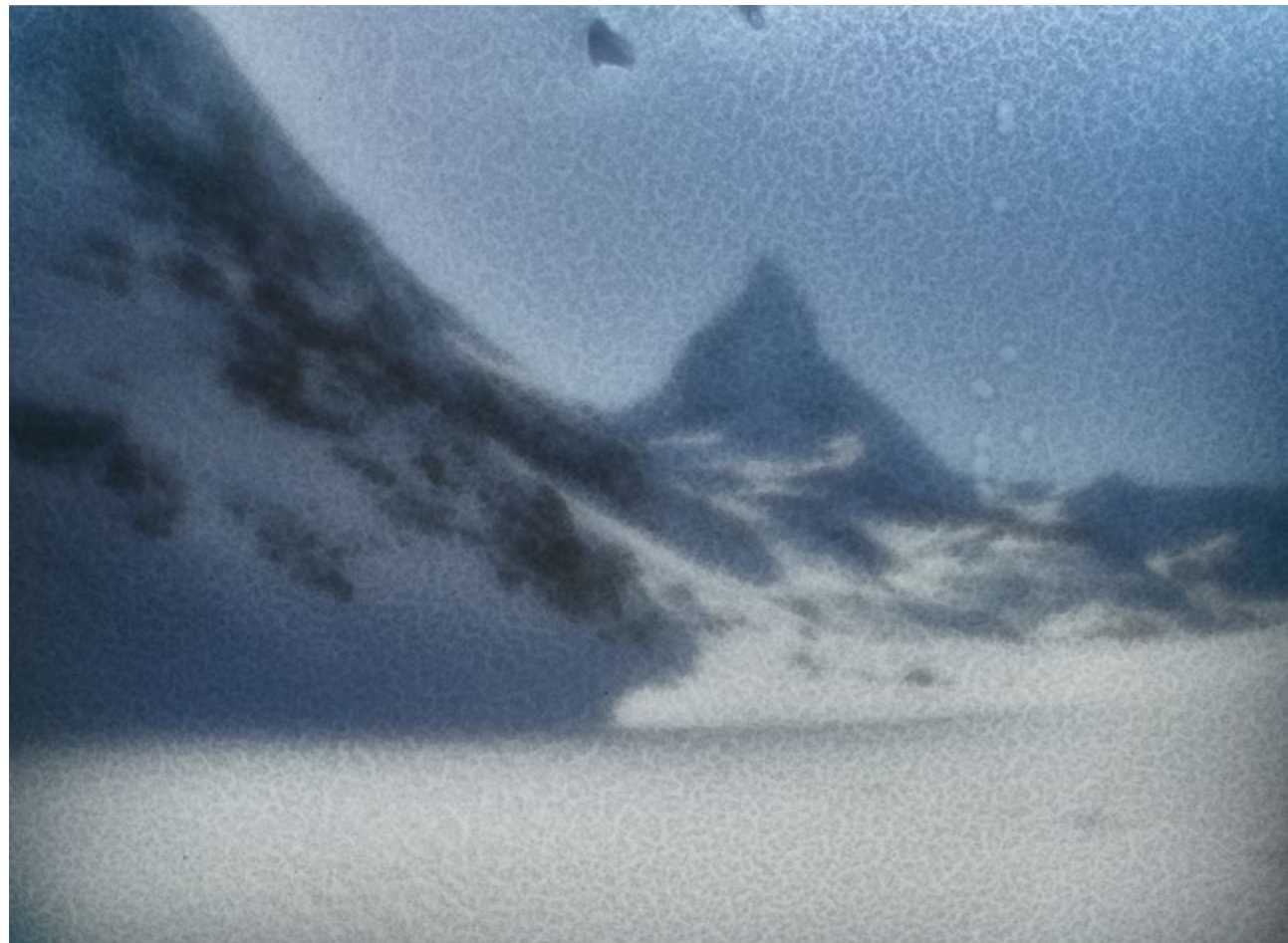
石坂 団十郎(チェロ奏者)  
ジャック・ルヴィエ(モーツァルト音楽大学教授)  
ジャン＝マリ・ヘイゼン(レコーディングエンジニア)  
杉山 康人(クレーヴラウンド管弦楽団首席テューバ(奏者))  
ダルトン・ポールドウィン(ジュリアード音楽院客員教授)  
ティモシー・ジョーンズ(五立音楽院副院長)  
中島 靖子(事曲生田流 正派邦楽会理事長)  
ニール・マッキー(英国王立音楽院教授)  
ポール・ミルナー(ロンドン交響楽団首席/ストロンボーン奏者)  
松平 頼暁(立教大学教授)  
マティアス・ベント(ローベルト・シューマン研究所)  
ミッシェル・ペロフ(ピアニスト)  
湯浅 譲二(作曲家)  
ライブツィヒ弦楽四重奏団(ライブツィヒ弦楽四重奏団)

## 映像

アミール・ナデリ(イラン映画監督)  
アンドレアス・ヒューカーデ(ディレクター)  
五十嵐 耕平(映画監督)  
石田 英敬(東京大学大学院教授)  
サリー・ジェーン・ノーマン(サセックス大学教授)  
ジャンアルベルト・ベンダツツイ(アニメーション映画史家)  
ジョン・キュービット(ロンドン大学教授)  
チェ・ユジン(KIAFA 事務局長)  
チェン・シー(ディレクター)  
チェン・ジエレン(映像作家)  
ミゲル・ゴメス(映画監督)  
山根 貞男(映画批評家)  
レイ・レイ(アニメーション・アーティスト)  
ロルフ・アプデルハレデン(演出家)

組立て式カメラ・オプスクラを通して雪面に投影されたアルプス。

撮影:佐藤 時啓



## 若い世代の力

## 早期教育プロジェクト

幼少期に抱いた夢や想像力を未来に結び付け、実現していくために、社会はどのようなステップを用意できるのでしょうか。とりわけ音楽の分野では、早期教育の重要性が広く認められている一方で、10代のうちに子どもが芸術家への道をあきらめてしまうケースも少なくないことから、それは極めて今日的な問いでもあります。

子どもたちの可能性を引き出し伸ばす機会と場を創出すること—音楽学部が実施している「早期教育プロジェクト」では、その方策を探っています。

2014年度に始まった本プロジェクトは、2015年度は上野キャンパスを含む全国7会場で開催。総計243名の子どもたちが、弦楽器やピアノの公開レッスン、管打楽器のグループレッスンに参加しました。小・中学生の瑞々しい感性と吸収力の高さから、会場はほどよい緊張感に包まれ、受講生の感想としても「ていねいに教えてくれて分かりやすかった」「教えてもらったことをわすれないでこれからもがんばりたい」といった声が届いています。地方自治体やホールとの連携のもと、地域における音楽の輪をいっそう広げ、音楽文化の底上げに寄与できるようプロジェクトの発展を目指しています。



福田克己教授のレッスン。終了後には本学学生のミニコンサートも催されました。

玉井菜採准教授のレッスン。受講生は演奏するだけでなく、互いにレッスンを聴き合いました。

## デッサン講習会

公開講座の一つとして美術学部で2014年から始まったデッサン講習会。芸術大学への進学や、アーティストを目指す高校生以上の方を対象に、表現の基礎となる素描力を見るための実習と講習会を行っています。美術学部の入試課題に類したモチーフを用いて、本学の評価軸に沿った指導を直に受けながら、観察力、構想力、造形力を伸ばしていくプログラムは、若い世代の基礎能力の底上げを図るものであると同時に、「藝大入試」の透明性を高めるものでもあります。2016年8月末には、油画、工芸、デザイン、先端芸術表現の各々がデッサンや総合実技をテーマとする講習会を予定しており、藝祭の開催を間近に控えて賑わうキャンパスが、もう一つの熱気に包まれることでしょう。



入試さながらのデッサン風景。

## 学生の受賞実績

## 美術

- 第3回東京装画賞 学生部門 銅賞  
村尾 優華(大学院美術研究科修士課程絵画専攻)
- 第33回上野の森美術館大賞展 優秀賞、フジテレビ賞  
青木 萌(大学院美術研究科修士課程絵画専攻)
- AAC2015 最優秀賞  
渡辺 志桜里(大学院美術研究科修士課程彫刻専攻)
- AAC2015 優秀賞  
佐藤 風太(美術学部彫刻科)
- JJAジュエリーデザインアワード2015 新人大賞  
加藤 まな(大学院美術研究科修士課程工芸専攻)
- 第49回日本七宝作家協会公募展 日本七宝作家協会会長賞  
常信 明子(大学院美術研究科修士課程工芸専攻)
- アートアワードトーキョー丸の内2015 フランス大使館賞  
鈴木 のぞみ(大学院美術研究科修士課程美術専攻)

## 音楽

- 日本学術振興会 育志賞  
■ 平成27年度 平山郁夫文化芸術賞  
上田 泰(大学院音楽研究科博士後期課程音楽学専攻)
- 第84回日本音楽コンクール ピアノ部門 第1位  
黒岩 航紀(大学院音楽研究科修士課程器楽専攻)
- 第32回日本管打楽器コンクール フルート部門 第1位  
山内 美慧(大学院音楽研究科修士課程器楽専攻)
- 第32回日本管打楽器コンクール ユーフォニアム部門 第1位  
佐藤 采香(大学院音楽研究科修士課程器楽専攻)
- 第17回東京国際音楽コンクール(指揮) 第2位  
太田 弦(音楽学部指揮科)
- 第26回日本ドイツ歌曲コンクール 第1位/文部科学大臣賞/シュベール歌曲賞  
宮下 大器(大学院音楽研究科修士課程声楽専攻)
- 第17回日本演奏家コンクール 第1位  
神奈川県知事賞 毎日新聞社賞  
小西 もも子(音楽学部器楽科)

## 映像

- 第16回 TAMA NEW WAVE グランプリ  
堀江 貴大(大学院映像研究科修士課程映画専攻)
- 第15回マラケシュ国際映画祭 コンペティション部門 審査員賞  
鶴岡 慧子(大学院映像研究科修士課程映画専攻)
- 第21回学生CGコンテストアート部門GOLD賞  
青柳 菜摘(大学院映像研究科修士課程メディア映像専攻)
- MEC Award -Media Explorer Challenge Award- 2016 入選  
阿部 舜(大学院映像研究科修士課程メディア映像専攻)
- アヌシー国際アニメーション映画祭(フランス)入選  
伊藤 圭吾(大学院映像研究科修士課程アニメーション専攻)
- 第27回東京学生映画祭 グランプリ  
齊藤 円香(大学院映像研究科修士課程アニメーション専攻)
- フォン国際アニメーション映画祭 Graduation Film 部門観客賞  
小川 育(大学院映像研究科修士課程アニメーション専攻)

※所属は受賞時または制作時のもの



## 芸術文化と社会

### 新しい文化財保護のかたち

2014年の展覧会「別品の祈り—法隆寺金堂壁画—」では、画家の感性と最先端の科学技術とを融合した画期的な文化財保護のかたちが提示されました。1949年に焼損した金堂壁画を全面原寸大で復元するプロジェクトでは、壁面の質感や量感を和紙に再現し、焼損前に撮影されたガラス乾板などの資料をデジタル画像統合して印刷後、画家の観点から補彩することにより、質感表現を伴う迅速な複製が可能となりました。また、金堂壁画をテーマとしたアニメーションを8Kプロジェクターで上映するプロジェクトでは、超高精細映像作品による圧倒的に緻密な臨場感が展示室内に作り出されました。貴重な文化財を現地保存したまま、同じ素材と質感の複製を広く一般に公開することができるこの新しい文化財保護の取り組みは、教育普及面での活用にも期待を集めています。



陳列館で開催された本展は、文部科学省および科学技術振興機構「革新的イノベーション創出プログラム(COI STREAM, COI-T)」に採用され、株式会社JVCケンウッドとの産学連携により進めている研究成果を発表したものです。

### 国際関係の架け橋

世界の舞台で多様な人々が互いに理解を深めるには、芸術文化を通じた交流が欠かせません。本学も、創造性を核とした日本の文化発信に積極的に取り組んでおり、アニメーション専攻の学生制作作品が国際的に著名な映画祭などで相次いで評価されていることもその一例と言えるでしょう。ASEANサミット2014では、こうした文化外交プロジェクトの一環として、本学が有する独自の文化財複製特許技術をアピールする機会を得ました。議長国のミャンマー政府から各国首脳へ記念品として贈呈されたバガン遺跡の複製壁画は、ミャンマー文化省からの依頼を受け、高精細デジタルデータや3D計測データをもとに本学が制作したものです。個人の創作物から大学で開発を進める高度な技術力に至るまで、教育と研究の成果が様々な場面で国際関係の架け橋となっています。



宮崎県社会連携センター長からミャンマー文化省副大臣のサンダーキン氏へ寄贈されたバガン遺跡の複製壁画。バガン遺跡は、アンコール・ワット、ポロドゥールとともに、世界三大仏教遺跡の一つと称される貴重な文化財ですが、壁画の大部分は略奪や盗難、自然災害により損傷が著しく、遺跡保護の取り組みが課題となっています。

### 産学官の連携

2015年春、上野キャンパスに新しく施設が建設されました。産学官連携棟( Arts & Science LAB.)と呼ばれるこの建物は、産学官が異分野融合体制で集う国際的イノベーション拠点として整備されたもので、芸術と科学技術のハイブリッドな組み合わせにより、次世代のインフラとなる豊かな文化的コンテンツの開発とその社会実装を目指しています。

現在は、「内外の文化遺産の複製・映像コンテンツの制作による新しい産業創成」、「ロボット、アンドロイド、障がい者とのパフォーマンスアーツを通じた言語的弱者や視覚的弱者をはじめとする障がい者の学習や機能回復に資するアプリケーション開発」、「2020年オリンピック・パラリンピックの文化プログラム制作」などの研究開発に取り組んでいます。



Arts & Science LAB.  
駿大COI拠点「感動」を創造する芸術と科学技術による共感覚イノベーションの研究拠点として、物質的な豊かさに増して、心の豊かさがあふれる生活環境を実現する社会の構築を目指し、日本の文化立国と国際的な共生社会の実現に向けた研究開発を行います。

### もっと文化体験の機会を

スポーツと文化と教育の融合を謳うオリンピック開催を前に、東京ではすでに多彩な文化プログラムが繰り広げられ、人材育成や環境整備が進められています。本学も「とびらプロジェクト」や「Museum Start あいうえの」事業を東京都美術館など上野公園の文化施設と連携して実施し、アートを介したコミュニティづくりや、子どもたちのミュージアム・デビューを応援しています。

「藝大アーツイン丸の内」を共催してきた三菱地所株式会社との取り組みも大きく展開し、2014年には「東京 JAZZ 2014」の関連イベントとして「東京 JAZZ CIRCUIT 2014 JAZZ in 藝大 @ Marunouchi」を、2015年には「ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン『熱狂の日』音楽祭2015」との連動企画としてピアノ専攻選抜学生によるエリアコンサートをそれぞれ開催するなど、オフィス街での文化体験の機会を拡充しています。



「ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン『熱狂の日』音楽祭2015」の関連企画として行われたエリアコンサート。丸ビル1階のマルキューブでは、ピアノ専攻の教員と学生が様々な楽曲を披露し、街を行き交う多くの人々がその音色に聴き入りました。

### アンリ・ラバンの香水塔

総合芸術アーカイブセンター3Dプロジェクトでは、東京都庭園美術館(旧朝香宮邸)内に設置されているアンリ・ラバンがデザインしたセーブル製の香水塔を3Dデータ化し、アーカイブの作成やその活用法の研究に取り組んでいます。

1933年の竣工時から旧朝香宮邸の次室を華やかに装う香水塔は、2014年の美術館リニューアルを機に修復されました。本プロジェクトでは、香水塔をめぐる歴史的経緯などの文書情報も含めたアーカイブ化に加えて、3DCG映像を制作し、創建時の邸内に置かれた香水塔の姿を、仮想的に再現することも試んでいます。また、データをもとに香水塔を小作品として模型化するなど、有質な資料アーカイブの活用という観点からも研究を進めています。



写真提供：東京都庭園美術館

### 藝大ミュージックアーカイブ

藝大ミュージックアーカイブは、本学でこれまでに行われた演奏会の記録音源・映像を集めた公式サイトです。定期演奏会、演奏芸術センター企画演奏会、モーニング・コンサート、博士学位審査演奏会、海外提携校交流演奏会などを配信しています。時間や場所を選ばず自宅のパソコンやスマートフォン、タブレットでも視聴することができます。

<http://arcmusic.geidai.ac.jp>



### 様々なコラボレーション

本学は、各キャンパスが所在する地元自治体などと連携して芸術文化の発信事業を行うほか、様々な企業・団体との間で受託研究や共同事業を実施しています。演奏会の開催、まちづくりへの提言、文化財の調査・修復、特別公開講座の実施など、本学の教育研究資源を活用した多彩な取り組みは全国各地に広がっています。

複数年にわたって事業が更新されることもあり、デザイン科ではネスレ日本株式会社からの受託研究により、毎年春から秋にかけて、ネスレの代表商品の一つであるKIT KATチョコレートの新商品を発案・企画しています。カリキュラム外のプロジェクトであるため、実践的な機会を得ようと、意欲的な学生が自主的に学年を越えて集まり、様々なストーリー作りと多くのプレインストーミングを重ねて、ポスターやパッケージデザインを中心に、販売店舗やイベントの提案など、各々が個性あるアイデアを直接企業の方に発表してきました。優秀な作品は、商品化に向けて検討されています。



過去の優秀作品の一例

協力：ネスレ日本株式会社

## 大学美術館

本学の芸術資料収集は、東京美術学校設置（明治20年）以前の図画取調掛の時代にまでさかのぼり、芸術教育と研究のため120年以上にわたって現在まで継続されています。

当館所蔵品は、32件の指定文化財を含む約29,000件（件数はいずれも台帳登録数）に及び、その内容は、絵画・彫刻・工芸品をはじめ、音楽資料、写真、考古遺物など極めて多岐にわたっています。とりわけ、開学以来収集を進めてきた平常・卒業・修了制作や自画像といった学生制作作品は、今日では我が国の近現代美術についての重要なコレクションを形成しています。

これらの芸術資料は、明治以来、当時は文庫と呼ばれた図書館内に取られ、教育研究に活用されてきました。戦後に附属図書館の管理となり、昭和45年には芸術資料部門が独立し、東京音楽学校時代の音楽資料を加えて「芸術資料館」が発足。その後、資料の積極的な利用と研究成果の社会へ向けた発信が強く求められるようになり、新しい美術館活動の展開を目指して、平成10年4月に「大学美術館」を設置しました。

大学美術館は、通常美術館の基本的活動である芸術資料の研究・収集・保存・公開と、教育・制作・研究の現場である本学の特質を統合した、我が国に前例のない実験的な大学美術館を目指しています。所蔵品はコレクション展などで館内展示されるほか、平常の授業でも閲覧することができ、研究や制作活動に生かされています。また館外へ出品する機会も多く、どこかの展覧会で藝大の所蔵品を目にすることもあるでしょう。

展示施設としては上野キャンパスの本館（平成11年建設）のほか陳列館（昭和4年建設）、正木記念館（昭和10年建設）および取手キャンパスの取手館（平成6年建設）を有し、大規模企画展のほかにも、美術学部や各研究室の企画による展示が盛んに行われています。



[www.geidai.ac.jp/museum/](http://www.geidai.ac.jp/museum/)



撮影：永井文仁

## 附属図書館

上野キャンパスにある本館は正面玄関の張り出した庇が特徴的な建物で、窓外の緑に囲まれた閲覧室、AV視聴室などの利用者スペースは2階に集中しています。平日の夜間や土曜日でも利用することができ、大型の美術書やAV資料なども備えています。取手キャンパスには附属図書館分室があります。

附属図書館の収集の歴史は、明治12年の音楽取調掛、明治18年の図画取調掛、明治20年の東京音楽学校図書館、東京美術学校文庫、昭和24年の附属図書館発足を経て現在に至って、蔵書点数は34万点にのぼっています。中には岡倉天心が美術学校創設期に欧米から持ち帰った美しい洋書群、江戸の金工家後藤家の手控え文書、ルネサンスの古刊本などの美術書、また、音楽教育黎明

期の音楽取調掛資料、歌舞伎狂言本などの邦楽書、作曲家の自筆譜などの多彩な貴重資料が含まれており、学内外の利用者に幅広く活用されています。これらの貴重資料は、毎年行っている貴重資料展やWebデータベースで広く公開されています。附属図書館のホームページからはWebOPAC（蔵書検索）だけでなく、電子ジャーナル、文献データベース、音源ライブラリーへもアクセスでき、また、教員著作アーカイブ、博士論文、紀要論文などの情報も提供しています。

今後も図書、楽譜、雑誌はもちろん、展覧会カタログや映像・録音資料などを積極的に収集しコレクションの充実を図るとともに、本学の研究成果や芸術情報を発信し、本学における芸術情報発信の拠点としての役割を果たしていきます。



撮影：永井文仁

## 美術学部附属古美術研究施設

古美術研究の拠点として奈良市内に設置している教育実習施設。飛鳥以降の各時代の建築物、絵画、彫刻、工芸品など日本古来の優れた作品の研究のほか、古美術保存、修理および資料の収集を行っています。

また、カリキュラムの一環として美術学部全学科で古美術研究旅行を実施しており、本施設から奈良・京都の寺社、博物館等へ赴き、様々な美術工芸品や文化財を実地に見学、研究することで、美術に関する基礎的視野を広げています。

住所：奈良市登大路6



公式ホームページ  
<http://www.lib.geidai.ac.jp/>



貴重資料画像データベース  
<http://images.lib.geidai.ac.jp/>



## 美術学部附属写真センター

写真、映像設備などの利用を通じて、芸術に関する教育、研究効果の増大を図ることを目的に、共同利用施設として初心者講習会を行うほか、「写真表現演習」「写真映像論」「現代写真論」「写真史」などの授業を担当しています。ジャンルを自在に横断する様々な芸術表現が増えている現実をふまえ、従来の枠組みを越えた、より総合的な表現としての在り方を研究しており、暗室やスタジオ、デジタル機器、大型プリンターなど、設備の充実や機材活用の要望に応えています。

写真、映像設備などの利用を通じて、芸術に関する教育、研究効果の増大を図ることを目的に、共同利用施設として初心者講習会を行うほか、「写真表現演習」「写真映像論」「現代写真論」「写真史」などの授業を担当しています。ジャンルを自在に横断する様々な芸術表現が増えている現実をふまえ、従来の枠組みを越えた、より総合的な表現としての在り方を研究しており、暗室やスタジオ、デジタル機器、大型プリンターなど、設備の充実や機材活用の要望に応えています。

<http://www.geidai.ac.jp/pc/>



## 社会連携センター

大学には教育研究活動を行うこと以外に、社会全体の発展への寄与が期待されています。本学も展覧会、演奏会、公開講座等、市民が芸術に親しむ機会を提供していますが、これ以外にも公的機関の審議会等への教員の参加、作品の制作や展示、環境、空間、商品等のデザイン、また文化財の保存修復やソロからオーケストラに至る演奏など、様々な依頼や相談があります。社会連携センターは、こうした学外からの要請を受け止め、大学の関係情報の提供や調整を行う総合窓口として平成19年4月に設置されました。さらにセンターでは、「藝大アーツイン丸の内」のように、積極的に地域社会、産業界、経済界と連携しながら本学の人的、芸術的資源を生かした事業をプロデュースすることにより、日本の文化芸術の振興に寄与するための活動を行っています。

<http://sharen.geidai.ac.jp/index.html>



## 芸術情報センター

芸術情報センターは、「セキュリティの向上」「オープンネスの推進」「情報発信のリテラシー」を運営方針に掲げ、学内共同利用施設として上野・取手・横浜・千住・奈良を結んだキャンパス情報ネットワークの管理運用、情報メディアに関連する講義演習や情報発信のサポート等を日常業務として行なっています。また、学内の様々な活動の情報化推進に向けて、クラウド化やアーカイブ化の実現等を推進しています。さらに、メディア・リテラシー（情報の読み書き能力）を身につけるための授業やプロジェクト、ワークショップ等を展開しています。

施設・設備面では、コンピュータと表現に関する様々な講義を行うための「コンピュータ演習室」の他、全学生が利用可能な「ラボ」を有しています。ラボでは、美術（デジタルファブリケーション環境）・音楽（サウンドスタジオ）・映像（HD映像編集環境）等の各分野に特化したコンピュータと周辺機器を備え、また、それら設備の利用レクチャーを定期的実施し、高度かつ領域横断的な創作活動の支援をします。

<http://amc.geidai.ac.jp/>



## 奏楽堂

東京藝術大学奏楽堂は、明治23年以来永く使用されてきた旧東京音楽学校奏楽堂に替わるコンサートホールとして、平成10年に新しく建設されました。音楽教育および研究の場としての機能、音響効果、設備を重視し、周囲の環境と調和する格調高い施設となるよう設計されています。特に、ホール全体を、調和のとれた響きを生む一つの優れた楽器として捉え、音響特性を使用目的に応じて変えられるよう、世界で初めて客席の天井全体を可動式にし、音響空間を変化させる方法を採用していることが、独自の試みとして注目される点です。

年間を通して、オルガンをはじめとする個人レッスン、オーケストラや吹奏楽の授業が行われるほか、歴史ある多彩な定期演奏会、演奏芸術センター企画のユニークで挑戦的なプログラム、無料で一般公開される試験や学位審査などを開催し、研究成果の発表と実践的な教育の場として音楽文化の発信に努めています。



奏楽堂 演奏会一覧  
<http://www.geidai.ac.jp/event/sogakudo>



第60回 藝大オペラ定期公演  
 W.A.モーツァルト《コシ・ファン・トゥッテ ～女はみんなごうしたもの～》  
 撮影：TAKE-O（熊工房）



藝大21 ジャズin藝大～藝大から巣立ったジャズメンPart2～

## 演奏芸術センター

奏楽堂を舞台に、美術学部・音楽学部の枠を越えて、演奏および舞台芸術の創造的な「場」をプロデュースするための組織です。社会への情報発信の窓口の一つとして、本学の教育研究成果の発表をはじめとする様々なコンサートの企画・制作・広報活動などを行っており、現在は以下の3つの柱を軸に活動しています。

- ① 藝大プロジェクト … 音楽学部各講座の枠を越えたインタラクティブな試み。
- ② 奏楽堂シリーズ … 音楽学部各講座の専門性、独自性を生かしたコンサートシリーズ。
- ③ 藝大21 … 広いパースペクティブで「今」という時代を見つめる企画。

上記のほか、劇場技術論、コンサート・プロデュース論など、美術・音楽両学部につながる総合的な授業も開設しています。



[http://www.geidai.ac.jp/department/center/performing\\_arts\\_center](http://www.geidai.ac.jp/department/center/performing_arts_center)

## 管弦楽研究部(藝大フィルハーモニア)

本学に所属するプロフェッショナル・オーケストラで、年2回の定期演奏会、声楽科との合唱定期、オペラ研究部との共演(藝大オペラ定期)、年13回に及ぶ優秀学生とのコンチェルト協演(モーニング・コンサート)、新卒業生(各科最優秀者)の紹介演奏のほか、年末恒例の「メサイア演奏会」、「第九公演」などを行い、学生の演奏経験の拡充に資しています。前身である旧東京音楽学校管弦楽団は、我が国初の本格的なオーケストラで、ベートーヴェンの《交響曲第5番「運命」》、《交響曲第9番「合唱付き」》、ブルックナーの《交響曲第7番》、チャイコフスキーの《交響曲第6番「悲愴」》、マーラーの《交響曲第6番》などを本邦初演し、日本の音楽界の礎石としての活動を果たしてきました。

## 音楽研究センター

音楽研究センターは、約90,000点の音楽資料(図書、楽譜、録音・映像資料、マイクロ資料、本学定期演奏会の記録等)を所蔵し、閲覧、試聴、貸出などのサービスによって、学生・教員の教育研究活動をサポートしています。センターには、閲覧室、試聴室、インターネットスペース、個人学習ブース、グループ学習室、音楽文庫室、音に関する研究や実験のための音響研究室があり、様々な用途で利用することができます。また、専門知識をもつスタッフから、資料の探し方と使い方についてきめ細やかなアドバイスを受けることができます。

半世紀にわたる歴史をもつ音楽研究センターには、園田高弘、増井敬二、大宮真琴、シモン・ゴールドベルクなど著名音楽家にまつわる貴重資料が豊富です。これらの貴重なコレクションを紹介するイベントも積極的に行われており、2014年に開催された「シモン・ゴールドベルク資料展」には多くの観覧者が訪れました。

音楽研究センターは、今後さらにその活動領域を広げ、教育研究支援の充実をはかるとともに、アントレプレヌール(起業家的な精神とスキルの養成)支援にも取り組み、ワークショップを随時開催していく予定です。さらに、シンクタンクとして、音楽に関する様々な調査・分析・企画を行い、その成果を社会に発信していきます。

<http://www.geidai.ac.jp/labs/onken/>



## オペラ研究部

歌手をはじめ指揮・演出・演技指導・ピアノ(コレペティートル)・衣裳デザイン・舞台監督など専門の研究部員によって構成され、声楽科と共同で学生の教育にあたっています。第一線で活躍する演奏研究員が揃う本学ならではの充実した指導体制により、学生は上質で実践的な演奏体験の機会を得ることができます。また、独自の研究活動に加えて、教育の一環としてオペラ定期公演を開催しています。

## 言語・音声トレーニングセンター

芸術分野における海外での活動や国際的なコミュニケーションの必要性から、本学では従来から運用能力を重視した外国語教育を行ってきました。言語・音声トレーニングセンターは、言語教育を専門とする外国人・日本人教員により構成され、主に次の3つの活動を行っています。

1. 外国語(英語・ドイツ語・フランス語・イタリア語)科目や外国語としての日本語科目、外国語検定試験に関する講座の開講
2. 外国語の個人指導(声楽やオペラなど舞台で使われる言語の発音・リズムの指導や、外国語での発表・論文執筆の支援)
3. 言語および言語教育に関する研究

また、各種外国語の書籍や視聴覚教材を所蔵し、学生の外国語学習を支援しています。

[http://www.geidai.ac.jp/department/center/foreign\\_languages](http://www.geidai.ac.jp/department/center/foreign_languages)



## グローバルサポートセンター

平成26年12月に新設された本センターでは、豊富な国際経験をもつ教員やスタッフが、海外留学を目指す学生や藝大に在籍する外国人留学生を総合的に支援しており、特設Webサイトでは以下の情報が閲覧できます。

- ・ 藝大生の留学状況
- ・ 藝大生の海外研修レポート
- ・ 藝大生の語学学習方法
- ・ 留学生の藝大体験記
- ・ 海外留学に関する資料・案内
- ・ 大学の国際化に関するニュース

また、eラーニング英語学習システムの運用、海外留学手続きに必要なエッセイなどの作成を支援する英文ライティングサポート、英語での自己PR力を鍛える特別集中講義の開催など、海外留学に向けた様々なステップで役立つサービスを提供しています。

<http://global.geidai.ac.jp/>



## 東京藝術大学奨学金

本学では、入学試験および在学期間に特に優れた成績を納めた者に対し、各種の奨学金、特待生制度を設けてこれを表彰し、才能にあふれた意欲ある学生を積極的に支援しています。これらは返済不要の給付型奨学金です。

### 1. 入学試験成績により採用されるもの

|音楽学部・大学院音楽研究科|

<b>宗次徳二特待奨学生</b>
【学部】 ピアノ、弦楽、管打楽 対象 / 初年度給付額：100万円、在学期間年額：50万円 / 給付期間：最長4年間
【大学院】 声楽 対象 / 初年度給付額：100万円、在学期間年額：50万円 / 給付期間：最長2年間

### 2. 在学時の学業成績などにより採用されるもの

※この制度による奨学金は、学年末試験、課題提出などの成績優秀者に対して大学が選考の上授与しており、学生に広く公募するものではありません。

<b>平山郁夫文化芸術賞</b>	<b>安宅賞</b>
【学部】【大学院】 全学 対象 / 給付額20～30万円	【学部】【大学院】 全学 対象 / 給付額2.4～3.6万円
美術学部・大学院美術研究科	音楽学部・大学院音楽研究科
<b>平山郁夫奨学金</b>	<b>長谷川良夫賞</b>
【学部】【大学院】 全学科・専攻 対象 / 給付額20万円	【学部】 作曲 対象 / 給付額30万円
<b>上野芸友賞奨学金</b>	<b>松田トシ賞</b>
【学部】【大学院】 油画 対象 / 給付額5～10万円	【学部】 声楽 対象 / 給付額20万円
<b>〇氏記念賞奨学金</b>	<b>大賀典雄賞</b>
【大学院】 油画 対象 / 給付額18万円(予定)	【学部】 声楽、ピアノ 対象 / 給付額100万円
<b>俵奨学金</b>	<b>アリアドネ・ムジカ賞</b>
【大学院】 版画 対象 / 給付額20万円	【学部】 ピアノ 対象 / 給付額30万円
<b>久米桂一郎奨学金基金</b>	<b>藝大クラヴィア賞</b>
【学部】 油画、彫刻 対象 / 給付額(油画1万円、彫刻2万円)	【学部】 ピアノ 対象 / 給付額10万円
<b>内藤春治奨学基金</b>	<b>藝大クラヴィア賞</b>
【学部】 工芸 対象 / 給付額4万円(予定)	【大学院】 ピアノ 対象 / 給付額20万円
<b>原田賞奨学基金</b>	<b>藝大クラヴィア大賞</b>
【学部】【大学院】 工芸 対象 / 給付額未定	【大学院】 ピアノ 対象 / 給付額20万円
<b>藤野奨学金</b>	<b>クロイツァー賞</b>
【学部】【大学院】 鍛金、美術教育 対象 / 給付額10万円(予定)	【大学院】 ピアノ 対象 / 給付額10万円
<b>日本陶磁芸術学会東京藝術大学支部奨学金</b>	<b>宮城賞</b>
【学部】【大学院】 陶芸 対象 / 給付額上限5万円	【学部】 邦楽 対象 / 給付額10万円
<b>藝大デザインN賞</b>	<b>常英賞</b>
【大学院】 デザイン 対象 / 給付額10万円	【学部】 邦楽 対象 / 給付額10万円
<b>吉田五十八奨学基金</b>	<b>浄観賞</b>
【学部】【大学院】 建築 対象 / 給付額未定	【学部】 邦楽 対象 / 給付額2万円
<b>お仏壇のはせがわ賞</b>	<b>中能島賞</b>
【大学院】 文化財保存学保存修復 対象 / 給付額50万円を限度	【大学院】 邦楽 対象 / 給付額5万円
<b>野村美術賞</b>	<b>武藤舞奨学金</b>
【大学院】 博士後期課程修了見込者 対象 / 給付額80万円	【学部】 音楽環境創造、声楽 対象 / 給付額30万円
<b>平成藝術賞</b>	<b>武藤舞奨学金</b>
【学部】 全学科・専攻対象 / 給付額30万円	【大学院】 声楽、音楽音響創造、芸術環境創造 対象 / 給付額30万円
ほか	ほか

## その他の支援制度

卒業・修了作品のうち、特に優秀なものについては本学で買い上げて、パブリック・コレクションとしています(作曲作品、映像作品を含む)。在学中の経済的なサポートはもちろん、大学美術館での買上作品の収蔵・管理といったキャリア支援まで、幅広く学生の創作意欲を後押ししています。また、上記の各種制度以外にも、青山財団、樫山奨学財団、佐藤国際文化育英財団、尚志社、日本交通文化協会、野村財団、フジシール/バッキー・ジング教育振興財団、福島育英会、明治安田クオリティオプライフ文化財団、よんでん文化振興財団などの民間奨学財団、地方公共団体などへ大学から推薦した学生が、毎年、奨学生、助成対象者として採用され、支援を受けています。

## 入学科・授業料

<b>学部・大学院</b>	入学科	338,400円*	授業料前期分	267,900円(年額 535,800円*)
<b>別科</b>	入学科	84,600円*	授業料前期分	267,900円(年額 535,800円*)

※予定額

## その他諸経費

美術学部・大学院美術研究科	学部	修士	博士
学生教育研究災害傷害保険料	3,300円	1,750円	2,600円
学研災付帯賠償責任保険料	1,360円	680円	1,020円
古美術研究旅行積立金	90,000円	—	—
厚生補導助成金※1	30,000円	10,000円	10,000円
同窓会費	40,000円	40,000円※2	40,000円※2

※1 学生の研修および課外活動などを助成するための基金

※2 本学出身者、他大学出身者で未納の者

美術学部・大学院美術研究科 教材費			
学部	日本画(東北写生旅行)	修士	博士
	85,000円	60,000円	60,000円
	(教材費) 50,000円	工芸(ガラス造形) 50,000円	50,000円
	油画 200,000円	デザイン 70,000円	70,000円
	彫刻 290,000円	建築 60,000円	60,000円
	工芸 200,000円	先端芸術表現 130,000円	130,000円
	デザイン 250,000円	文化財保存学保存修復油画 50,000円	50,000円
	建築 140,000円	油画 60,000円	60,000円
	先端芸術表現 260,000円	工芸(ガラス造形) 50,000円	50,000円
	芸術学 33,000円	建築 60,000円	60,000円

音楽学部・大学院音楽研究科	学部	修士	博士
学生教育研究災害傷害保険料	3,300円	1,750円	2,600円
学研災付帯賠償責任保険料	1,360円	680円	1,020円
音楽教育振興会費※1	60,000円	30,000円	—
同窓会費	60,000円	60,000円※2	60,000円※2

別科			
学部	日本画(東北写生旅行)	修士	博士
	85,000円	60,000円	60,000円
	(教材費) 50,000円	工芸(ガラス造形) 50,000円	50,000円
	油画 200,000円	デザイン 70,000円	70,000円
	彫刻 290,000円	建築 60,000円	60,000円
	工芸 200,000円	先端芸術表現 130,000円	130,000円
	デザイン 250,000円	文化財保存学保存修復油画 50,000円	50,000円
	建築 140,000円	油画 60,000円	60,000円
	先端芸術表現 260,000円	工芸(ガラス造形) 50,000円	50,000円
	芸術学 33,000円	建築 60,000円	60,000円

※1 音楽学部の教育研究、学生の課外活動などを支援するため学生の保護者により組織された会の会費

※2 本学出身者、他大学出身者で未納の者

大学院映像研究科		
学部	修士	博士
学生教育研究災害傷害保険料	1,750円	2,600円
学研災付帯賠償責任保険料	680円	1,020円

国際芸術創造研究科		
学部	修士	博士
学生教育研究災害傷害保険料	1,750円	2,600円
学研災付帯賠償責任保険料	680円	1,020円
国際芸術創造研究科振興会費	30,000円	—

## 入学科・授業料の免除・徴収猶予制度

経済的理由などにより学費の納入が困難であり、かつ学業優秀と認められる場合は、選考の上、入学科、授業料が免除・徴収猶予される制度があります。申請要件は次のとおりです。

### 1. 入学科免除

- 経済的理由により授業料の納付が困難で、かつ学業優秀と認められる場合
- 入学前1年以内に、申請者の主たる家計支持者の死亡または申請者本人もしくは申請者の主たる家計支持者が風水害等の災害を受けたことにより、入学科の納付が著しく困難であると認められる場合

※ 学部および別科入学者は上記(2)を満たしていることが必要です。

### 2. 入学科徴収猶予

- 経済的理由により入学科の納付期限までに入学科の納付が困難で、かつ学業優秀と認められる場合
- 入学前1年以内に、申請者の主たる家計支持者の死亡または申請者本人もしくは申請者の主たる家計支持者が風水害等の災害を受けたことにより、入学科の納付期限までに納付が困難であると認められる場合
- その他やむを得ない事情があると認められる場合

### 3. 授業料免除

- 経済的理由により授業料の納付が困難で、かつ学業優秀と認められる場合
- 授業料の納付前1年以内に、申請者の主たる家計支持者の死亡または申請者本人もしくは申請者の主たる家計支持者が風水害等の災害を受けたことにより、授業料の納付が著しく困難であると認められる場合

### 4. 授業料徴収猶予

- 経済的理由により授業料の納付期限までに納付が困難で、かつ学業優秀と認められる場合

大学予算により許可枠が決定するため、資格要件(家計基準・学力基準)を満たした者全員が許可されるものではありませんが、本学では例年、500名程度の申請者のうち約8割の学生が本制度により授業料の全額もしくは半額を免除されています。



藝心寮

所在地：東京都足立区東和 3-12-30

各キャンパスへのアクセスに優れた足立区東和に、平成26年4月、新しい学生寮「藝心寮」がオープンしました。四季折々の樹木に囲まれた広大な敷地に建ち、300戸の個室を完備しています。

管理人、警備員が昼夜対応するほか、通常のマンションより高い耐震性能を確保した環境で、大学生としての新生活を安心してスタートすることができます。また、男女それぞれにエリア分けされ、セキュリティ付きのエントランスホールやエレベーターホールによってプライベートを保ちつつ、交流サロン、談話コーナーをはじめ、寮生同士が交流できる場も用意されています。

大きな特徴として、住宅棟1階に設けられた30室の音楽練習室や、防音室付きの寮室、別棟のアトリエ16室など、学生のアクティブな創作・演奏活動を支援する設備が充実していることが挙げられます。ステージや照明、プロジェクター、スクリーンなどを備えた交流サロンや屋外イベント広場などは多目的に利用することができ、本学の地域交流および文化発信拠点の一つとしても期待を集めています。

居室タイプ	Aタイプ 居室+バルコニー	Bタイプ 居室+防音室+バルコニー
	居室面積：約11帖	居室面積：約18帖
	部屋数：280戸	部屋数：20戸
	賃料：44,900円/月	賃料：83,200円/月



アトリエ

1室あたり約10帖の広さがあり、スライディングウォールで各部屋は仕切られています。仕切りを外せば、展覧会などが開催できる広々とした空間になります。また、アトリエの外には創作コートもあり、屋外での作品制作も可能です。

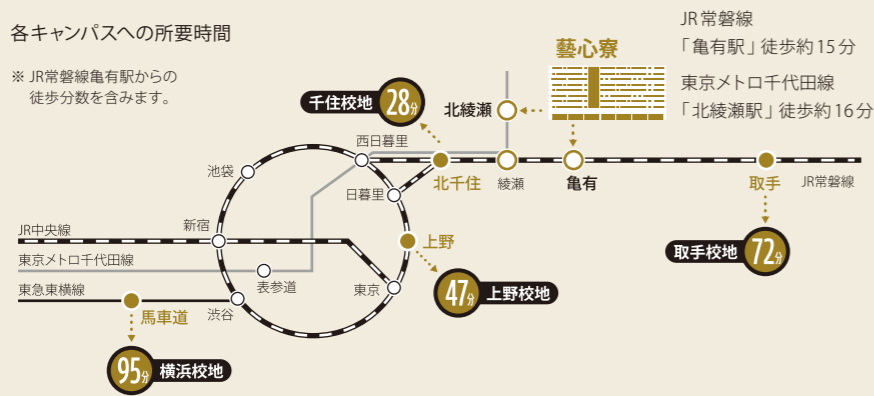


交流サロン

豊かな光が差し込む住宅棟南側に位置。可動式のステージ、スポットライト、プロジェクター、スクリーン、共用キッチンなど多様なコミュニケーションを図ることができる設備が整っています。

各キャンパスへの所要時間

※ JR常磐線亀有駅からの徒歩分数を含みます。



国際交流会館

外国人留学生と外国人研究者に居住の場を提供し、併せて教育研究上の国際交流に寄与することを目的とする施設で、単身室36室、夫婦室6室、家族室2室、共用施設として談話室、多目的室（アトリエ）、音楽練習室が設けられています。また、日本人学生もチューターとして居住し、日本での生活サポートや文化交流に努めています。

那須高原研修施設

学生、教職員の教育・研修および課外活動などのために使用することを目的に設置され、宿泊室のほか多目的に利用できるアトリエ兼研修室、音楽ホール兼大食堂および図書資料室が設けられています。

不忍荘

上野キャンパスにおける正課および課外活動のため、短期の宿泊に利用することを目的とする施設です。

利根川荘

取手キャンパスにおける正課および課外活動のため、短期の宿泊に利用することを目的とする施設です。



学事暦

2016年

- 4月 入学式 4/5  
前期授業開始 4/6 美術 音楽 映像
- 5月 五芸祭 5/19-22
- 6月 入試説明会 6/22 国際  
入試説明会 6/26 美術
- 7月 学科説明会(楽理、音楽環境創造) 7/23-24 音楽  
学科説明会(邦楽) 7/23 音楽  
オープンキャンパス 7/23-24 美術 音楽 映像  
前期授業終了 7/26 美術 音楽 映像
- 9月 藝祭 9/2-4  
大学院美術研究科、大学院音楽研究科入学試験  
大学院国際芸術創造研究科入学試験
- 10月 後期授業開始 10/3 美術 音楽 映像  
開学記念日 10/4
- 12月 取手アートバス 美術  
卒業論文提出期限(芸術学科) 12/2 美術  
卒業論文提出期限(楽理科) 12/5 音楽  
卒業制作提出期限(音楽環境創造科) 12/9 音楽  
千住アートバス 12/17-18 音楽  
博士審査展 12/13-23 美術  
卒業演奏会(～1月) 音楽
- 1月 大学院映像研究科入学試験  
修了制作展Media Practice(メディア映像) 映像  
卒業・修了作品展 1/26-1/31 美術  
修士学位審査演奏会(～2月) 音楽  
後期授業終了 1/30 美術  
後期授業終了 1/31 映像  
卒業作品提出期限(建築、作曲) 1/31 美術 音楽
- 2月 卒業制作・修士論文発表会(音楽環境創造、音楽音響創造、芸術環境創造) 2/10-2/12 音楽  
後期授業終了 2/9 音楽  
大学院美術研究科、大学院音楽研究科入学試験  
大学院国際芸術創造研究科外国人入学試験  
美術学部、音楽学部入学試験(～3月)
- 3月 修了制作展(映画、アニメーション) 映像  
卒業式 3/27

美術学部・研究科 音楽学部・研究科  
映像研究科 国際芸術創造研究科

課外活動

藝祭が開催される晩夏、藝大は若者の自由な精神が最も高揚する季節を迎えます。藝祭は、平素の研究・課外活動の成果を展覧会、演奏会などを通して広く一般に公開する学生主催の大学祭で、中でも、美術学部と音楽学部の学生が共同制作する御輿は、学部の垣根を越えた交流の結晶として注目を集め、上野公園内をパレードする初日は多くの来場者で賑わいます。また、他大学との連合行事として開催される五芸祭(京都市立芸術大学、金沢美術工芸大学、愛知県立芸術大学、沖縄県立芸術大学、東京芸術大学)や多彩なサークル、同好会の場でも、活発な課外活動が行われています。

サークル・同好会

[文化系サークル] 裏千家茶道部、ジャワガムランクラブ、軽音楽研究部、パッサンタタークラブ、ミュージカルエクスペリエンス、サンバパーティー、ケルト音楽研究部、演劇部、パロックダンス部、コンテンポラリーダンス部  
[体育系サークル] 空手道部、ラグビー部、剣道部、山岳部、バスケットボール部、サッカー部、バレーボール部、硬式テニス部、準硬式野球部、バドミントン部  
[同好会] ラート同好会、MANT VIVO、アジア音楽同好会、西洋中世古楽会、虫研究部、藝大和装会、美術部同好会、聖書研究会



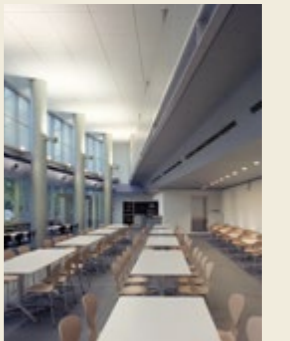
健康管理センター

本学の学生および教職員の健康管理に関する専門的業務を行い、学生および教職員の心身の健康の保持増進を図ることを目的として、以下の業務を行っています。

- 1) 定期および臨時の健康診断並びにその事後措置に関すること。
- 2) 健康相談および応急処置に関すること。
- 3) 精神衛生に関する指導、助言に関すること。
- 4) カウンセリングに関すること。
- 5) 学内の環境衛生および伝染病の予防についての指導に関すること。
- 6) 健康管理の充実向上のための調査、研究に関すること。
- 7) その他、健康の保持、増進について必要な専門的業務に関すること。

主な福利施設

学生、教職員の共用施設として、上野キャンパスの大会館内に集会室、和室、展示室、娯楽室等が設けられています。大学食堂は、大会館内ではキャッスルが、大学美術館内では大浦食堂とオークラが、取手キャンパスでは芸大生協食堂がそれぞれ営業しており、その他、芸大生協売店、画翠(画材、文具)、ミュージアムショップなどが学生生活をサポートしています。





# 入試情報

## 学部 入試状況 (過去3年)

※ 美術学部先端芸術表現科には、帰国子女入試結果を含む ※ 合格者数には追加合格者数を含む

		平成26年度						平成27年度						平成28年度						
		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率	
美術学部	絵画	日本画	25	483 (2)	475 (2)	27	27	19.3	25	442 (3)	435 (3)	27	27	17.7	25	432 (1)	424 (1)	25	25	17.3
		油画	55	1,070 (6)	1,057 (5)	59	59	19.5	55	992 (5)	981 (5)	59	59	18.0	55	1,058 (8)	1,049 (8)	55	55	19.2
	彫刻科	小計	80	1,553 (8)	1,532 (7)	86	86	19.4	80	1,434 (8)	1,416 (8)	86	86	17.9	80	1,490 (9)	1,473 (9)	80	80	18.6
		彫刻科	20	203	199	22	22	10.2	20	185	182	22	22	9.3	20	187 (2)	184 (2)	19 (1)	19 (1)	9.4
	工芸科	デザイン科	45	738 (3)	715 (3)	48 (1)	48 (1)	16.4	45	636 (4)	624 (4)	47	47	14.1	45	713 (7)	694 (7)	45	45	15.8
		建築科	15	69 (3)	69 (3)	16	16	4.6	15	87 (4)	86 (4)	15	15	5.8	15	80 (2)	79 (1)	15	15	5.3
		先端芸術表現科	30	91 (1)	85 (1)	29 (1)	29 (1)	3.0	30	94 (1)	89 (1)	30	30	3.1	30	119 (1)	114 (1)	25	24	5.0
		芸術学科	20	74 (1)	67 (1)	21 (1)	19 (1)	3.7	20	75 (1)	68 (1)	22	22	3.8	20	70 (1)	63 (1)	22	22	3.5
	合計	240	2,966 (16)	2,905 (15)	255 (3)	253 (3)	12.4	240	2,740 (21)	2,691 (21)	255	255	11.4	240	2,915 (25)	2,861 (22)	236 (1)	235 (1)	12.5	
	音楽学部	作曲科	15	43	42	15	15	2.9	15	35	34	15	15	2.3	15	46	44	15	15	3.1
声楽科		54	248	247	54	54	4.6	54	212	212	54	54	3.9	54	206	205	54	54	3.8	
器楽科		98	453	447	106	106	4.6	98	429	423	99	99	4.4	98	412	405	102	102	4.2	
指揮科		2	5	5	1	1	2.5	2	11	10	2	2	5.5	2	5	5	2	2	2.5	
邦楽科		25	17	17	17	17	0.7	25	35 (1)	35 (1)	26	26	1.4	25	41	41	26	26	1.6	
楽理科		23	43	43	24	23	1.9	23	40	38	24	24	1.7	23	37	37	23	23	1.6	
音楽環境創造科		20	100 (4)	97 (4)	20 (1)	20 (1)	5.0	20	87 (1)	87 (1)	20 (1)	20 (1)	4.4	20	94 (1)	92 (1)	20	20	4.7	
合計		237	909 (4)	898 (4)	237 (1)	236 (1)	3.8	237	849 (2)	839 (2)	240 (1)	240 (1)	3.6	237	841 (1)	829 (1)	242	242	3.5	
総合計		477	3,875 (20)	3,803 (19)	492 (4)	489 (4)	8.1	477	3,589 (23)	3,530 (23)	495 (1)	495 (1)	7.5	477	3,756 (26)	3,690 (23)	478 (1)	477 (1)	8.0	

## 大学院 入試状況 (修士課程)

平成28年度	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率
絵画	50	142 (18)	131 (14)	52 (5)	52 (5)	2.8
彫刻	13	33 (6)	33 (6)	16 (2)	16 (2)	2.5
工芸	26	37 (8)	37 (7)	31 (2)	31 (2)	1.4
デザイン	30	66 (23)	46 (7)	34 (3)	33 (3)	2.2
建築	18	59 (5)	48 (4)	18	18	3.3
先端芸術表現	22	46 (5)	44 (5)	24 (3)	21 (3)	2.1
芸術学	21	52 (4)	40 (4)	24 (1)	22 (1)	2.5
文化財保存学	18	46 (13)	41 (12)	18 (2)	17 (2)	2.6
GAP	18	24 (18)	22 (17)	13 (7)	12 (6)	1.3
合計	216	505 (100)	442 (76)	230 (25)	222 (24)	2.3
作曲	7	15 (2)	13 (2)	6	6	2.1
声楽	12	105 (3)	102 (3)	13	13	8.8
オペラ	8	56	54	9	9	7.0
器楽	45	150 (14)	145 (14)	55 (4)	54 (4)	3.3
指揮	3	2	1	1	1	0.7
邦楽	9	12	11	5	5	1.3
音楽文化学	29	41 (12)	40 (11)	16 (5)	16 (5)	1.4
合計	113	381 (31)	366 (30)	105 (9)	104 (9)	3.4
映像	32	65 (20)	61 (19)	24 (10)	23 (10)	2.0
メディア映像	16	28 (4)	27 (4)	14	12	1.8
アニメーション	16	34 (8)	32 (5)	15 (1)	15 (1)	2.1
合計	64	127 (32)	120 (28)	53 (11)	50 (11)	2.0
アートプロデュース	10	38 (3)	37 (3)	13 (2)	12 (2)	3.8
合計	10	38 (3)	37 (3)	13 (2)	12 (2)	3.8
総合計	403	1,051 (166)	965 (137)	401 (47)	388 (46)	2.6

## 大学院 入試状況 (博士後期課程)

平成28年度	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率
美術研究科	25	63 (19)	60 (17)	30 (5)	30 (5)	2.5
文化財保存学	10	10 (7)	10 (7)	9 (2)	8 (2)	1.0
音楽研究科	25	26 (10)	25 (8)	12 (2)	12 (2)	1.0
映像研究科	3	9 (4)	8 (4)	2 (1)	2 (1)	3.0
合計	63	108 (40)	103 (36)	53 (10)	52 (10)	1.7

## 別科 入試状況

平成28年度	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	倍率
別科	-	46	44	5	5	-
声楽	-	46	44	5	5	-
器楽	-	78	71	13	12	-
邦楽	-	16 (1)	16 (1)	9	4	-
合計	30	140 (1)	131 (1)	27	21	4.7

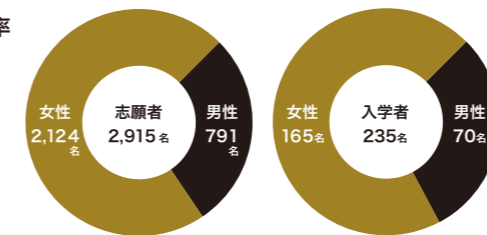
全表共通：  
注1) 倍率 = 志願者数 ÷ 募集人員 (外国人留学生は含みません)。  
注2) 括弧内の数字は外国人留学生で外数です。

## 平成28年度 美術学部 志願者・入学者詳細

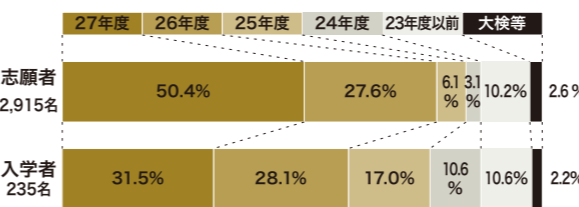
出身高校等所在地					
区分	志願者	入学者	区分	志願者	入学者
北海道	53	5	中国地区	44	5
東北地区	75	5	鳥取県	2	0
青森県	7	1	島根県	2	0
岩手県	7	2	岡山県	10	3
宮城県	16	0	広島県	23	2
秋田県	4	1	山口県	7	0
山形県	3	0	四国地区	31	4
福島県	38	1	徳島県	0	0
関東地区	1,927	157	香川県	19	4
茨城県	63	5	愛媛県	8	0
栃木県	55	3	高知県	4	0
群馬県	40	4	九州地区	152	13
埼玉県	203	10	福岡県	52	6
千葉県	259	23	佐賀県	15	1
東京都	903	79	長崎県	26	1
神奈川県	404	33	熊本県	24	4
中部地区	425	28	大分県	5	0
新潟県	7	0	宮崎県	8	0
富山県	5	0	鹿児島県	16	1
石川県	10	0	沖縄県	6	0
福井県	4	1	大検等	70	5
山梨県	10	0	合計	2,915	235
長野県	33	1			
岐阜県	71	4			
静岡県	71	7	外国	25	1
愛知県	214	15	帰国子女	2	0

近畿地区	三重県	滋賀県	京都府	大阪府	兵庫県	奈良県	和歌山県
138	29	11	14	35	38	7	4
13	2	1	4	2	3	1	0

### 男女比率



### 高校等卒業年度



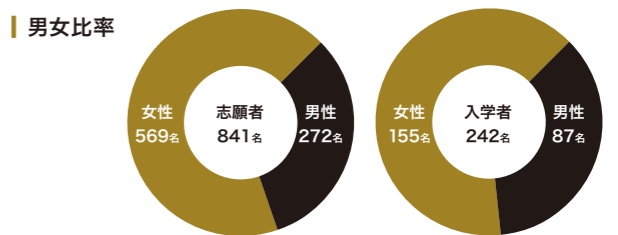
注1) 外国人留学生、帰国子女入試は外数とし、一般入試のみの数字。  
 注2) 帰国子女入試は、美術学部先端芸術表現科のみで実施。

## 平成28年度 音楽学部 志願者・入学者詳細

出身高校等所在地					
区分	志願者	入学者	区分	志願者	入学者
北海道	22	4	中国地区	29	9
東北地区	35	14	鳥取県	2	2
青森県	1	1	島根県	1	0
岩手県	6	2	岡山県	9	2
宮城県	12	6	広島県	12	4
秋田県	3	0	山口県	5	1
山形県	4	1	四国地区	17	9
福島県	9	4	徳島県	1	0
関東地区	469	123	香川県	10	8
茨城県	24	7	愛媛県	2	1
栃木県	11	4	高知県	4	0
群馬県	14	2	九州地区	56	14
埼玉県	49	11	福岡県	23	11
千葉県	48	10	佐賀県	1	0
東京都	236	84	長崎県	2	0
神奈川県	87	13	熊本県	8	0
中部地区	118	27	大分県	7	2
新潟県	6	1	宮崎県	4	0
富山県	9	2	鹿児島県	9	1
石川県	1	0	沖縄県	2	0
福井県	0	0	大検等	7	3
山梨県	3	2	合計	841	242
長野県	25	4			
岐阜県	2	1			
静岡県	14	1	外国	1	0
愛知県	58	16	帰国子女	2	0

近畿地区	三重県	滋賀県	京都府	大阪府	兵庫県	奈良県	和歌山県
88	4	6	24	16	33	1	4
31	0	2	8	5	14	0	2

### 男女比率



### 高校等卒業年度



学生募集要項、入学者選抜要項は本学の入試情報サイトに掲載されます。

1 入学試験に関すること		
<p><b>美術学部・美術研究科</b></p> <p><b>Tel: 050-5525-2122</b> 美術学部教務係</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● <b>美術学部学生募集要項</b> WEB掲載開始:平成28年11月下旬 出願期間:平成29年1月23日～2月1日</li> <li>● <b>美術学部学生募集要項(帰国子女)</b> WEB掲載開始:平成28年11月下旬 出願期間:平成29年1月上旬</li> <li>● <b>大学院美術研究科&lt;修士課程&gt;学生募集要項</b> WEB掲載開始:平成28年7月中旬 出願期間: 第1期 平成28年8月上旬 第2期 平成28年11月下旬</li> <li>● <b>大学院美術研究科&lt;修士課程&gt;学生募集要項(外国人留学生)</b> ・グローバルアートプラクティス専攻 WEB掲載開始:平成28年6月下旬 出願期間:平成28年8月上旬 ・文化財保存学専攻 WEB掲載開始:平成28年10月下旬 出願期間:平成28年11月下旬</li> <li>● <b>大学院美術研究科&lt;博士後期課程&gt;学生募集要項</b> WEB掲載開始:平成28年7月下旬 出願期間:平成28年11月下旬</li> <li>● <b>大学院美術研究科研究生募集要項</b> 発行時期(配布開始):平成28年10月下旬 出願期間:4月入学(国外)12月上旬 4月入学(国内)2月上旬 10月入学6月上旬</li> </ul>	<p><b>音楽学部・音楽研究科</b></p> <p><b>Tel. 050-5525-2309</b> 音楽学部教務係</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● <b>音楽学部学生募集要項(含別科)</b> WEB掲載開始:平成28年12月上旬 出願期間:平成29年1月23日～2月1日</li> <li>● <b>大学院音楽研究科&lt;修士課程&gt;学生募集要項</b> WEB掲載開始:平成28年7月上旬 出願期間: ・作曲以外 平成28年8月上旬 ・作曲のみ 平成29年1月上旬</li> <li>● <b>大学院音楽研究科&lt;修士課程&gt;学生募集要項(外国人留学生)</b> WEB掲載開始:平成28年10月下旬 出願期間:平成29年1月上旬</li> <li>● <b>大学院音楽研究科&lt;博士後期課程&gt;学生募集要項</b> WEB掲載開始:平成28年7月上旬 出願期間:平成29年1月上旬</li> <li>● <b>大学院音楽研究科研究生募集要項</b> 発行時期(配布開始):平成28年10月下旬 出願期間:平成29年1月上旬</li> </ul>	<p><b>映像研究科</b></p> <p><b>Tel. 050-5525-2675</b> 映像研究科教務係</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● <b>大学院映像研究科&lt;修士課程&gt;学生募集要項</b> WEB掲載開始:平成28年8月上旬 出願期間: ・映画専攻(監督、脚本領域)、 メディア映像専攻、アニメーション専攻 平成28年11月下旬～12月上旬 ・映画専攻(プロデュース、撮影照明、美術、 サウンドデザイン、編集領域) 平成29年1月上旬～1月中旬</li> <li>● <b>大学院映像研究科&lt;博士後期課程&gt;学生募集要項</b> WEB掲載開始:平成28年8月上旬 出願期間:平成28年11月下旬～12月上旬</li> <li>● <b>大学院映像研究科研究生募集要項</b> 発行時期(配布開始):平成28年11月中旬 出願期間:平成29年2月下旬</li> </ul>
<p><b>国際芸術創造研究科</b></p> <p><b>Tel. 050-5525-2754</b> 国際芸術創造研究科教務係 E-mail: info-ga@ml.geidai.ac.jp</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● <b>大学院国際芸術創造研究科&lt;修士課程&gt;学生募集要項</b> WEB掲載開始:平成28年7月 出願期間:平成28年8月下旬</li> <li>● <b>大学院国際芸術創造研究科&lt;修士課程&gt;学生募集要項(外国人留学生)</b> WEB掲載開始:平成28年11月 出願期間:平成29年1月中旬</li> </ul>		

2 大学入試センター試験に関すること、学部入学資格に関すること、キャンパス見学に関すること		
<p><b>学生課入学試験係</b></p> <p><b>Tel. 050-5525-2075</b> 学生課入学試験係 E-mail: nyuusi-k@ml.geidai.ac.jp</p>		
<p><b>入学者選抜要項</b> WEB掲載開始:平成28年7月下旬</p>	<p><b>大学案内</b> 発行時期(配布開始):平成28年6月下旬</p>	<p><b>大学入試センター試験受験案内</b> 発行時期(配布開始):平成28年9月1日 [窓口配布のみ]</p>
<p>電話による問い合わせの場合は、原則として志願者本人が行ってください。(月曜～金曜日 9:00～12:30、13:30～17:00 土曜・日曜・祝祭日は除く)</p>		

東京藝術大学は平成28年度に実施するすべての入試にインターネット出願を導入します。これにより、出願はパソコンやスマートフォンから行うこととなり、併せて学生募集要項の冊子化を廃止します。\*音楽学部SSP入試は除きます

### インターネット出願のメリット

- ① 募集要項や出願書類の取り寄せが不要になります。
- ② エラーチェック機能により願書の記入間違いがなくなります。
- ③ 24時間いつでもどこからでも出願できるようになります。

### インターネット出願の手順



<http://admissions.geidai.ac.jp>



詳しくは東京藝術大学入試情報サイトで確認してください。

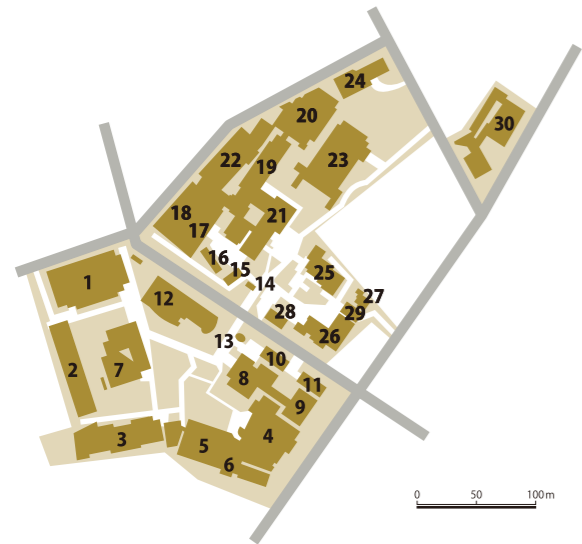
# キャンパス / アクセス

本学のキャンパスは「上野キャンパス」、「取手キャンパス」、「横浜キャンパス」、「千住キャンパス」があります。  
 取手キャンパスでは、美術学部先端芸術表現科の2年次から4年次に対して授業を行っています。  
 千住キャンパスでは、音楽学部音楽環境創造科が卒業時まで授業を行います。  
 その他はすべて上野キャンパスで授業を行います。  
 横浜キャンパスでは、大学院映像研究科が展開しています。



### 上野キャンパス

tel : 050-5525-2075  
 〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8  
 JR 上野駅(公園口)または鶯谷駅下車 徒歩10分  
 東京メトロ 銀座線・日比谷線 上野駅下車 徒歩15分  
 東京メトロ 千代田線 根津駅下車 徒歩10分  
 京成電鉄 京成上野駅下車 徒歩15分



- 1 美術学部絵画棟
- 2 美術学部彫刻棟
- 3 美術学部金工棟
- 4 総合工房棟 (A棟)  
(芸術情報センター)
- 5 総合工房棟 (B棟)
- 6 総合工房棟 (C棟)
- 7 美術学部中央棟  
(写真センター)
- 8 附属図書館
- 9 大学美術館 (旧館)
- 10 陳列館
- 11 正木記念館
- 12 大学美術館
- 13 第1守衛所
- 14 第2守衛所
- 15 赤レンガ1号館
- 16 赤レンガ2号館
- 17 音楽学部1号館
- 18 音楽学部2号館
- 19 音楽学部3号館
- 20 音楽学部4号館  
(演奏芸術センター、言語・  
音声トレーニングセンター)
- 21 音楽学部5号館
- 22 音楽学部練習ホール館
- 23 音楽堂
- 24 附属音楽高等学校
- 25 事務局・保健管理センター
- 26 学生会館
- 27 不忍荘
- 28 社会連携センター
- 29 Arts & Science LAB.
- 30 体育館



### 取手キャンパス

tel : 050-5525-2543  
 〒302-0001 茨城県取手市小文間5000  
 JR 常磐線 取手駅\* 東口から大利根交通バスで約15分(約5.9km)  
 「東京藝術大学前」下車  
 ※上野駅から約40分



- 1 美術学部共通工房棟
- 2 美術学部専門教育棟
- 3 メディア教育棟
- 4 美術学部登窯
- 5 野外制作場
- 6 福利施設
- 7 短期宿泊施設
- 8 大学美術館取手館
- 9 守衛所
- 10 アートヴィレッジ
- 11 屋外運動場



### 横浜キャンパス

tel : 050-5525-2673  
**馬車道校舎**  
 〒231-0005 神奈川県横浜市中区本町4-44  
 横浜高速鉄道 みなとみらい線 馬車道駅下車すぐ

**万国橋校舎**  
 〒231-0002 神奈川県横浜市中区海岸通4-23 万国橋会議センター 3F  
 横浜高速鉄道 みなとみらい線 馬車道駅下車 徒歩5分

**元町中華街校舎**  
 〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町116  
 横浜高速鉄道 みなとみらい線 元町・中華街駅下車 徒歩8分  
 JR 根岸線 石川町駅下車 徒歩8分



### 千住キャンパス

tel : 050-5525-2727  
 〒120-0034 東京都足立区千住1-25-1  
 JR / 東京メトロ 千代田線・日比谷線 / 東武鉄道 東武伊勢崎線 /  
 首都圏新都市鉄道 つくばエクスプレス 北千住駅(西口)下車 徒歩5分

## 東京藝術大学 大学案内 2017

編集・発行 東京藝術大学 学生課  
 〒110-8714  
 東京都台東区上野公園12-8  
 発行年日 2016年6月  
 デザイン eight  
 UNIVERSE NOTE  
 協力：撮影 永井 文仁 (美術学部附属写真センター)  
 TAKE-O (熊工房)

本冊子の図版および文章の無断転載を禁ずる。  
 本冊子に掲載している情報は2016年5月時点のものです。  
 最新の情報については、本学Webサイト等をご確認ください。

<http://www.geidai.ac.jp/>



